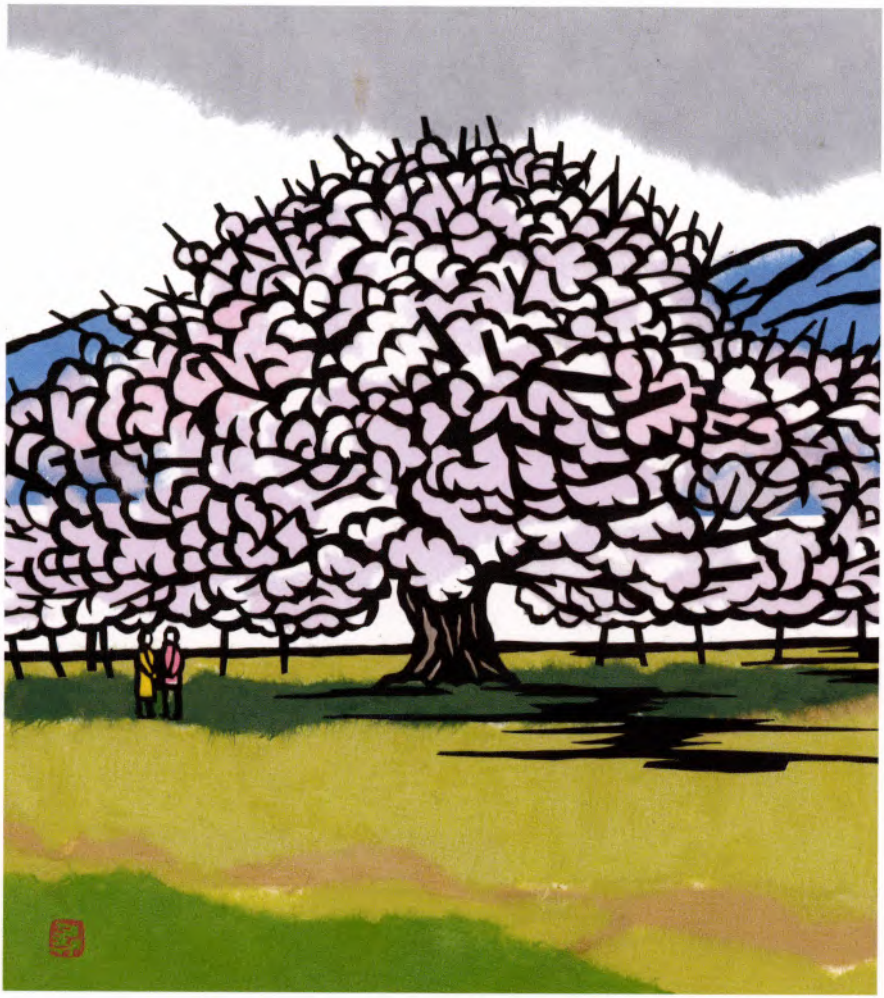
川柳塔

平成三十一年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一〇三号



日川協加盟

No.1103

四月号

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

お待たせいたしました！
第四刷出来！

川柳の理論と実践

新家完司・著

良い川柳の条件と作り方
あなたの奥底にねむる川柳力を目覚めさせる！
川柳における重要項目を理論と実践から
多角的に捉えた
総合川柳入門の決定版！

実践を意識した豊富な例句で学ぶ作句法・選句法・心得
初心者はもちろん、中級者やベテランにも役立つ

〒689-2303　鳥取県東伯郡琴浦町徳万597　新家完司
326頁。送料＋消費税＝2,000円　FAX 0858-52-2449

ご注文は下記へ、ハガキかFAXにて。
お支払いは到着後で結構です。

風格を推す

小島　蘭幸

川柳雑誌改題、川柳塔は昭和40年10月に創刊されました。昭和41年10月号に第一回路郎賞が発表されています。受賞者は内藤きさ子氏でした。

内職に藤色があるたのしさよ　　きさ子

第一回川柳塔賞は、昭和42年10月号に発表されています。受賞者は、竹原川柳会の好作家、三宅不朽さんです。

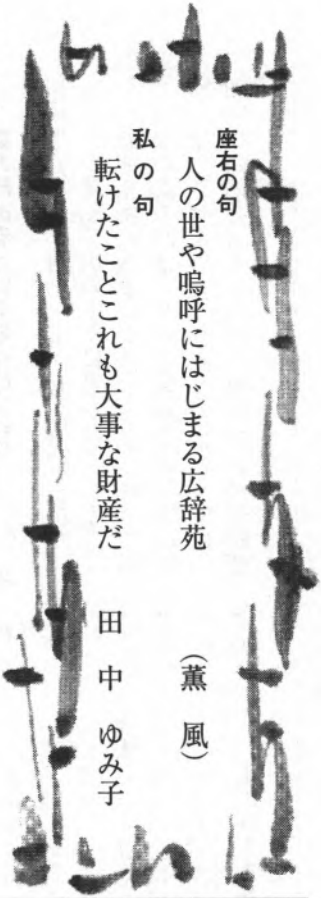
雲の峰あるけばあるくほどひとり　　不朽

川柳塔賞選考委員の一人、橘高薫風先生は「風格を推す」と題して次のように書かれています。

〃路郎先生の辞世の句は、「雲の峰」であった。この句の雲の峰は、その恩師終焉の「雲の峰」を濃厚に感じさせる。否、不朽さんにとっては、雲の峰即麻生路郎と云えるのだ。恩師思慕の情が惻々と迫ってくる誠に格調高い句と云うことが出来る。「番傘」には「番傘」の風格が、「ふあうすと」に「ふあうすと」の伝統に培われた一種艶やかで柔軟な句風が句ににじみ出ているように、嘗て路郎先生の薫陶を受けた不朽洞会員の句には、云うなれば川柳雑誌的な風格というものが存在した。それは人間世界の種々相の深奥を穿ち、批判精神を盛り上げた骨太のおおらかな句風だったが、この句は、その風格を、麻生路郎の求道精神諸共引き継いで、見事に表現し得た。勿論、この句、一読人間諷評の川柳で俳句とまぎらわしいことはない。〃

三宅不朽さんは、川柳塔改題第2号から投句されていて、いきなり巻頭頁に5句入選されています。川柳塔社同人としても活躍されていましたが、15年前に肺気腫を患い、本年2月16日にご逝去されました。不朽さんの訃報を聞いて一番に浮かんだのが「雲の峰」の句と、薫風先生の「風格を推す」の名文章です。多くの人に読んで頂きたくここに全文を掲載させて頂きました。ここまで書いて酸素ボンベと一緒に句会に出席されていた薫風先生と不朽さんが鮮やかに浮かんできました。

雲の峰あなたの一句忘れない　　蘭幸



座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑　（薫　風）

私の句

転けたことこれも大事な財産だ　田中　ゆみ子

川柳塔　四月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「箱根芦ノ湖の春」

■巻頭言　風格を推す……小島蘭幸…(1)
『あぶその』の頃……西出楓楽…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
川柳塔の川柳讃歌 ⑪⑦……木津川　計…(41)
自選集……(42)
句集の森……(45)
温故知新……(45)
水煙抄……西出楓楽選…(46)
橘高薫風句抄……(66)
英語 de Senryu ⑧⑧……吉村侑久代…(67)
誹風柳多留一二篇研究 70……(68)
愛染帖……新家完司選…(70)
檸檬抄「ぴかぴか」……川端一歩・山岡冨美子共選…(74)

『あぶその』の頃

西出　楓楽

ここに一台のピアノがある／時として
不協和音を発する／現代音楽はこの不
協和音を／巧みに取り入れた／音楽の世
界は自由である／川柳も　また然り……

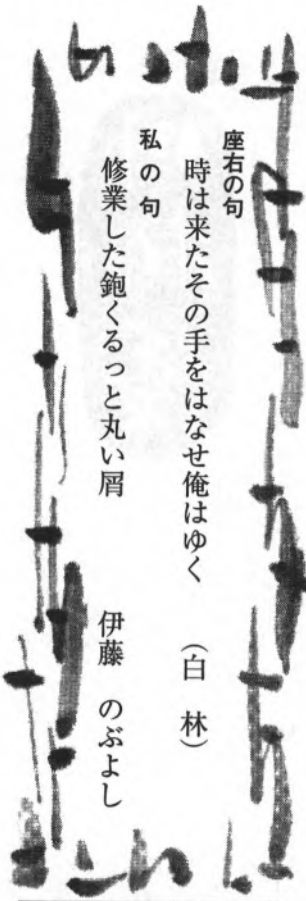
――昭和川柳クラブ――

昭和54年4月に川柳を始めて丸3年目の、昭和57年2月頃、川柳塔の大御所、故・清水白柳さんのご子息・清水健司さんからお誘いが掛かった。

〝昭和生まれの川柳愛好家が超結社で集まろう〟と、「ふあうすと」の伊佐次無成さんが中心になって、「昭和川柳クラブ」が結成される運びとなった。4月29日に発足句会をするから、仲間にならないか、と。

その頃、男性5人に女性は私1人という家族構成で、家事に追われる日々であったが、「川柳塔本社句会」「南大阪句会」と勉強会の「双葉句会」に毎月参加していた。何れも夜6時からなので5人分の

せんりゅう飛行船 ⑩……新家完司…(77)
一路集（「先輩」……江見見清選…(78)
「ごめん」……西田美恵子選…(79)
初歩教室「守る」……居谷真理子…(80)
川柳塔鑑賞……太田扶美代…(82)
水煙抄鑑賞……宇賀史郎…(84)
川柳塔WEB句会「電話」……島田駱舟・斉尾くにこ共選…(85)
『麻生路郎読本』余滴 (51)……桒原道夫…(86)
インスピレーション・ナビ 印象吟……大西泰世…(88)
三月本社句会……板垣孝志…(90)
句会燦燦……(94)
各地柳壇（佳句地十選／岸本宏章・松原寿子）……(95)
■ショートエッセイ……西村哲夫・源田八千代…(109)
四月各地句会案内……(110)
柳界展望……(112)
■編集後記（ひとこと／弘津秋の子）……朱夏・勝弘…(114)



座右の句

時は来たその手をはなせ俺はゆく　（白林）

私の句

修業した鉋くるっと丸い屑　伊藤のぶよし

夕食を並べ、いそいそと出掛けたものだった。家事の暇を盗んでの作句は、とても楽しかった。

そんな折の誘いで、会場が近く午後の句会だったので喜び勇んで参加した。当時は現在のように結社間の往き来がフリーでなかったので、親しい人もなく参加者70人の中で身を小さくしていた。句会が始まり披講を聴いているうちに、目の鱗がポロポロ落ち元気が出てきた。

――川柳はこんなに自由でいいのだ――

かくして、約2か月後、不協和音という意のタイトルのついた機関誌『あぶその』創刊号が届いた。表紙裏には頭書の文言がある。A5判40頁程の冊子だが、柳論やエッセイが山積、毎月内容がとても充実していた。

ところが昭和61年1月発行の19号でぷっつりと終わっている。会へは深く関わっていなかったため、理由を尋ねる人もなく、機会も逸してしまった。

それから幾星霜、昭和川柳クラブの創立句会でとれた目の鱗は、今も大切に心にしまい込んでいる。

川柳塔

小島蘭幸選

沖縄県　森山文切

帰省する前に前髪切っておく
来るはずのない人が来る祝賀会
憧れの人の香りか檜風呂
妄想を超えた現実カンツバキ
恋じゃないはずだパンケーキのはずだ
くす玉は割れた後戻りはしない

笠岡市　藤井智史

猛毒の恋に毎日魘される
お互いに魔法掛け合う両想い
粉塵にまみれる恋も婚活も
顔突っ込みながら君のケーキ食う
羽ばたける夢 川柳塔の臥竜
川柳塔に臥竜鳳雛寄って来い

松江市　石橋芳山

交差点三角波になっている
雑踏の街に流れる離岸流
まだ夢を見ている自動改札機
踏んづけた昨日がそのままで残る
足裏を見ることもなく麒麟の死
眠られぬ金魚が溺れかけている

橿原市　居谷真理子

深呼吸しよう充分悲しんだ
錠剤が冬の白さで手の平に
ぼたん雪やさしいものを乗せて降る
言の葉を積もらせてゆく老いてゆく
立春の米しっとりと手になじむ
今日の日を生ききるために君が要る

鳥取県　斉尾くにこ

無言でも自然な夫との時間
笑いあう事実も嘘もごちゃまぜで
バラよりもヒマワリよりも和水仙
挫折するたびに挫折が背を押す
寒い日の湯たんぽはまだ温かい
仲間だと信じたパスを受け取った

河内長野市　山岡冨美子

アンニョンもニイハオも往く春の駅
さよならは言わずに消える牡丹雪
参道で遠い記憶を買っている
八十路往く転ばぬように丁寧に
裸木の失うものがない自信
残高はたっぷり友という資産

大阪市　谷口義

起死回生歯ブラシを替えてみる
予選で落ちてからの人生だった
恵方巻食べたくらいで変わる運
一度目は失敗をする癖がある
この世には傘を忘れたままである
女の中の女は男前だった

大阪市　平井美智子

あんパンを買う列にいるおじいさん
じいちゃんが鞍馬天狗であった頃
淋しさを逃がす真昼の非常口
ライオンの耳に聞こえてくる挽歌
夕焼けにギュっと抱かれてまた明日
早咲きの桜に逢いにゆく予定

桜井市　安土理恵

ストッキング脱ぎわたくしに戻る
着ぶくれの脱皮こんなに手間どって
わびしさと向き合うときの江戸切子
白菜の半分を買う　余寒
柊の棘の抜けないまま暮れる
小吉にふっと面影ひとつ浮き

（愛しき者へ）

篠山市　酒井真由

夢ばかり食べて大きくなりました
陽はまた昇る何の不思議はなけれども
逝くひとに生まれるひとにさくら咲く
熱はないかガスは出たかと医師が問う
グッドバイよもつひらさかひとり旅
また会おう幾たび生まれかわるとも

松山市　柳田かおる

保護色の中で言いたいことをいう
ブーメラン真摯に生きることにする
見えないものがこころの隙間うめている
ぜいたくに思えるわたくしの不満
コーヒー豆ごときに拘っているのです
お招きにあずかりましたのし袋

箕面市　中山春代

「残日録」大先輩が風になる
風花のポストにふいの遺作集
六甲の雪を見に行く観覧車
別々の古里見てる天気予報
落語聞くシニアサロンのかぶりつき
蝋梅が光の春をつれてくる

土佐清水市　辻内次根

穏やかな今がうれしい薬缶の湯
それぞれに決まった過疎の佇まい
楽しみは寝ることベッドメーキング
よく噛んでいたら甘味が増して来る
あかぎれに沁みる一人の台所
立春という字にホッとする命

寝屋川市　伊達郁夫

一歩引く余裕がつくる笑い皺
蛇行した水だ優しい味がする
まだ走る私の虹を見るまでは
究極の同情だろう義理のチョコ
折鶴になって恋追う再生紙
大声で叫ぶと象がついてくる

大阪市　江島谷勝弘

話かけないでください読書中
さがしものなら井上陽水に聞けば
お裾分けしてほしい隣のカレー
この店にするワンドリンクサービス
転ぶのは得意だがジャンプはできぬ
私の誕生日は祝日とする

鳥取市　両川無限

回転ドア抜けたら春が待っていた
素朴さの中に冬木立の気迫
消去法ついにターゲットは私
素っピンになった女の底力
押さないでまだまだ未練あるこの世
生き方が指の形に出てしまう

八尾市　内海幸生

異常気象何するものぞ桜咲く
お供えをせずにお下がり貰ったが
口惜しさはインフル如きに負けたこと
入院の無聊を消しに孫曽孫
文楽も歌舞伎もテレビ一等席
震災の世を生き抜ける幸がある

三田市　堀正和

大寒をゆったり過ごす湯治宿
屋久島を借景にした砂風呂へ
旅帰り体に馴染むマイベッド
定年後自由業だと書いてます
萎まぬよう笑い袋を膨らます
晴れならば参加しますと言う返事

大洲市　中居善信

臭覚も触覚も消え八十三
酒少し飲めたら角が取れるのに
焼酎に蕎麦が合うのか吉田類
まだ野良に佇つ老骨に鞭打って
本音しか口にしません一途です
届かない思い綴っているノート

岸和田市　岩佐ダン吉

忙しいを連発冴えぬ男だな
この道はひとりではない振り返る
過去を消し居心地悪くないですか
風向きを読んで真ん中辺にいる
色あせて綻び目立つ旗を抱く
そうですか怒っていると読めますか

藤井寺市　鴨谷瑠美子

ちちははも振り向きながら生きたのか
今もまだ心に温い青春譜
春風に造花も蕾欲しくなり
身体のどこも秘密を守らなくなった
少しずつ老いの匂いのする鏡
生ごみはみな買って来たものばかり

出雲市　岸桂子

愛された記憶と生きる影法師
ひとつ老い昨日の爪を切っている
無駄花も咲かせて自分史をとじる
茜雲明日の約束など出来ぬ
味噌汁を呑む時一人だと思う
疲れてる舌ゆっくりと眠らせる

大阪市　宇都満知子

あと四年兄ちゃんの歳に追い付く
遺影は笑顔兄ちゃんの七回忌
四十歳嫁は看護師デビューです
いつだって主役私のスクリーン
諦めていたピアノを弾いている私
長い足畳の居間が減りました

犬山市　金子美千代

灯油売りに来てくれる便利な田舎
賀状来ぬ人にやっぱりある異変
あの人この人逝ってしまってご破算に
弔いも祝いも似合う胡蝶蘭
映像で堪能できた雪の京
ひとりイコール寂しいなんて決めないで

大阪府　米澤俶子

この先は分からぬ神に貰う地図
ブルーシート一つづつ消え雪もよい
撥ね返すバネだんだんと緩くなる
お名前で大体お歳分ります
着ぶくれて豪雪の地のニュース見る
カチコチの脳を耕す新刊書

西宮市　福島弘子

指切りの約束爺はすぐ忘れ
孫小五足のサイズももう抜かれ
びっくりだ眉の中にも白髪見え
海に入る夕日明日への活もらう
同窓の先輩と知り座が和む
亡母の手袋片方なくし気が咎め

春眠をスポーツ欄が揺り起こす
申告書現役並みに手厳しい
晩酌へ宣戦布告消費税
お早うとお休みだけで今日も済み
断捨離と反りが合わない自尊心

塩竈市　木田比呂朗

検尿コップ生きてる印しかと見る
あみだ籤一本たして右左
自問自答まだまだ出来るまだら惚け
雪解けの雫に弾む座禅草
なごり雪とけてみたって過疎の村

男鹿市　伊藤のぶよし

寒風にカレーの香り冴えてくる
冬至過ぎ明るさを増す雪捨ても
正月の酒はグラスで舞う金粉
雪捨てをそそくさ済ませテニス見る
降る雪に喜怒哀楽のある津軽

弘前市　浅田隆樹

甘味処男の憂さが捨てられる
モデルには水玉わたしには惰円
徒歩五分問題なのは膝頭
トランプの中にハートのエースなく
平成に確とピリオド打つ日記

弘前市　稲見則彦

拉致家族に同情ばかり年を越す
敵もさる者易易決めぬ北の島
テレビ効果親子賑わう雪まつり
外つ国人が雪の夜ざくら美しと
ウォーキング足を鍛えて景色あり

弘前市　今愁女

息抜きのつもりの趣味に四苦八苦
帽子好き理由はお察しご自由に
後期高齢もう気にしない生命線
目からウロコ辞書に感謝の暇つぶし
三代目縁の温みいとこ会

弘前市　高橋洋子

日本近海避けて回遊するクジラ
ほどほどの酒で洗ってやるいのち
琴線の触れ合う友と昼の酒
生涯を我流で通す唐辛子
植木好きの私に合った樹木葬

千葉市　海老池洋

音立てぬように深夜のクロスワード
一晩中寝る体勢をととのえる
立ち止まり挨拶をするこの頃は
さびしかった頃の靴先とがってた
空っぽでカラスの真似をしてみる日

東京都　川本真理子

東京都　まえで　とよこ

風邪ひきに負けてしまった二週間
誰やのん溜めたしんぶん捨てたのは
大声でていつのまにやら咳とまる
育児休暇父のてのひら児をささえ
尊きかな戦争のない三十年

八王子市　川名洋子

連休を待っていた頃若かった
歓呼あげ雪景色見るツアー客
支え合い歩幅も合わす老いの坂
眉尻を上げて北風向かい風
長生きをする自信あり長い眉

横浜市　菊地政勝

我が家だけ取り残された好景気
少子化に母校ひっそり消えてゆく
朝ドラのひと時妻へお付き合い
通り道片付けておく掃除ロボ
年金の箍にはまって抜け出せぬ

さいたま市　星野育子

雪予報週末の街ひっそりと
時には立ち止まりファイナルアンサー
もう何度使い果した仏の顔
無為無策児相の義務はどうしたの
墓・賀状仕舞何かと忙しい

上尾市　中村伸子

幸せか娘がふっくらと頼もしい
見上げれば静かに見てる昼の月
家売るまで認知症にはなれません
ジルバなど踊った足であったのに
自分のは物忘れだと思いたい

朝霞市　前田洋子

雨こんこ今日は宅配ピザにする
然りげ無い親切スマートなあなた
申し分のない人だけど妻が居る
天才に努力で勝ってケガに泣く
勿体無い十億破棄の恵方巻

犬山市　関本かつ子

子は親を選べぬＤＶの悲劇
テキパキとこなす左脳も年をとり
オイなどと昭和のままでいる夫
プランター並べ通過はお断り
無印の店が似合っている財布

愛知県　早川遡行

絶妙な力加減で割るタマゴ
不満なく泥の中でも生きている
温泉の浴衣の丈の長短か
腕組んで歩くも夫婦久し振り
チョコレート貰い悩んだ時期もあり

鈴鹿市　小河柳女

二つの手足もう少しがんばってね
レールからはずれたい日のユウウツや
花が咲く愛の言葉が添えてある
新しい町ふわふわ夢が浮いている
ふる里の土の香しみるわたしです

可児市　板山まみ子

大雪は困るが見たい雪景色
バカ言って笑い転げて若返る
肝心な事は言えずに下を向く
役人の嘘はたちまち知れわたる
温泉は極楽よりもきっと良い

神戸市　上田和宏

戒名を自分でつけて友が逝く
訃報来ず喪中葉書で知らされた
お別れ会同窓生の列が献花
ビデオの中十八番の歌をひと月前
虹の彼方はっと気づけば阿弥陀さま

神戸市　奥澤洋次郎

耐えてるの思いが連れてくる不満
せめてもに豆一粒の福は内
どうします差し押え通知来てますが
耐える子の灯りを消してゆく社会
一寸手を留めてみなはれ春の風

神戸市　冨永恭子

眼裏にまだ暖かい暖炉の火
鈍感な男と知ったのはきのう
歯痒いね戦力外の一人言
良いものは良い新旧に拘わらず
道譲るつもりは無いが犬吠える

神戸市　能勢利子

我がままを言える子供は大丈夫
チコちゃんに叱られぬ様生きてます
スケジュール句会以外はキャンセル可
キャッシュだと臆病になるショッピング
半額になるまで待つと言う財布

神戸市　細川花門

東雲に放つわたしの詩ごころ
喧騒を消し一枚の雪景色
手を伸ばす距離に三寒四温あり
老人に冷や水薄着する莫れ
漆黒の闇に豆打つ追儺の日

神戸市　山口光久

憶病な犬も私も吠えるだけ
駄目ですと妻が言ったら終りです
晩酌が旨いまだまだやれそうだ
合わせ鏡姿勢を正せなどと言う
オイと呼ぶ妻に頭があがらない

神戸市　山口美穂

生年月日昭和も遠くなってゆく
亡母さんの手摺りに今は助けられ
兼高かおる世界への旅ありがとう
寒気団へ微笑みかえす紅椿
敗戦の傷み話して嫌がられ

明石市　糀谷和郎

曲線ばかり選んでこの世生き延びる
雨の日は雨と言い聞かせてゴロ寝
今日は雨閉じた栞が生きかえる
人生を切り売りにする時間給
晩学へお供はいつも好奇心

芦屋市　竹山千賀子

新しい風にまみれる明日が好き
ふわふわと春風に乗る記憶力
瑞穂の国作るお米はみな旨い
飽食の口の奢りが生む病
お供えをはずんで長期家あける

尼崎市　加川靖鬼

渡る世間鬼がいるから知恵もつく
追いかけていたらいつしか風除けに
猪の武者人形が奮い立つ
この世の運を使い果して逝くつもり
日本に狼がいた象もいた

尼崎市　永田紀惠

歳重ね冥土のみやげ持ち切れぬ
腰曲がり臍も曲がって来た夫
しがらみを切って飛びたい鳥も居る
まず黙祷そんな集会増えて来た
その後はどう呼ぶ後期高齢者

尼崎市　藤井宏造

円周率知ってはいるが使わない
完済をした頃減った資産価値
手の甲に覚え書きしているナース
駐車場の狭いコンビニ消えていく
隠し事いくつかあって夫婦です

尼崎市　山田耕治

靴下がよく破れたね昭和の子
炬燵入って文学ができますか
ループタイもう会社へは行きません
傾いて手を振っている母の家
同い年声を掛けたくなってくる

川西市　大坪一徳

昭和とはみんなで背伸びした時代
寿命延び年金健保縮こまる
これは毒わざわざ書いて売るタバコ
喫煙所知らぬ同士がすぐしゃべり
キリシタンの殉教想い吸うタバコ

川西市　山口不動

じいじいはいつ死ぬのとはごあいさつ
免疫はお互いにあり五十年
愛される愛してるから生きている
災の字にさらされている日本人
お出かけにお薬手帳持ってゆく

篠山市　酒井健二

喫茶店隣は神を売る四人
雨に負け風に負けたら生きとれぬ
言い淀む話をちゃんと聞いたげる
お疲れが肩甲骨に集まった
満腹でもうストレスは消えません

篠山市　北澤稠民

冬ごもり野良恋しくて酒を飲む
川柳があるから八十路生きられる
くっきりと生命線が浮いている
道楽にまだ程遠い句に遊ぶ
平凡な日々平凡に進み老い

三田市　足立つな子

ニコニコと笑顔でいようきっと福
ブラボーと納得できる年にする
麦飯に丹波特産とろろ汁
若い芽がいじめに耐えて黙りこむ
十代で世に名を馳せる暮らし向き

三田市　上田ひとみ

何だろう私をおしているちから
スイッチの切り換えすごく下手ですが
このまんま勘違いしたふりをして
優しいねあなたのほうがつらいのに
甘え下手いまさら知ってどうします

三田市　尾崎一子

信じ合う笑顔の中で子は育つ
何時までも幸せ祈る母ありき
風邪ひいて気弱になって夜がこわい
祖母の味孫が友達連れてくる
光る靴孫の就活ハイタッチ

三田市　北野哲男

まだ米寿これから先が面白い
米寿には米寿の味の風が来る
エネルギー口に集まる歳になり
方便の嘘と呆けとを使いわけ
すれ違う訛り故郷はあたたかい

三田市　久保田千代

一匹の羊を政治救えない
一捻り今日も出来ずに日脚伸び
胃カメラに聞いてみる気になる痛み
神様に二浪ですよと絵馬に書く
食卓に男の威厳生きている

三田市　多田雅尚

義理チョコもホワイトデーも有った過去
四月号出来た頃には新元号
「韋駄天」を見ながら布団蹴っている
二センチも積もればニュースなる都会
恵方巻食べ方ぐらい自由だと

三田市　谷口修平

靖国の桜に何の罪も無い
癌告知家族の絆試される
英会話出来て挨拶出来ない子
渡り切り笑顔が戻るかずら橋
来賓に呼べば大抵来る代理

三田市　野口真桜子

憧れに欲という名の実が熟す
金もない人生に棲む面白さ
自慢などしない漬物石の顔
凡人だ許すと言ってまた悩む
これからは掃き溜めに咲く花でいる

三田市　福田好文

B面の私探しの一人旅
行列した記念硬貨が寝るタンス
肝臓へ毎日届く発砲酒
犬よりも私と散歩なぜしない
一〇〇歳がどこにでも居る長寿国

三田市　村田博

激論を制した後の美味い酒
計画は緻密だけれどポカが有る
プレッシャー無い二番手が指定席
宝くじ雄叫び上げる日が来ない
幕間にはピエロになって座を繋ぐ

高砂市　松尾柳右子

新学期夢見る顔に虹を追う
開花待つ蕾笑顔に励まされ
登下校の子供元気でにぎやかだ
空見上げ遠出夢見る老いの性
飛行機ぐもどんどん伸びる春間近

西宮市　秋元てる

母百歳美人薄明あれは嘘
多忙とは楽しく生きている証拠
ブランドの服が泣いてる丸い背よ
メモ用紙ヘルパーさんの分も置き
満腹の子等夢だった日も遠い

西宮市　緒方美津子

初春に茶柱が二本ラッキー
残酷ないたずらをなさるのは神
勝負に勝った窓　足立美術館
星に恋して寝袋好きになりました
受験生を預かりファイト湧いてきた

西宮市　亀岡哲子

二人なら握手もできる肩も抱く
なんやかやあって還暦まで育つ
還暦のたてがみいよよ靡かせて
うどん屋に曾父母座った椅子がある
大声のお経で今日もありがとう

西宮市　西口いわゑ

あっと言う間に如月の音になる
人生を喜劇と思う楽になる
冬ぼたん神のお使いかも知れぬ
すくすくと伸びよボールを蹴る子等よ
お弁当今もやっぱり玉子から

西宮市　福田正彦

川柳が錆びかけた脳研ぎ生かす
何故だろうひまな時間が無くなった
指示しても言うこと聞かぬ足がある
振り上げた拳をそっとふところに
豪雪も地下で息づく岩清水

宝塚市　丸山孔一

ケイタイが不通どっこい固定が生き返る
自らの鼾で目覚め午前二時
犬達よ服着せられて嬉しいか
ブランデー水森かおり一人聴く
言われたらすぐメモにする癖がつき

西脇市　七反田順子

日足伸び花も小鳥も弾んでる
友達をスマホで探す子の未来
ガラケイで不自由しない現在地
子は親を選べないから虐待も
誕生日相合傘で図書館へ

南あわじ市　萩原狸月

漫才のコンビ名にも新時代
可愛さを集団で売る稚い歌
チコちゃんが叱っても駄目永田町
元号も年度も新た花に酔う
新鮮なおはようと会う新学期

奈良市　阿部紀子

みつ子さんの句が見つからぬ寂しくて
みつ子さんに初めてトップ選ばれて
桃蕾ほんのり香りひな祭り
オリンピック生きているかと思ってた
元気です何とか見れるかと思う

奈良市　宇賀史郎

好いニュースあてに好い酒ほろり酔う
温暖化冬に夏日と氷点下
信念を枉げて育てた子が巣立つ
雨戸音矢の如く飛ぶ小鳥
親と子のつながり一寸した仕草

奈良市　大久保　眞澄

囲碁だテニスだ子供稼業もくたびれる
友の死になんでやねんと言うばかり
長老の顔色チラ見する若手
マグロは3億年金5万円
お江戸のバカと浪花のアホは似て非なり

奈良市　髙橋　敬子

白紙の余生ゆっくり塗ろう春色に
黒を白と騙る社会に慣らされる
クラス会次回危ぶむ歳になり
すぐ他人は僕と兄貴を比較する
廃炉収拾いつになったら終わるのか

奈良市　辻内　げんえい

スロースタートそのままゆっくり喜寿米寿
七草粥鏡開きも二人きり
平成か新元号かお腹の子
ブランド蟹漁港違えば安くなる
色っぽい仕草の孫はまだ五歳

奈良市　山本　昌代

ささやかなお駄賃孫と手をつなぐ
耳たてて温いことばを聞いている
ケン玉に誘うと向きになるばあば
バタンキュウ遊びごころは衰えず
あほくさい話ではずむ夕御飯

奈良市　米田　恭昌

祝日に国旗見つけてホッとする
寒行の雪吹き散らす風の音
燃えつきた男の眼清々しい
いざ受験茶柱たった朝の膳
寝転んで柳誌を読んで満ち足りる

生駒市　飛永　ふりこ

錆びぬようぼけないように練るレシピ
本腰をわかっちゃいるが覚束ず
総長に似ても似つかぬゴリラ談
寒風に手綱引き締め出る気合い
人徳があれば渦など巻かぬはず

香芝市　大内　朝子

早春の風にハートの丸洗い
わたくしの腰が痛むと雨になる
生きている事に感謝の出来る歳
楽しいなこころ裸に飲み仲間
ありがとうの言葉の増えてゆく豊か

香芝市　山下　純子

孫帰りアールグレイが身に沁みる
ころころと笑う彼女に福が来る
朝ドラを犬も決まった席で見る
友が逝きわが青春もセピア色
古希会で女盛りを競い合う

奈良県　安福和夫

新元号乗って白寿で下車希望
現し世を嫌っていたら生きられぬ
探り合いグローバル越え月の裏
核の無いクリーンな宇宙目指すべし
平和への呼びかけ常に宇宙から

奈良県　谷川憲

山ひとつ隔てて変わるお国柄
つわものは挫折と危機に育てられ
自分史に悔恨の棘あちこちに
里山のナラの枯死まだ止まらない
陀羅尼助きつい苦さが効いている

奈良県　長谷川崇明

リュウグウノツカイ名を知り深い海思う
日が落ちてやはり寒いよ散歩道
冬の虹知らす時間もないドラマ
立春と聞いてハガキの諾に〇
コンビニのおでん相手に妻の留守

奈良県　渡辺富子

姥盛り飲めや歌えの雪の宿
雲と歩き人生の綾語り合う
枯れていく記憶の向こう冬景色
ほろ酔いの男ゆらゆら月に吠え
永らえて老いの現実攻めてくる

和歌山市　磯部義雄

選挙戦早や始まっている賀状
自己流で新元号を練っている
今年こそ祈りは一つ無災害
父はもう居ない介護の車椅子
六年前ピカピカだったランドセル

和歌山市　上田紀子

同じ日が一日もない七十路坂
結び目に少し緩みの夫婦雛
いつの日も言いたい事を七分目
急ぎ足追いかけないで転ぶから
神風も吹かず平成終りそう

和歌山市　喜田准一

グループ解散嵐が嵐呼んでいる
一〇〇g減った増えたと姦しい
フラッシュオーバーはじめて聞いた八十路坂
待っている電話も来ない齢となり
相撲済み次が待ってるプロ野球

和歌山市　坂部紀久子

老いるとや電話の声の大きさよ
老いるとやチャイムが鳴ってハイハイハイ
老いるとや子に叱られること多く
老いるとや掛け声かけて立ち上がる
老いるとや一番の友テレビかも

和歌山市　武本　碧

二千回押しも押されもせぬ役者
重宝なお口で錆びる暇がない
黄信号ばかりでいくさ生温い
温もりが欲しく訛りの輪に入る
平成のここ掘れワンはビットかも

和歌山市　土屋　起世子

人情に凭れ病気といくさする
わたくしの最古の記憶子守歌
平凡のままで幸せ米を研ぐ
独り部屋せめてカーテン暖色に
陽のあたる場所から花も咲く格差

和歌山市　福井　菜摘

道しるべ母にもらった無の心
気負いなく守る私の城がある
原点に戻って迷路から抜ける
もう少し生きたい夢が辞書をくる
身の丈を覚え背伸びをやめにする

和歌山市　古久保　和子

もう電車来ないと知っているレール
あれ以来時間を止めた部屋がある
勘違いも手違いもあり現在地
釣り宿の魚拓は客に媚びを売る
大鍋はタケノコ茹でるだけにある

和歌山市　堀　冨美子

気楽さも友のサポートあればこそ
洒落っ気が傘寿半ばを籠もらせぬ
純粋に後ろ指など指させない
立ち止まる事も覚えた長い旅
平成へ戦争平和を包み込む

和歌山市　松原　寿子

明日へのプランわくわく捻子を巻く
背中押す風にお礼を言って春
生き方をある日雑草から学ぶ
資産価値どんどん失せてゆく空き家
手作りバッグ小脇に抱いて春へ翔ぶ

岩出市　藤原　ほのか

梅の花ほころび始めうれしい日
梅林に寝ころび空を独り占め
わたくしの空白を今取り戻す
あの時の予感的中暮らしてる
繋いでたあの温もりを忘れない

海南市　小谷　小雪

水族館のジンベエザメにある憂い
帰省して人口密度高くする
新成人見上げてごらんビルの空
昨日より心配一つ減って春
もう何も食べたくないと言った母

ここだけの話は聞かさないでくれ　海南市　堂上泰女

春ですと綻んでくる庭の梅
変り身が遅くて餌にされている
誉められて誉めて心は日本晴
隣から梅の匂の御裾分け　紀の川市　楠原富香

七色をたっぷり使ういい余生
人生の節目に父母の影がある
冷蔵庫玉子が無いと風邪を引く
毎日が戦　休日なしの主婦
結び目に一度ほどいた跡がある　紀の川市　山東日出男

気休めを祈りに変える百度石
栄華追うまい一炊の夢ならば
茶柱が立った朝から大騒ぎ
地震予知もうナマズには頼れない
雪原にプリマのようなツルの舞　橋本市　石田隆彦

古稀の坂茶碗七分の飯となる
電線が縦横斜め車窓富士
安全と言う原発の手探り度
浮きうきと真っすぐ帰宅した新居
風化する遠い記憶の郷里駅

ホットレモン湯気の向こうに揺れる明日　京都市　清水英旺

八十歳誤嚥予防を怠らず
音楽の中まどろんでいる至福
省エネでわが家を覆う寒気団
ガラス越し冬日もうらら背に温い　京都市　藤井文代

直木賞買うが見識試された
聞かせないで内緒事なら喋りたい
なれそめは不意に触れた手が始まり
雑音には補聴器外しマイペース
口上手と言われたが地で言っただけ　京都市　三宅満子

つれづれに書く自分史は虹色に
思い出を断ち切り処分すっきりと
家族葬の費用ぐらいは残しとく
あこがれた高台の家過疎となる
あやかりたい朝ごはん食べ逝った姉　長岡京市　山田葉子

自分なりにペースは遅くても歩く
犬かきでバシャバシャ行けるとこまでね
ラッキーな出会い重ねて来て傘寿
卒業式以下同文で物足りぬ
反省をちょっぴり後悔はしない

八幡市　今井　万紗子

あなたと出逢いこれもラッキーとも思う
夫の顔ぼんやり見ればいいオトコ
嬉しいと母の涙腺すぐゆるむ
駄菓子屋においしい夢がてんこ盛り
何時の日も零れる笑顔ポケットに

大阪市　磯島　福貴子

グレーヘヤーやっぱり自然心地良い
鍋いっぱい炊いた粕汁おすそわけ
姑の味夫の好きな煮ころがし
風の向う白馬の騎士が見え隠れ
おひな様暗いトンネルお出ましを

大阪市　井丸　昌紀

待ちぼうけ冷めたコーヒー苦すぎて
この盃を飲み干してから禁酒
隠し事できぬとぼやいているちくわ
禁酒禁煙したらぽっくり逝きはった
夏が好き半年後には冬が好き

大阪市　岩﨑　玲子

優しい人傍に居るのに気がつかぬ
金婚だのらりくらりと平和主義
手を見ても顔見てもみなおばあさん
お助けは杖と手すりの二刀流
好奇心あるうちはまだまだ生きる

大阪市　内田　志津子

本心を主張している鉤括弧
広島を語るセーラー服の眩し
繰り上げてスタート切った日の無念
五十年母に叶わぬ豆の味
孫ふえて明るくなったうさぎ小屋

大阪市　榎本　日の出

人形と楽しく暮しハグ続く
少し減り体重計に礼を言う
人生を走り続ける深い皺
面倒見良くない財布持ち歩き
オカリナを吹いてみたいなこんな日は

大阪市　榎本　舞夢

梅一輪春のおとずれすぐそこに
二ン月は賑やか豆で鬼退治
娘私誕生祝続きます
長生きもいいもの孫のロマンスを
張り切って父さん旅行風邪を引き

大阪市　大川　桃花

血の涙自然治癒しかないと医者
出し入れ出来る目玉が欲しい花粉症
宣伝費がっぽり乗った化粧品
不正統計調査の汗は無視される
賽銭箱見える角度にある社務所

大阪市　大治重信

赤鬼が小さな春を連れてきた
先輩の貫禄示し奢らされ
原因はトランプにあり冬の風邪
閑だからルンバの掃除見ています
余生とは薬を呑んで早寝する

大阪市　奥村五月

神様は困った時は何頼る
料理好き妻も最近チン料理
一言で薬を増やす嫌な医者
甲子園涙まじりの土詰める
関白も妻の支えがあってこそ

大阪市　小野雅美

悩み事聞こうか猫にすり寄られ
外出をしろよと猫に跨がれる
大嫌いマスクの中で繰り返す
大丈夫大丈夫だと空に言う
免許証の写真じっくり見ないまま

大阪市　笠嶋恵美

お天気に誘われ奈良の興福寺
法相柱始めて見たり感無量
新しい太い柱にある威厳
一万二千歩無事に歩けて大感謝
老いに馴れいとしく想う誕生日

大阪市　金川宣子

五十年今頃気付く妻の情
無防備な姿カメラに覗かれる
ドキドキを鎮めてくれる待合所
立ち読みにヒント貰った晩ご飯
孫を見て私も子には甘かった

大阪市　川端一歩

路郎読本時どき読んで目を洗う
何はともあれ天声人語読んでから
疲れたら藤井聡太の棋譜を読む
五時起きはボクの職業病だろう
泥舟に乗っているよな国会だ

大阪市　古今堂蕉子

ごめんねと先に言われてからの鬱
エスニック料理と格闘旅終る
反対を押し切った意地五十年
キリリと立ったコヨリ祖母は名人
自然淘汰君もわたしも皆仲間

大阪市　近藤正

私には一票がある世を変える
あの男マメに目立たず仕事する
政争の具にかきまわす都構想
背広着てファンに受ける稀勢の里
新元号どれだけ普及するやろか

久しぶり孫と一緒に蟹つつく
人並みに格好つけてまた滑る
線香で我が身清めてご挨拶
喜寿の春今が盛りと胸を張る
迷ったら前見て進む方選ぶ

大阪市　坂　裕之

春風にふわりハミング乗せてみる
ホームから母を連れ出し美容院
現役の頃より汚れている手帳
健康法だけはいっぱい知っている
最後だと言って幾度目パスポート

大阪市　髙杉　力

大正の生まれ星に願いをまだ信じ
大正の生まれ昼寝を許さない
四世代生きるつもりの朝昼晩
広辞苑まだ生きているスマホから
大正の生まれ万歩計動かない

大阪市　髙杉千歩

痒いとこ掻けない辛さコルセット
梅の花お城の庭は花盛り
スタイルを気にしてもだめ年だもの
お芝居の現実離れに酔いしれる
凄いです孫のスタイルモデルなみ

大阪市　田中廣子

本は友教えてくれる叱ってくれる
青春に勝る集いの五七五
幸せのひとつチューリップが咲いた
春色の口紅後期高齢者
放っておいて欲しい日もある昼の月

大阪市　田中ゆみ子

一日のスタートモカの香りから
買い出しのメモをポッケに押し車
温もりを分かち合ってるケアハウス
レトルトの赤飯で良し誕生日
特売の玉子わたしのモーニング

大阪市　津村志華子

生き甲斐は人それぞれと米を研ぎ
終活へ狂わず落ちる砂時計
同窓会久々に聞く国訛り
背伸びしてつまずくことの増えてくる
父母の記念日欲しい物がない

大阪市　寺井弘子

若者に甲乙つけたのも昭和
朝一で出せとカラスがせき立てる
頻尿で旅に出るのは気後れる
うっかりと投げたサイ銭五百円
甲種合格父母の目に涙

大阪市　寺本　実

大阪市　原田すみ子

園児のクラシック シンプルに響く
スーパーのはしごが出来る脳と足
現実も理想も混ぜて句の夫
読み終らぬよう行きつ戻りつしてる本
作る気のレシピ溜まってゆくばかり

大阪市　平賀国和

春が立ち気分華やぐ梅の花
梅林に和歌の短冊興添える
梅林に春節祝うツアー客
今が旬学ぶ喜び読書会
王道を進んで欲しいまつりごと

大阪市　藤田武人

縦と横絡み続けた君と僕
行列の中でもうひとりの私
浪々の旅で見つけた宝物
肩の荷を降ろした日からカタツムリ
棟梁の目視　定規を越えている

大阪市　藤原千恵子

うちの猫五回呼んでも振り向かぬ
みかん畑父の汗した声がした
見たい気と見たくない気の郷の家
幼児に手を差し出され暖かい
素直な耳人の意見を取り入れる

大阪市　升成好

染まるのが嫌でずっと黒でいる
消灯の闇に五感が眠らない
一本の指揮棒になるコンサート
生き方を比較はすまい自然体
空という自由に雲の湧きやまず

大阪市　山本加お里

明日逢う人がいるって嬉しいな
半世紀ぶりに見つけたラブレター
もの言えば薬がふえる言わんとこ
晴れ渡り我が家へ帰る退院日
神様が休みなさいと病くれ

大阪市　吉内タカ子

もう少し断捨離すれば癒やされる
思い出し笑う句作に若返る
嬉しいな友の電話がよく掛かる
年初め誘いが続く靴磨く
ポチポチと花の盛りの好奇心

大阪市　若本安代

愛の鞭きっと気付いてくれるはず
喜怒哀楽私の中を通り抜け
また今度無いかも和解しておこう
強がりを止めれば息が楽になる
口パクのコーラスだけど楽しくて

堺市　奥　時雄

毎日がクルマ右頬シミだらけ
いくら陽に焼けてもシミは隠れない
年寄りの落款押したようなシミ
四車線今でもトップ心掛け
愛国心から国産車だと言っておく

堺市　柿花和夫

サプリとの戦続けて縄のれん
天と地のどこへ帰るか迷う齢
陸橋に気後れしてる足の裏
ここだけの話に酒が不味くなる
地下鉄の窓は季節を知らぬまま

堺市　加島由一

カップルの品定めする通り抜け
あさ風呂に乳液今日は通院日
ゴミ捨てるヘルパーさんが来る予定
百歳の私に手紙書いている
遺品整理妻の日記の妻の文字

堺市　源田八千代

散歩コース梅公園の通り抜け
ベンチに凭れ梅の香りに包まれる
趣味の域越えた作品送られる
懐かしい故人を偲び読み返す
ニュースから不穏な空気読み取れる

堺市　齋藤さくら

うどん屋の前でお腹が空いてきた
若く無い無理をするなと風が言う
わたくしを待ってくれてる人が居り
古希過ぎて惚けてきそうだ竹を踏む
朝御飯何を食べたか覚えてる

堺市　坂上淳司

鉢植えの明治生まれの父の梅
人生百年傘寿卒寿はまだ若手
人生百年ころり逝きたいけど逝けず
人生百年逆ピラミッド型社会
人生百年社会支えるのは至難

堺市　澤井敏治

豪雪も吹雪も雪はうつくしい
かしわ手が聞こえましたかえべっさん
ビルの街おしゃべりにする虎落笛
寒風を背負って孫がやってくる
留守番の犬の愚痴聞く鬼瓦

堺市　遠山唯教

好運に普段の準備かかさない
貪欲ないのちが酒とせめぎあう
うれしいな子から誘いの信濃の湯
傘寿米寿克服をする死生観
ながいきをしてねと檄の孫娘

堺市　内藤憲彦

四番抜けても全員野球揺るがない
地下鉄もエレベータ派と階段派
徘徊に備え毎日八〇〇〇歩
一切なりゆき流石の樹木希林
人生百年責任持てぬ貯金帳

堺市　矢倉五月

回り道寄り道想定外楽し
心地よい空腹感も幸のうち
こんな時そっと凭れる背が欲しい
忘れよう許そう楽になれるなら
独りでも時には腕をふるう夕食

茨木市　島田誠一

出不精に靴を履かせる梅だより
コーヒーの沸く音と読む周五郎
平成の傷労りつ新元号
駅長が猫で務まる腑甲斐なさ
月の裏見せて国威をひけらかす

貝塚市　石田ひろ子

枯木立春を先取りする新芽
投句する度にポストを拝んでる
先頭にもなれずビリにもなれぬ雑魚
安心を貰う家族が居る至福
頼りにする嫁も整形外科通い

河内長野市　大島ともこ

無いものねだりばかりで世間狭くする
比べない焦らぬ歩幅自分流
老いてなお学びの虫が増殖中
同じ空見て笑う人との出会い
響き渡るソプラノ妻の旅支度

河内長野市　梶原弘光

吹きだまり風の力を思い知る
年寄りの冷や水今日もフル装備
笑いという不老長寿のクスリ飲む
寒暖の差ボディブローのように利く
吊るし柿抱えて友の得意顔

河内長野市　木見谷孝代

言葉編む作業に疲れスルメ嚙む
入試合格孫にもとっておきの春
お手本の椿飽きずに描いている
絵手紙で元気届ける古希の春
笑い顔ひきつっている図星だな

河内長野市　黒岩靖博

邪魔せぬよう皆が気づかう受験生
朝明けに今日一日の無事祈る
鈍行で途中下車する気まま旅
冬木立木漏れ日眩し乱反射
歯ぎしりと鼾なやます二重奏

河内長野市　辻村ヒロ

おしゃべりでちょっと疲れる心地好さ
風邪予防黒大蒜に守られて
後期高齢書類が届き念押され
老いの影ところどころに隠れてる
ゲーム機に何回も聞く脳年齢

河内長野市　藤塚克三

布袋さんのほっこり腹で眠りたい
笑い飛ばす長生きをする秘訣です
キラキラは無いが余生は薄明かり
お父さん愛は形よネックレス
いびつだが阿吽の呼吸妻と俺

河内長野市　村上直樹

砂蒸し風呂に若き日重ねフルムーン
あなたの声がパワハラなのと愚痴の雨
もう二度と見ることのない本気チョコ
長生きもよいがお邪魔にならぬよう
懸命に生きた裁きは神頼み

河内長野市　森田旅人

むかい風受けて飛翔の鷹となる
とんぼりの賑わい多国籍タコ焼き
かまくらにほっこり見えてくる平和
大切なものが同じでひとつ屋根
かんむりはしろつめ草の頃の幸

河内長野市　山室光弘

平成の想いしっとり両陛下
紙芝居小銭握って見た昭和
名言がキラリと光る道しるべ
説教は苦虫噛んだ顔で聞く
腹くくり開き直れば軽い肩

岸和田市　宮野みつ江

節分会鬼にも愛を撒いてやる
立春の日溜り猫とうらら寝る
しばらくを夢の世界に万華鏡
独居老の名簿に載った私の名
強いねと言われ淋しいとも言えず

岸和田市　雪本珠子

人生をトータルすればまだ未完
久し振り逢えばイメージ変わってた
うるわしい友情なんて脆いもの
一病とひと日ひと日を大切に
リストラも定年もない自由業

四條畷市　吉岡修

いきなりの握手でぐっと近づいた
思いきりカラオケします錆おとし
飢えのない満ちた地球にきっとなる
鬼部長家でエプロンかけてはる
溜まってる思いを酒が吠えさせた

吹田市　木下敏子

此の年齢でまだ足腰を鍛えよと
良い年になりますように梅ひらく
負けて勝つ今日もやっぱり負けました
生きている証拠に足も腫れてくる
成り行きに任せ優しく歳重ね

吹田市　須磨活恵

6Bと消しゴムノートありがとう
川柳と歩んだ日々がいとおしい
人間の奥の深さを知る川柳
春の句を詠めば心もさくら色
待たされて待ち草臥れて気が変わる

吹田市　野下之男

大統領「カベ」「カベ」「カベ」で眠れない
早い早い無心に走る福男
元気だね女性がかいたカブトの絵
若い子にやっぱり品を買わされる
食事時茶わんも皿も生きてくる

高槻市　片山かずお

薄くても自前の髪という誇り
侘しさが透ける男の一人旅
「まんぷく」を見ながら朝のパン食べる
設計図毎日直しつつ生きる
いつゴールするか分からぬまま生きる

高槻市　島田千鶴子

老いの手でこれが最後と雛飾る
ふと寄った珈琲店にはまり込む
大笑い昨日の鬱が吹っ飛んだ
花いちもんめ幼友だちどこにいる
立ち話も防犯カメラに写される

高槻市　初代正彦

済んだことくよくよすまいワンカップ
老いふたり南蛮味噌にしゃんとなる
そっとしておこうふたりの根くらべ
沙羅ちゃんのVの笑顔についほっと
十代の凄み日本のアスリート

高槻市　杉本義昭

難民の耳にレノンの風が吹く
ハートマーク消えて大人の恋になる
値引交渉家内と一緒なら強い
里帰り昔話が終らない
音楽喫茶遠い昔の淡い恋

高槻市　富田美義

観光たび最後が孫と京都御所
ワレ卒寿いつまで続く残り道
駅ホームマスクの戦士次々と
久し振り細胞喜ぶ露天風呂
もうゴルフ眺めるだけの車椅子

高槻市　富田保子

東から西に抜けます喜寿です
入院に反省事項あれこれと
湯上りのほかほか消える長電話
猫がいる所はいつもぽっかぽか
全力で走ったバブル反省す

高槻市　原洋志

一日の欠伸集めて仕舞風呂
水しぶきあげてここまで生きてきた
石段にスタミナ不足笑われる
嫌なこと風呂場でみんな泡にして
公園で右往左往をする老化

高槻市　松岡篤

ランチメニューインスタ映えで決めている
合言葉聞くとぷっつり電話切れ
エスカレーター大阪ですよ歩かねば
仕舞風呂今日の私を褒めるとこ
トイレ待つ間もスマホしたいかえ

高槻市　安田忠子

ラッキーな人生だった悔いは無い
反省をし乍ら一歩前進む
スタイルを気にして食べる甘い物
旅に出て盛り場に行く面白さ
ぼんやりと暮していたら喜寿を過ぎ

豊中市　池田純子

平和だなチョコに溢れている二月
春はそこいちごの苗が揺れている
例会にいつもの顔が無い不安
しっかりと遊んだらしい泥の靴
ガウディの夢は天へとエンドレス

豊中市　上出修

平成の幕をご意志で閉じられる
変わり目をピタリと当てる風見鶏
打たれても打たれてもまだ大臣に
ホームまだどこまで潜る大江戸線
トランプの魔法にかかる地球人

豊中市　藤井則彦

定年日初めて背を撫でた妻
物言いもいつの間にやら五七五
猫と居るだけで安心して昼寝
よく見ると鏡に映ると別の僕
普通に生きてそっと逝くのも大仕事

豊中市　松尾美智代

進む日も退く日もあって五十年
子育ての戦も越えて日々平和
心の冷えも癒してくれる掘炬燵
久し振りバーゲンに行き人に酔う
そっと手が触れると熱い物あふれ

合掌の手からこぼれる春の音
窓開けて地球の息吹き聴いて春
縄とびに昭和の音の路地の春
外野にはタンポポの咲く草野球
哀楽を重ね平成暮れかかる

豊中市　水野黒兎

にがい珈琲すすり前世のこと想う
水底に歴史を秘めた闇がある
たのしくて五線譜はみ出すピエロ
さよならの言葉を探すドレミファソ
マスク怪人街闊歩するはやり風邪

富田林市　片岡智恵子

闇の中誉める言葉に和み出る
湯の宿の湯気の向こうに朱の鳥居
独り居に自由不自由天の邪鬼
雛壇に白髪も共に三世代
ひな納め兜と鯉にゆずる席

富田林市　関よしみ

寝たきりを雲の動画がなぐさめる
わがままを言っていいのだ障がい者
「病める時も共に」と誓ったはずなのに
真夜中の下の世話には共に泣く
愚痴言えば口が愚の字になっちゃった

富田林市　中崎深雪

安心を伝える切り取った笑顔
揺るぎない愛の力を疑わず
雑踏で炙り出されている孤独
聞き飽きたせりふ聞かぬ日の不安
あほやなあ許す形に目が笑う

富田林市　中村恵

玉砂利の音幸せを踏みしめる
参道がまだ苦にならぬ老い二人
戦の母まぼろしになる昭和
冬至には柚子湯とかぼちゃ妻の愛
幸せが灯る我が家の温い窓

富田林市　山野寿之

冬木立じゅげむじゅげむの修行する
あの時のページに付箋つけている
一日一個鳥には鳥にあるノルマ
おしゃべりもテレビも背中丸くする
後期高齢前後左右の水たまり

寝屋川市　籠島恵子

今日も又うれし一日が始まる
みかんは熊本産に決めて探す
イヨ柑は年があけたら食べ始め
レモン沢山家で成ったと貰う
キンカン今年黄金色に輝く

寝屋川市　冨山ルイ子

寝屋川市　平松　かすみ

突然の訃報お若い和尚さん
四十三年毎月お経賜った
労りのお言葉もう聞けず
バイク音聴けなくなったお一日
ショックです炊飯タイム押し忘れ

寝屋川市　森　茜

半熟卵とろりと梅のほころんで
臆病神追い出しにきた梅だより
出し入れの二度手間ばかり春一番
寄せ鍋の具が変わろうと柚子ぽん酢
心貧しくじっと見つめる冬の爪

羽曳野市　安芸田　泰子

今ここで許せば味方増えるかも
表札に亡夫の力借りている
他人事になると答が直ぐに出る
プライドを捨てればやる気失せてくる
ふん切りをつけた女の深呼吸

羽曳野市　宇都宮　ちづる

鎮魂の神戸に灯る1・17
節分に運気悪いと言われても
ほとばしる孫の笑顔が病室に
勘の良い孫の補足で会話する
小籠包好きで台湾旅行する

羽曳野市　徳山　みつこ

湯たんぽがほっこり今日を包み込む
豆煮る匂い満ちて至福の時間
ありがたや今年も出来た味噌作り
不揃いがほっこりさせる自家野菜
納豆をよくかきまぜてまず卒寿

羽曳野市　中川　ひろ介

オレオレに二度目もかかる姉がいる
高いなあ五輪はテレビ年金者
アイドルの名千人覚え句ができず
亥歳早災難続き豚コレラ
お水取り春呼ぶ僧の下駄の音

羽曳野市　藤原　大子

本日のほっこり夫のありがとう
声出して笑い嬉しさ倍にする
元気だと思い込んでる予定表
真っすぐに立ってる筈が前かがみ
戻せないと分かっていても吐く言葉

羽曳野市　三好　専平

月とスッポン仲代達矢と同い年
どこまでが枕かわからぬ談志の芸
クラシックよりも演歌が好きになり
くりかえし溺れるうちに馴れてくる
嘘でいい好きとささやく風が欲し

羽曳野市　吉村久仁雄

ライフスタイル負ければ笑い勝てば泣く
縄文杉生きていっぱい恥を掻く
盛り場の路地の地蔵が知る哀史
孫の世話するたび妻が若返る
すぐ実る小さな夢をたんと持つ

東大阪市　北村賢子

想い出に時折すがり生きている
一日に一善心して生きる
ありのまま気負いてらいもなく生きる
輝いた記憶はせめてものサプリ
痛む膝予定こなせて安堵する

東大阪市　佐々木満作

薫風翁スタイルも句も小粋なり
前頭葉駆使して作句する深夜
歴史生む先人の知恵学びとる
寒の入り七草食べて医者要らず
半世紀補填し合ってきた伴侶

枚方市　丹後屋肇

マイルーツやたら拘る好奇心
御先祖が谷の斜面に藁仕立て
落武者の槍や鎧とかくれんぼ
世が世なら息を殺して稗御飯
清流の音懐かしい和紙の里

枚方市　二宮山久

角とれた男になって老いを知る
一筋に賭けた男は振り向かぬ
追い風にうまく乗れない病み上がり
カレンダー余白がうまる趣味多忙
ただ歩く長寿の秘訣信じつつ

枚方市　二宮紫鳳

夕映えの二人明日を疑わず
親切な言葉に老いが弾んでる
喜びを抑えきれないイヤリング
発表会揺れる心で出番待つ
傷心を優しく包む瀬戸の海

枚方市　藤村亜成

前向きになって借金増えてくる
神の口借りて怒ってるのだ妻は
土・日・祝の意識うすくなる恐怖
血気盛んええ歳してと娘が叱る
堂堂と繕わないから隙がない

枚方市　山口弘委智

熱燗で平成惜しむ最後の日
春めくという喜びがあふれてる
豆撒いてこころの痞え共に晴れ
春の水語らいながら流れゆく
啓蟄の広場に子らが湧いて出る

藤井寺市　太田　扶美代

風の駅風を待たせたままである
急がねば何故か悲しいのも余生
体重の半分はある自尊心
爪の先ほどの情を信じ切る
敵にまわせばとても手強い窓灯り

藤井寺市　鈴木　いさお

ここからをクレッシェンドに生きてゆく
器を代えると美味しさまで変わる
ヒーロー誕生スタッフに恵まれて
ええとこを繋ぎ合わせた私小説
プライドをまだ残してる認知症

藤井寺市　髙田　美代子

雪消えてそろそろ春のハーモニー
四季有情こぼれ種から花が咲く
ポーズなんかとらない日本一の富士
こぼんちゃんも混じっていたな雛遊び
今何時少し眠っていたようだ

松原市　森松　まつお

食欲がないわと妻が驚かす
奇数月なるべく記帳しない妻
A型が几帳面とは誰の説
飲み会は一番に来て最後まで
お風呂場のエコーで僕も裕次郎

箕面市　大浦　初音

鼻息もあらく走ろう猪年です
昨日のこと忘れ昭和をなつかしむ
見わたせば自分以外はみな教師
ぼんやりすると間違えられる認知症
やんわりと肩におかれた手の温み

箕面市　酒井　紀華

身から出た錆オトコとオンナ猫噛う
心まで見抜かれそうな猫に合う
自然体生きるしあわせ朝のお茶
ぼんやりと老いていきます至福のとき
ボタン掛け歯痒くみてる妻の笑み

箕面市　出口　セツ子

老夫婦やっとお餅が食べ終る
ほいほいと何でも受けて脳刺激
笑っても吐息も独りつまらない
遊び歩くにも友が要る金が要る
いつ来ても優しい風に迎えられ

箕面市　広島　巴子

引くはずが無いのに私風邪を引く
風邪引きの声ハスキーでいいと友
風邪退治元気な孫の声パンチ
「まんぷく」を見て一端の口をだす
今日よりは明日へと挑むタブレット

今年こそトラよ灯してVの火を
ふたりして灯す絆と言う明かり
モナリザとカップルならばどないしよ
有耶無耶も護身の術と言う総理
熱愛離婚またタレントの茶番劇

八尾市　寺川はじむ

起きづらい冬は約束したくない
もうあかん言いつつ祖母の食べっぷり
体温血圧計って今日も動けそう
紙雛を飾って白酒一人呑む
ふるさとの浜にあさりはもういない

八尾市　宮﨑シマ子

フィギュア優勝国歌うれしく聞きました
ライバルの吐息やんわり攻めてくる
天下とることなど縁のない話
体調のよい日悪い日普通の日
首たてに振って後悔ばかりなり

八尾市　村上ミツ子

犬の背にひとひらの雪ふわり消え
寄せ植えにカーテン越しの陽の恵み
焼芋もスイーツ並のラッピング
旅みやげ孫の手長いお付き合い
読経の空気を読んで足ずらす

八尾市　山根妙子

身の丈の生きがい今朝も草を抜く
田舎には私を叱る母が居た
一病をあやし平凡ありがたい
縁側でゆっくり猫の悩み聞く
タンポポの綿毛みたいな春の旅

岡山市　工藤千代子

寒鴉荒田に拾うものもなく
八十になって捕えた青い鳥
ト書きして百歳までのスケジュール
豪勢に見えるカニカマフルコース
なのはなは咲いたよてふてふ

岡山市　丹下凱夫

十八代続く家系でオンボロで
行く末は出雲阿国と同じ墓所
どなたかな姓より屋号聞く翁
老義母の歩幅に習う定年後
まだ義母を先生と呼ぶ老婦人

岡山市　永見心咲

福豆をそっと明日に残す古稀
もう朝か夫の味噌汁いい匂い
これからだ「もういいよ」とは言えません
もう古稀か残りの時間宝物
平成は夢中で過ぎた汗の道

岡山市　前田恵美子

岡山県　田中　恵

嫌なこと忘れるための風もある
この坂を登ればきっと夢に逢う
本当の事が言えない内輪揉め
骨密度小魚食べて補強する
全力で駆けて来ましたあばら骨

岡山県　山縣　のぶ子

かんしゃく玉亡夫の乱をなつかしむ
素通りの脳と葛藤しています
素人の知ったか振りが姦しい
ついに来た独り暮らしと言う試練
国会が押し問答で日が暮れる

広島市　岸本　清

好奇心僕には生きるエネルギー
七十の手習い睡魔とのバトル
朝がゆがうまい梅ぼしもう一つ
ナンプレとパズルで惚けに立ち向かう
お詫びでは済まないことが多過ぎる

竹原市　石原　淑子

享保雛ずらりお迎えいただいた
雛めぐりとっぷりつかる和につかる
米寿喜寿友の笑顔を祝う会
夫にチョコ　ホワイトデーを期待して
入学式十五の門出祝う虹

竹原市　岩本　笑子

幸せの隣にあったありがとう
七草がゆすずなすずしろだけでよし
よかったと思える日あり蒲団干す
地球儀の日本辺りがまた揺れる
眠しとも眠しぐるりリハビリの中で

三原市　鴨田　昭紀

根に持っているのか味噌汁がぬるい
笑ったら笑い返してくる鏡
ブレーキが利かぬ一直線の恋
すぐ怒るから臆病な人だろう
告白をためらう百合の自尊心

岩国市　上村　夢香

母のためのバリアフリーに助けられ
歴史書を読み終えたのは雪の朝
深夜便好きな作家の声を聴く
九十歳に手作り野菜いただいて
追伸の短いことば秘める恋

宇部市　平田　実男

日本をまた留守にする安倍総理
手ぶらでも行けば喜ぶ老母が居る
平成の次の日本は大丈夫
心にも老眼鏡が欲しくなる
金星の価値がなくなる大相撲

下松市　有海静枝

自由なる猫の自由を奪い抱く
枯れました貴女が私を見ないから
本人のお悩み消しに来る眠り
スパイシーな罪悪感を咀嚼する
ままならぬコトばかりデス陽は燦燦

防府市　坂本加代

歯車は外れたらしい空回り
藍染めの手で弾く彼のバイオリン
予定表見てはやり繰り考える
半眼の母のまなざしもう仏
定年後延長戦が待っている

鳥取市　池澤大鯰

天気良し自然に体動きだす
薄っぺらなカードからっぽ使えない
カードキー理屈知らぬが使用中
気にくわぬそれでも黙し手をにぎる
指切りをしたばっかりに動けない

鳥取市　奥田由美

二千円のパーマの時だけ誉められる
連れ合いとヤジキタをする九州路
還暦の手習い阻むドライアイ
旅行後に不満たらたら妻 財布
編み直しのニットで育つ孫五人

鳥取市　加藤茶人

俺も居る数字の中の視聴率
閃きはベッドで浮かぶ摩訶不思議
妄想のシチュエーションは何故か海
訳ありと言うが大した訳で無し
老いらくの恋は鎧を脱いで燃え

鳥取市　岸本宏章

全力で咲き全力で散る桜
雪国に雪が降らないのも不安
ロボットにも段位あげたい将棋界
逆走を防げる自動運転車
不老不死だけは叶えてほしくない

鳥取市　岸本孝子

少子化に打つ手なくした国憂う
選り好みしなけりゃ職はたんとある
あれほどの努力は神もお見通し
人の手を煩わさずにぱっと散る
日本の文化大事に守るひな祭り

鳥取市　倉益一瑤

幸せの死角を抜けて来た孤独
ありがたい話欠伸が出てならぬ
作戦が狂い尻尾が出てしまい
茶番劇ふたりはすでにポンコツだ
風船玉になったあなたを追っている

鳥取市　田中天翔

乗りやすい人で重宝がられます
風呂敷は重宝いつも持ち歩く
時々は大風呂敷を広げてる
双方の開かれた窓心地いい
幸せは生の笑顔にふれる時

鳥取市　棚田　大

何故か俺儲かる夢はよく見るよ
お年玉孫のお礼にありがとう
忘れ物家に帰るも何だっけ
ロボットが俺をあやつる夢だった
愛のムチいやパワハラだややこしい

鳥取市　谷口回春子

廃屋の訪問客はホーホケキョ
雪の下負けるもんかと蕗のとう
健康と思った時は不健康
大穴を逃し舞い散る花吹雪
爺ちゃんは千万本の針を飲む

鳥取市　永原昌鼓

つまずいて初めて分かる老人度
ボランティア汗の笑顔が美しい
雪の下芽を出す準備ふきのとう
ふる里の川はさらさら鮎も棲む
生きてさえいれば何とかなる暮し

鳥取市　中村金祥

ロボットもお祓い受けて動きだす
雪の無い山陰の里平和なり
緩やかな棚田へ注ぐ陽がぬくい
節約をした生活に誇り持つ
その笑顔辛い仕事も軽くなり

鳥取市　夏目一粋

老い二人会話は少しずつ細る
やっと手に入れた無職の遊び癖
苦と楽は交互に来るのホントだよ
よく拝む割に幸せ寄って来ず
ありがとう労うことは知っている

鳥取市　平尾菜美

百歳へ貴方とならばラッタッタ
認知症を捌けぬ私不甲斐ない
しわ寄せは了解済みという家族
御法事がひっそり縁がうすれゆき
平常心悲しみ胸に仕舞い込み

鳥取市　福西茶子

年回り今年も我慢せよとある
指一本触れていないがあれは恋
巡礼はあきらめ写経とんど焼き
幸せはあなたがくれた子三人
ダイヤ婚難しいけど射程距離

鳥取市　前田楓花

困りますそんなに好きと言われても
追わないで追うから私逃げるのよ
痩せろとも太れとも言わない歯医者
ただ寒いだけが真冬の試練です
天か地か春の足音待っている

鳥取市　山下凱柳

長生きをしたい年金では食えず
無口でも以心伝心老い二人
川柳で左脳刺激しボケ防止
出席した顔ぶれ見たらビビります
あれこれと言われる内が華である

鳥取市　吉田孔美子

楽しさと怖さ山盛りの卯月
猫の平和ポーズに誠を誓う
初対面おじぎ三回までで良し
若い芽が出そうな家はほん僅か
漁止めて二十時間の夢現

鳥取市　吉田弘子

美しく枯れたい何時も自問自答
平凡とはこんなものかと冬ごもり
蝋梅と水仙の部屋冬ごもり
規格外ばっかりだけど無農薬
慶事より仏事の支出多過ぎる

倉吉市　猪川由美子

人生はまさかよもやの連続だ
目まぐるしい世アタマ切換え急がれる
賀状止めだんだん増えて寂しいね
増税へ倹約も趣味亦楽し
ミッチー皇后六十年有難う

倉吉市　牧野芳光

朝五時の空気を吸って蘇生する
柔らかいところに淋しさが詰まる
蟻の列その内終るときがくる
大事なものがいっぱいあって片付かぬ
使い捨てカイロのように冷めていく

倉吉市　山中康子

国会をみんな見てますその姿勢
この城で生きた平成あとわずか
失禁は恥じゃないよと嫁がいう
節電へ湯タンポ抱いて昼最中
今日もまた無償の空気いただいて

米子市　後藤宏之

墓まいりごぶさたばかりですみません
お勤めが長くて途中お茶にする
あの世よりこの世がいいと生きのびる
仏さん見てないふりが上手です
仏壇に行って来ますのご挨拶

助走つけ貧乏神に豆礫
センバツの母校に過去の血が騒ぐ
身の丈に合ったお城で日向ぼこ
出来るだけ美人の横に座らない
メークでは眉間の皺が隠せない

米子市　後藤　美恵子

ため息の度に昔が近くなる
顔色を読み熱燗を所望する
鍋ひとつ茶碗もひとつ箸一膳
お見舞いの言葉に返す空元気
お雑煮は入れ歯外して祝います

米子市　竹村　紀の治

虐待死させる世の中おかしいよ
万物の個性の違い認め合う
バースデー長生きせよと肉料理
小太りが長生きすると喜ばす
経験をしたことのない時代くる

米子市　中原　章子

注連飾埃だらけの桟に掛け
城山の上に八人今日は居る
閉めたあとポストに鍵を入れる癖
夢に出る女はみんな婆さんだ
晩酌はその日その日の打ち上げだ

米子市　成田　雨奇

おし鳥の真似ハードルが高すぎる
生煮えのきのうを煮詰め直す今日
筋書きの通り歩けたことがない
お気に召しましたかと咲く冬すみれ
大根が抜けない歳になった姉

米子市　吉田　陽子

屋敷内の神へ毎日礼参り
広かった浜がだんだん海になる
気にしてた広い額は福だった
洗い髪サラサラ病友のいい匂い
城のある街はやっぱりあこがれる

鳥取県　石谷　美恵子

雪の無い冬だが家族寄る炬燵
住み心地良いが不気味な好天気
昼二人残り物食う留守居役
足らなんだ子らに任せた恵方巻
春が来る春の衣も妻任せ

鳥取県　竹信　照彦

受験中エアコン明日の応援歌
今夜また雨が降るのは神の加護
東大の参考書は伏せたまま
私もそんな苦労に鍬を持つ
空晴れて友も駆け足祈るのみ

鳥取県　松川　行男

鳥取県　山下節子

人は皆儲かる時は有頂天
計算は簡単になる消費税
一瞬のひらめき人生を変える
神よりも頼りになったおかあさん
大変だ広い砂丘に草が生え

松江市　藤井寿代

鮮やかな逆転でしたポックリ死
ミラクルな生き様描く白い画布
救急車疑心暗鬼がへばりつく
浮気性草間彌生に嫉妬する
まっとうに生きてます毒飲みながら

松江市　松本知恵子

イベントの冬の広場でジャズを聴く
カニ汁を飲みながら聴くジャズもいい
壁作るより橋を架けよ 誰か言う
九十四歳一生懸命生きる母
飼い猫も外出多い温い冬

松江市　松本文子

野原と炬燵行ったり来たりしてる春
雪の道楽しく帰る酔っぱらい
レモンを噛る私に戻れない時は
我慢比べだ三世代同居
ホーム訪ねて柳誌を渡す友が居る

出雲市　伊藤玲峰

肩書が消えてこっそり遊びだす
有頂天に寒九の水を差し上げる
心解く炬燵の近さ友が出来
バスタブのくもりガラスに油断する
嘘ちょっぴり足して安心させてやる

雲南市　菅田かつ子

おじいさん出雲弁なら日本一
きっとまた会う約束をして別れ
啖呵きるそんな姿がまた見たい
そんな事あった昔を笑い合い
気がつけば美しすぎる落椿

雲南市　松本昌

栄枯盛衰人間ですよ当り前
ステッカー貼り新たなる火の用心
赤い花咲いていますよ事故現場
無造作に採れる過疎地の蕗の薹
過疎高齢なにが生きがい鍬振るう

島根県　伊藤寿美

自分史の根雪が溶けぬ冬の章
春雷遠く未だ此の世の客であり
「上から目線」倅も広辞苑も言う
子には子の言い分があり噛み合わぬ
百歳の大往生に冬の虹

高知県　小澤幸泉

七十年神のみ心読み切れず
老い病むは神の恵みか悪戯か
神さまが異父弟妹を引き合わす
さあ行こう先はまだまだ遠すぎる
孫去んで長く短かい夏終る

東かがわ市　川﨑ひかり

青い地球の運命握っているヒト科
子や孫にせっせと運ぶ無農薬
慌てたらお国なまりがひょいと出る
免許返納したいが出来ぬエトセトラ
雨の日の日記書く事なにもなし

松山市　栗田忠士

自分の幹に自分を巻いて生きている
片脚立ちでズボンがはけたうちが華
足掻いてはいるが諦めてはいない
取り敢えずここは笑って済ませとく
お先にどうぞ私ゆっくり渡ります

松山市　古手川光

入試頑張れ慌てず焦らず諦めず
老い二人とっても恐い共倒れ
飯喰って薬飲むのが仕事です
今の僕一歩進んで二歩下がる
萌え上がる野山が元気出せと言う

松山市　宮尾みのり

生きてゆくだけのお金があればよい
ふるさとの空家の税が攻めてくる
今日一日確かに生きた日記閉ず
腹括る覚悟の出来た曲り角
そう言えば昔は可愛いかったけど

西予市　黒田茂代

夫送るまでは命をたためない
独りになった時の寂しさふと思う
頼りになる弟の居るありがたさ
お手柔らかに老い支度まだその気無し
わたくしを苛むしもやけのいけず

西予市　西田美恵子

動物もキノコも喋り出す絵本
歌いやすくて優しい母の音符だな
銀の雨ドラマのように別れよう
封印のリボンを風が解きたがる
いないいないバアーたった一人のお留守番

北九州市　小松紀子

なんかしあわせと思えるときがある
大抵のことはなんとかなっている
今日ボランティア足腰がしゃんとする
人はひと私はわたしこれで良い
角をまるくしてほしいのよアナタ

煽てられ旗振り責めを負わされる
本年もたちまち二月老い二人
足腰の痛みに笑みで蓋をする
子供より先に逝きたいそればかり
都市に住む子を呼ぼうにも職がない

唐津市　坂本蜂朗

遠忌する寺の宗派や花菜漬け
人裁く任の重さに身が細る
街の灯にとけてアリバイ無いひと夜
豊かさに慣れて辛抱出きぬ子等
ときめきは君と逢う日の化粧台

唐津市　山口高明

これ以上弱らぬよう努めるぞ
万年青の実初めて熟れる祝い年
拇指の怪我夫が優しくなりました
手を振られ振り返しては立話
風邪気味で早寝温くぬく風呂止める

熊本県　岩切康子

番鳩もう十年のお早うさん
マニュアル車で計る四肢の活性化
平成が閉じる友の逝去ばかり
大地震大地が軋む身が軋む
自然に育てられ自然へと返る

熊本市　杉野羅天

断捨離も妻の勿体ないに負け
湯たんぽの温もり消えてトイレへと
ストーリーの判る落語が面白い
大寒波思考回路がショートする
結核もガンも凌いだ自負がある

札幌市　小沢淳

平和へと猪突猛進する年ぞ
八月の祈り忘れた改憲派
正論も太刀打ち出来ぬ多数決
ポスターが宝物ですサユリスト
少女棋士盤上睨むあどけなさ

札幌市　三浦強一

孫に春今年多忙になりそうな
招待券思わぬ賞で浮いてます
カルチャー始まり平常心を取り戻す
元号変る何か変化のある兆し
八十六元気楽しく過したい

（前月分）大阪市　榎本舞夢

同人特集　原稿募集

タイトル「平成を振り返る」詳細は112頁をご覧ください。

川柳塔の川柳讃歌 ⑰

上方芸能評論家　木津川　計

コーヒーは恋　珈琲はノスタルジー

水野黒兎

喫茶店に入り「ホットください」と頼むと「ブレンドですか?」「いや、ホットや」「ブレンドですね」「ホット言うてるやないか」「けど…、ホットミルクもホットオレンジもありますから」「ええ?　なるほど、そういう意味か、それでわかった。ホットコーヒーや」「承知しました」というやりとりを「こないだ喫茶店でした」と知人に言うと「喫茶店はもうおまへんで、カフェとちゃいまっか」という世の中になった。コーヒーはホットの僕。

雪の降る音を聞きたいなと思う

鴨谷瑠美子

〈雪やこんこん　あられやこんこん、と唱歌ではうたった。草野心平は「ゆき」で「しんしんしんしんゆきふりつもる」と読んだ。梅雨とかけて何ととく、となぞかけは問う。「巫女の鈴」ととく。そのこころは「きつうは振らん（降らん）」の洒落である。梅雨はしとしとと降るのだ。雨にも雪にも音があり、降り方がある。詩人・山田喜代春は「雪は正座して降ってくる。かすかに念仏唱えながら降ってくる」と。瑠美子さん、雪に合掌です。

はったりとべんちゃら相手で使いわけ

三好専平

大阪の知事だった黒田了一さんは東北大の学生の頃、思いを寄せる女性宅の前で夜毎バイオリンを弾き、射止めた。後の賢夫人智子さんである。いわばはったりの効果だった。対して作家・丸尾長顕が随筆できざで厭な男を書く。月夜の浜辺を歩きながら男が言う。「あんな遠くの月が波を渚に誘うのです。近くにいる貴女が僕の心を誘うのは当然です」これをしも歯の浮くようなべんちゃらという。専平さん、はったりの方がまだ許せるのでは。

「ごめんね」と言えば「いいよ」という笑顔

中村伸子

川崎洋の詩「ほほえみにはほほえみ」の末尾に一行を加える。「ビールには枝豆・カレーライスには福神漬け・夕焼けには赤とんぼ／花には嵐／サンマには青い蜜柑の酸／アダムにはいちじくの葉／青空には白鳥／ライオンには縞馬／富士山には月見草／塀には落書き／やくざには唐獅子牡丹／花見にはけんか／雪にはカラス／五寸釘には藁人形／ほほえみにはほほえみ／「ごめんね」には「いいよ」。伸子さん、おだやかな人間関係が一番です。

ロボットの掌には生命線が無い

鈴井いさお

「掌」説明して広辞苑はこう書く。「手首から先の内側の面」、そうには違いないが、谷川俊太郎は「からだ大辞典」でこう説明する。「一部限定版、運命の地図」と。詩人の勝ちである。その「運命の地図―生命線」がロボットにはないことをいさおさんは発見したのだ。さあ困った。このロボットは六十年の運命か二百年の生命か。あのロボットはいくつまで生き延びるのか、一切わからない。いさおさん、難儀な発見をして下さいました。

どうしてもどうしようから抜け出せぬ

上田ひとみ

どないもこないもならん状態を大阪弁では「どつぼにはまる」と言う。ひとみさんは気の毒に「どうしよう」と迷い続け、どつぼにはまったのである。生涯どつぼにはまり続けた人がいる。なにしろ「アイシテモ　あいしきれない／オドロイテモ　おどろききれない／ヨロコンデモ　よろこびきれない／カナシンデモ　かなしみきれない／それが板画です」と棟方志功が。ひとみさん、軽く、軽くです。

自選集

紙パンツ拒否した母のプライドよ
入院の母とスーパームーン見る
青空よこれが最後の車椅子
母はもう覚悟を決めている枕
そしてそして母は紙パンツになった

小島蘭幸

毎日の仕種気付かぬ幸だろう
蒸発の早い飲物飲んでいる
申し訳ないで小さな命消え
どの色で塗ろうか朝の予定表
平凡な暮らしの中の日章旗

竹治ちかし

蕗の薹探しあぐねた母はいま
順当に老いて人並貼るカイロ
ぜんざいが炊けてむなしい昼の月
四苦八苦赤字帳簿の申告期
立春の開花笑顔を連鎖する

津守柳伸

一強を叩く樹みんな背が足りず
家電器が順番どおり故障する
たまに降る雪だ溶けてほしくない
仏壇のお花長持ちする寒さ
三寒四温そと出ない日が続く

都倉求芽

鶯が啼く川がある山がある
初笑い母の教えを思い出す
つばくろの来る故郷に別れ告げ
柏手の正しく二つ初詣で
猫の子の乗っかっている車椅子

土橋螢

四十年川柳続けまだ未完
立ち位置は弁えている影法師
譲られた席のお尻のぬくみかな
居眠りとテレビで今日も無為無策
躓いた石よしよしと撫でておく

西出楓楽

校長の仕事はウソをつかぬこと
校長の鎧だろうか法規集
校長と文科省との遠い道
校長もかぶってみたい三度笠
校長で辞めて徳の字辞書に訊く

仁部四郎

消息を塔誌に見つけ安堵する
残り時間予告されても困ります
大阪城芝居の小屋は似合わない
満たされて塔誌に浸る月の尽
祈ること神の恵みに教えられ

前　たもつ

不思議な今年うぐいすが庭で啼く
雨漏りか命をきざむような音
廊下長なが病室は待っている
頬すこし孫のはなしに和ませる
握る手がまた来てくれと訴えって

政岡　日枝子

手紙着いたかとメールで確かめる
動物園でいちばん多いのはヒト科
未完成だから無題という絵です
生かされて輪廻転生倶会一処
気にするなと簡単に言う第三者

三宅　保州

待ったなし時の流れは止められぬ
幻の花を捜して獣みち
恋という文字がちらつく朧月
親切を愛と感じた情けなさ
おどけてはみても所詮は空元気

福士　慕情

おおそれた考えはせぬ八十の坂
長生きはその分苦楽多くなる
年寄りと思てか少女親切だ
婆ちゃんに似てると言われ不服な爺
爪だけは老いても日毎伸びてくる

村上　玄也

墓碑銘に刻んでいない旗の色
初級編パズルに知恵のありったけ
リュウグウは小惑星になりました
玄米が羨む白米の白さ
何となく春の気配のゴミ袋

森山　盛桜

成るようになる
幸福感まず胃袋のあたりから
血となって爪まで桜いろにする
わたくしを養う　もろもろのいのち
ふと思う　これが最後の食事かも
ケ・セラセラすべては川の流れです

八木　千代

新元号再出発の春となれ
寒から暖一転蕾慌てさせ
平成の名残り惜しむか八重桜
ここからはおまけ八十路を生きている
曲がり角曲がる現実待っている

山本　希久子

長生きをしたつもりだがまだ米寿
あと百年小銭を貯めて有馬の湯
二階からローマが見える家を建て
平成もサクラも散って行く四月
コメダでは命のはなしせぬことだ

板尾岳人

波静かのたりのたりと爪を研ぐ
一日の無駄食欲で取り戻す
行列の先が斎場まで続く
元気だね賞味期限は切れたのに
トンネルを抜けると月の裏に出る

川上大輪

平蔵逝く

点滴に通う病名腎不全
猫の日に逝きレジェンドになった猫
以って瞑すべし平蔵に弔花
平蔵の匂いの残る古い椅子
「ヘイゾー」と呼べばどこかで鈴が鳴る

木本朱夏

天皇のおことば胸に刻ませる
教え子のりんごさすがはプロの味
温室ですくすく育ついのちたち
にんげんに逢いたくて出たクロッカス
るんるんと音符連なるスケジュール

斉藤劦

はてさてな栃麺棒という言葉
トチメンボウおっちょこちょいということか
今がいい今がうとうと林住期
林住期とろとろ行けば臨終期
うとうとのままで逝けたらいいのだが

新家完司

1万歩まずは3日で1万歩
譲られたことがあるから譲る席
食卓がどんどん狭くなるふたり
ネオンきらきらあれは減点パパのころ
飲んべえがぽつぽつ欠けるクラス会

高瀬霜石

第41回　吉野ヶ里川柳大会

と　き　4月21日（日）午前10時開場
投句締切　11時30分
開　場　『きらら館』神埼郡吉野ヶ里町三津
高速道東脊振インター出て右折すぐ
宿　題　各題1句（欠席投句拝辞）
「新元号」　間瀬田紋章　選
＊4月に発表になったものをお題にします。
「　金　」　月波　与生　選
「どきどき」　高柳　閑雲　選
「乗　る」　木本　朱夏　選
「雑　詠」　梅崎　流青　選
会　費　2千円（昼食は準備しています）
送　迎　吉野ヶ里公園駅北口に9時半～11時
に迎えの車をご用意します。
主　催　わかば川柳会

句集の森

『花ごよみ』

門谷　たず子

病む人の涙か窓にみぞれ降る
倖せにつながる試練受けている
輪廻とや夕べに小さい骨ひらう
果物籠いくつ並べて他人の死
ダンディーに夫を仕立てて秋の街
春宵一刻三人の子と水割りを
比翼塚同じ祈りを持つ夫婦
川の流れのように別れが待っている
傘二つ干して夫婦という絆
手放した子は嫁のもの菜を洗う
愛されて脇役でよし福寿草
冬の虹恋に恋して女です
流し雛女が渡る橋のかず
遠い日の指切りばかり茄子の花
そしてドラマは二つ残っためし茶碗

（平成5年2月吉日　発行）

温故知新

小出智子川柳集『蕗の薹』から

三日前とおんなじことを書く日記
遠い日の海鳴りがする夜の鏡
ところ天大きな喜びなどいらぬ
桜が散ってまた諦めることを知る
失った指輪のように忘れよう
里帰りすればと桃の花が咲く
気にすればとても気になるキリギリス
一対一の強さが妻の方にある
新しい傘を雪に日におろす
傷ついた日も小鳥屋の小鳥たち
朝の夫婦に何かが少し欠けている
母の膝いつとはなしに猫のひざ
掃除機とおんなじことを繰り返す
生臭い風が受話器をとおり抜け
コツコツと鳴るのは鬼の足音だ
一人相撲の雨がしずかに降っている
少年の居る明るさで秋が来る

西出楓楽選

雲南市　永見安子

野球記事出てきて春が待ちどおし
楽しみは炬燵で描く春野菜
猪の年だが牛歩決めました
四日目に今年の思い消えて行き
楽しみは春の花活け春を待つ
色彩を頭に描く春花壇

小野市　田中辰夫

お互いを悪友と呼ぶ飲み仲間
好奇心持って川柳老いの詩
結び目が幾つも出来た赤い糸
片思い急に無口になる出合い
雨垂れの数をかぞえて人想い
三人分一人でこなす旅役者

三田市　中山寅男

亡き妻はスバル星座の傍に居り
あの世まで辿り着けるかこの脚で
ヒーローを夢見て振ったこのバット
この命閻魔様にか天女にか
悪童がやり手に見える同期会
正月誕生来ないで欲しいこの歳に

和歌山市　鍋嶋澄子

やさしさは人に寄り添うことと知る
狭き心不動明王見すかして
寒空の高野へ仏徒導かれ
しだれ桜寒さ耐え春備え待つ
金剛峯寺檜皮葺き屋根凜として
便り来た嬉しさにすぐ返事かく

伊丹市　岡村風琴

春陽へ木瓜の花咲き人を呼ぶ
メルヘンの森でコロボックルに逢い
バーチャルが異次元の夢膨らます
やさしさがこころの箍をそっと解き
百態の風と遊んで雲消える
伸び切った輪ゴムが見せるかったるさ

春つれて紋白蝶がコンニチハ
久し振り逢えばすっかり女学生
四・五歩だけ走って渡る黄信号
焦っても動かぬ体気は走る
ばったりと出会い覚悟の立話
弾んでる背からはみ出るランドセル

豊中市　貝塚正子

父母兄姉命日記する初暦
うれしいことのみ記録す日記帳
意のままに生きて寂しい独り居は
鶏が鳴き気持も和む郷の朝
人が好き次もヒト科に生まれたい
我が道を冬空見上げ星に聞く

神戸市　近藤勝正

あなたとは思い出だけの仲となり
特急の止まらぬ町はやがて過疎
連れ添って十年経てば隙間風
路地裏の名も無き花もまだ蕾
お地蔵に願かけ妻は石となり
霊峰を仰ぎ未練も消えた旅

舞鶴市　伊藤恒

愚痴らない今日は好天眉きりり
ふんわりと春陽と遊ぶスニーカー

鳥取市　大前安子

ことばより目の温かさ勇気湧く
友だからライバルになり燃えようよ
眼鏡拭くこころの準備するために
集まれば四方山話花が咲く

倉吉市　岡﨑美知江

風を聞き砂丘は冬の顔になる
砂利の下草の命があえいでる
輪の中のどっちをむいていいかしら
やりくりの上手な妻は宝物
大根のつかり重石に聞いてみる
あのそので通じる友と長電話

大阪市　樋口眞

パソコンに頼りペン字が下手になる
この調子続いて欲しい一万歩
例会の同じメニューに飽きて来る
キタミナミ歩けば殊の外疲れ
多忙だと言いテレビ映画を好む妻
あっけなく昭和の長屋壊される

山口市　青木隆子

達筆な賀状が届き友元気
旅終わり狭い我が家で大の字に
ここでもない狭い家でも出て来ない
クイズ解く惚けてないぞとムキになる
高かった流行遅れ箱の底
前向きにたぶん明日は佳き日なり

職業欄年金暮しと書いておく
肩書はいっぱいあるが無職です
以上でも以下でもないが職がない
生きるとは自問自答の日がつづく
特養で老人たちの軽いラブ

阿南市　小畑定弘

若い人が来るから今日はトマト鍋
一筆箋ぎゅっと詰まった愛がある
オリオン座いい日だったな帰り道
寄り添ってあげるだけでは崩れます
外に撒く豆は少うしだけにする

松山市　郷田みや

向き合って皺の深さを笑い合い
栄華とは儚いものよ花筏
人間の深い処にある火口
駆け登る若さに怖いものはない
向こうから来るから義理がまた生まれ

今治市　渡邊伊津志

コンビニへ寄っていくかと年金日
ぬるま湯に居てポジティブにはなれぬ
紅葉がもっと化けろとそそのかす
排ガスの黒い箱かもオゾン層
手招きの鬼は優しい顔をする

大洲市　花岡順子

糸切れたマリオネットになる茶の間
時に菩薩時には鬼の母の顔
風吹くなきっと残り火燃えあがる
古希近く無性に赤が着たくなる
主義主張竜馬の強さ思いしる

西予市　井関はるえ

岩合さん世界の猫に「いい子だね」
世の中はすすむわが家はアナログ派
「ダーウィンがきた」驚く出逢い今日もまた
成人式茶髪派手服男の子
戦など動物たちも悲劇です

福岡県　本田さくら

傷口を開いて思い出に生きる
春が嫌いだから春にも嫌われる
恋してはならぬと降車ボタン押す
女子トーク苦手な君と電話口
マグネット式の笑顔を持ち歩く

佐賀県　真島久美子

また一人名前を刻む里の墓碑
事の無い母のひと日にほっとする
胸の傷繕う糸を見つけ出す
魂を洗う石鹸なら買おう
庭の梅一輪添えて出す手紙

宮崎県　黒木栄子

沖縄県　あら　さくら

触れるだけフォークダンスのレモン味
肌に合う絹の感触手放せぬ
禁酒解き一日だけの祝い酒
月日たち愛の誓いはどこへやら
ゆっくりと実の成る時期を待っている

沖縄県　下地　香代子

忍び足ワッとおどかし人違い
忘れ物取りに行く間に忘れてる
反抗期そよ風にさえ立ち向かう
顔のしわ化粧でのばし笑み作る
散らかった部屋を見渡しまた明日

白河市　鈴木　たけし

みごと散る踏絵を踏まぬ貴乃花
カード払い一円玉の旅はない
リハビリと思えば楽し家事雑事
北風の庭土抱いた草を取る
夜が明けたらしい隣の雨戸開く

富士見市　中島　通則

現代っ子と呼ばれた頃もありました
月旅行行っても何も無いのにね
リセットし二度寝したのに同じ夢
俳優の名前が出ない僕と妻
平凡が一番と知るこの暮らし

横浜市　巌田　かず枝

子や孫に迷惑かけぬ老いの道
妻はパン夫ご飯で旅先も
金柑の甘煮作って風邪予防
ほろよいの夫は孫と長電話
核兵器いずれ自分を苦しめる

横浜市　長島　亜希子

年金「増額」数十円という話
中吊り広告お茶の話題はこれにしよ
息子より嫁喜ばす言葉選る
統計も信用できぬ国となり
七十五日待てば支持率また上がる

江南市　脇田　雅美

高望みしない平和の花咲かせ
売り尽くし日ごとに値段安くなる
土手の花季節をちゃんと知っている
練りに練ったプラン狂わすハプニング
わざわざと届けてくれた空財布

京都府　北野　クニオ

若草の山焼き眺め次は梅
寒い日はコタツとおでん酒が良い
金目鯛食って明日の起爆剤
あれこれと代名詞しか浮かぬ脳
万歩計老化を防ぐ宝物

大阪市　柴本ばっは

みおつくしの浪花で産湯今卒寿
冗談が苦手出世に遠く居た
明治の父笑いを恥と逝きました
母ちゃんは情報局で外が好き
無学でも正しい道を行った父母

大阪市　中島栄子

ちょっと行こ気軽な友が有難い
似た者同士心が和む縄のれん
好物は立ってた腹を横にする
鍋の湯気会話も腹も満たされる
曾孫増え年金据わる暇が無い

大阪市　降幡弘美

震う背に風邪の気配を感じとり
お別れがつらくバイバイ言えない子
ツライ夜疲れてるのに眠れない
今朝友が天国行きの列車乗り
雑草に忍耐力を教えられ

大阪市　森田遊子

切り替えてスローテンポの曲に乗る
春風がきっと味方をしてくれる
少しだけ意地悪そうなシワできる
カタツムリもう野暮だとは言わせない
用事ない日なら結構雨が好き

大阪市　森廣子

太陽に私の元気見て貰う
足るを知り心にゆとり満ちて来る
烏が一羽　友達は無いらしい
ほんの少しの情けで人は生きられる
半月おぼろ冬の寒さを噛みしめる

池田市　上山堅坊

びっくりだ欠食の子がいる日本
厭だなあ進化が格差生むなんて
異常豪雨が普通になってきた日本
インターネットわが最高の知恵袋
そろそろと歩くとあかん歳をとる

泉大津市　磯野不二夫

ゴミ出しはプラゴミだけのひとり者
万歩計病院内で一万歩
医者通い定年おやじらしくなり
すねるのもひとり者では絵にならず
先延ばしそれを言われぬ年となり

泉大津市　助川和美

フードロス悲鳴あげてる冷蔵庫
香典の額に迷った世間体
鈍感さ生きて行くにはいいのかも
母の愚痴聞いて孝行したつもり
金婚を終えて断捨離したい夫

生きている限り私の雛祭
お雛さま私は古稀になりました
水仙も梅も春へと向いている
こんな日もいいねふたりの日向ぼこ
外見も少し磨こう歳だから

貝塚市　吉道　あかね

淋しい耳へひとりじゃないと風の唄
御神木むんずと掴む冬銀河
ワクワクの出会いへ爪先は春へ
風雪に耐えて笑顔の花に会う
何もかも許してくれる春の雲

門真市　坂本　星雨

予定表診察予約優先に
まあだまだ誘いのかかるうちが華
おでん鍋湯気が支える家族の和
百均も小銭欠かせぬ消費税
曲り角右か左か正念場

堺市　羽田野　洋介

教養は知識でなくて生きざまだ
お互いに反論しない夫婦です
どれくらい捨てられてるのカレンダー
感じます太った保健師不信感
録画してCMとばし観ています

高槻市　三谷　白黒

サーカスの跡寒々と風が吹く
異性に興味あるのでまだ元気
果物屋さんにも八百屋さんにもあるスイカ
白髪になってもカッコいいなあ三浦カズ
水たまりに映りこんでる青い空

豊中市　木藤　こみつ

家中電気点ける夫と消す私
老いの坂からだの部品日々劣化
楽しい時間とけいの針が早くなる
土砂降りに差して行かない新の傘
貰いもの好きでないのに好きと言う

豊中市　齋藤　奈津子

AIにこき使われるか曾孫たち
無駄廃棄ケーキに続く恵方巻き
初詣十日遅れで子の車
応援も相撲テニスと忙しい
あのマスク患者か予防かどっちかな

八尾市　田邊　浩三

腸に染みる煮崩れの大根
貰くもの無いが笑顔なら出来る
便利さがヒト科生活脅かす
心技体全てジュニアに戻りたい
楽しいと思う事こそ上手くなる

八尾市　前田　紀雄

大阪府　小栢　こずえ

皆同じ二十四時間持って生き
言わんとこ思てもつい出るドッコイショ
老化だと思い許した怠け癖
する事が無いのではない嫌なだけ
無駄話それが老いには潤滑油

神戸市　大頭　としお

始まりはアダムとイブのリンゴから
ハグされて八十路の親父腰が引け
孫ほどのドキドキ感のない曾孫
上を見て下見て安堵する私
悔しいが口だけ達者無為徒食

神戸市　玄番　美恵子

スマホ置き少し青空見てごらん
我がままな薔薇を知ってるカスミ草
子育てに燃えた日もあり古日記
我がままも無理も聞いてる病み上がり
来る春へ緩い靴紐締め直す

神戸市　田本　古鈴

もろいのは骨だ心じゃありません
少しだけはじめはいつもそう思う
町内会回覧板を回す仲
退屈と孤独は同じ重さです
散る花よ急ぐな老いの歩に合わせ

尼崎市　清水　久美子

生真面目に言ってはならぬ四月馬鹿
蕗味噌の苦みが煽る酒3合
年金のある世に感謝啄木忌
人の世の常で相性ものを言う
豚コレラ麻疹もふって来た亥年

伊丹市　延寿庵　野鶴

ぼろぼろの辞書から学ぶ知恵無限
情報の海に溺れて明日見えぬ
浄土への切符売場を探してる
花筏ゆっくり世間見てござる
啓蟄へ新芽そろそろ跳ねたがる

篠山市　久保木　剛

ハイウェーきみまろ一人喋る帰途
何故こうも好みの違う妻と住む
産んだのに嫁の味方をする息子
眠れない今なら遅刻しないのに
厚労省今こそ組織大掃除

三田市　九村　義徳

金ないが贅肉たっぷり持っている
好物を皿にたっぷりバイキング
非核化はまだまだ遠い北の国
脇役があってこそですお分かりか
譲るより席譲られる歳になる

樟脳と母の残り香七回忌
朝夕日沖映え見たく移住する
席譲る子らの校章そっと見る
同時期に不思議と家電故障する
夫婦でも意見不一致当りまえ

三田市　幸田厚子

初夢は西方浄土一人旅
二の夢は羽衣纏い宇宙旅
Gゴルフシルバー族の社交場
今朝目覚め手足動かし五感無事
百五歳冥土忘れてにこにこと

三田市　馬場貴美江

大火鉢みかんを焼いた香が残る
おみかんはレモンのような詩にならぬ
ひと袋品よく含むおちょぼ口
コトと音今朝も新聞無事届く
欲が出て万博までは頑張ろか

三田市　松本ゆかり

福は内恐い鬼なら家に居る
手に持ってあれ何しにと立ち止まり
君の顔ニタニタきっと何かある
祖母の背を越えた孫からハイタッチ
おむつ変え板についたね娘婿

三田市　森玲子

お餅食べお酒を飲んで句が出来る
箱根駅伝ああ正月がやってきた
お正月日本国旗が見当らぬ
また一つ歳をとりますお正月
感謝感謝日本人に生まれつき

宝塚市　太田としお

朗らかなままで棺に入りたい
在来種の女絶滅した日本
頑張れよ声をかけたい冬の蝿
子に小言改心すると思わぬが
金のない自由は自由とは言えぬ

宝塚市　岸田万彩

いやな奴反面教師だと思え
つらい仕事するほど人は偉くなる
AIに仕事うばわれハローワーク
やっぱりな飲みニケーション大事だよ
これからはしっかり者の妻に添う

奈良県　中堀優

亥年には荒れる噂に怯えない
大吉のお札今年も持ち歩く
医者通いせずに今年も風邪に克つ
雪解けの便り年々早くなる
坪庭の玉葱新芽空を指す

和歌山市　福島一雄

岩出市　村中悦男

健康寿命延ばす気力で床をける
達者で行こう歩幅を広く意識して
体調がよくてすき間のない日記
一品を加えて出せたかくし味
人災を想定外と言いすぎる

和歌山県　森下よりこ

耐えて来た暑さ寒さも八十年
若いっていいな貴景勝に紀平梨花
仕合せの数をかぞえて八十歳
誕生祝きかれて肌着所望する
コタツでみかん毎日食べていて飽きぬ

鳥取市　副井裕

生き様に桂馬の動き真似てみる
記者会見疑惑はさらに深まった
同期会顔は分かるが名に詰まる
靴下を立って穿けないもどかしさ
句づくりは老後ドラマのアクセント

鳥取市　田賀八千代

ロボットと一緒に描く未来地図
ロボットがみそ汁つくる夢で醒め
残り物消費せねばとまた太り
よく動きよく儲けたが貯金ゼロ
動かんと足腰悲鳴サビてきた

倉吉市　若松由紀子

願い事多し賽銭値上げする
今日も待つ棚のボタ餅いつ落ちる
嬉しい事時々あって生きられる
昨日まで出来てた事が出来ぬ明日
点滅の黄信号ですこの身体

米子市　池田美穂

ありがたい母のおっぱい健在だ
買うも金捨てるのも金世知辛い
回る寿司時価がないから安心だ
年金をサプリメントが狙ってる
スーパーの値引き時間の顔馴染み

米子市　野川宣子

いつの世も鍵握るのは女神達
顔パスは通してくれぬ改札機
新顔が増えたとんどの火の周り
心臓は私一人に動いてる
インフルが怖くて外に出たくない

鳥取県　西谷悦子

冬の朝厚着に時間割いている
わたくしはわたくしのまま飾らない
ポケットにゆとりを詰めて生きてゆく
夢を追うパワー薄れてゆく加齢
幼少に母を送って意地がつき

瀬戸内市　宮宅比佐恵

ああ平和どうぞ九条揺れないで
日向ぼこ仏のような顔ならぶ
聞くだけは聞くよ私のボランティア
民主主義どこか崩れる音がする
ありがとの一言私の潤滑油

広島市　松尾信彦

手ぶらでも戻りふさがる帰省かな
年賀状癖字もおしゃれ懐かしい
手ぶらでと言われ手ぶらで行く勇気
一人居は笑うしかない対処法
うすうすは知ってるウフフ他人事

尾道市　小畑宣之

あれこれと父母の小言に今感謝
老境にあらず傘寿は青春さ
老いも良しライバル達とノーサイド
通販が増えて消え行く商店街
世界中増えてる自分ファースト

竹原市　若年幸子

IHあれこれ私指図する
北方領土まだまだ昭和終らない
雛巡り雪の町並はんなりと
春財布はしゃいでチャックゆるませる
春一番待ちかねている車椅子

竹原市　土井輝恵

お疲れさん嵐自由に飛ぶが良い
大マスク挨拶をされ誰かしら
助手席が免許返納ばかり言う
卒寿まで他人の役に立ちたいな
伴侶とや解り易くて解らない

三原市　笹重耕三

ディフェンスが狂った老人のカルテ
罰ばっかり貰う今日の心電図
潤滑油が足らぬ老いの生命線
寄り道が過ぎるわたしの歩数計
煽られないように一歩二歩譲る

三次市　伊藤寿子

変えられぬ警笛鳴らしてみるけれど
孫二人キラキラ光る眼に安堵
仏間の灯姑へ本音を告げている
死ぬ時は電話よこせと言った友
脳トレと毎朝5分弾くピアノ

山口市　中前幸子

花冷えや半分欠けた月と居る
遠い岬の海鳴りを聴くしじま
強風に煽られている負の思考
奇跡を信じて消えそうな虹を描く
神話の里の夜を焦がして舞う神楽

いのち消ゆキラキラネーム泣いている　広島市　田桑恵子

ただ静か音吸い込んだ雪の山

荒れた手にせめてタップリクリームを

風呂上がり大きな鏡見たくなし　竹原市　六田半徳

まだ不明あの世は何処にありますか

まだいいか弱い自分が妥協する

軽い気で言った一言悔い残る

救急車近づき小窓そっと開け　府中市　岸田武

越冬が叶わなかった蝿が墜つ

家族では一番早い花粉症

二三人寄れば誰かが咳をする

手袋を脱いで話の輪に入る　高知市　三谷松太郎

愛犬と諸行無常の夕散歩

物忘れいいえ初手から覚えなし

フレイルだそれロコモだとお世話さま

なおみちゃん変な日本語それでいい　唐津市　岩﨑實

わが旅も紆余曲折しどんづまり

生と死の兼ね合い不思議ゆだねてる

中国の獅子舞みごと技の冴え

副業を解禁するという知らせ

秋風に重い傷口なお深く　沖縄県　宮すみれ

古民家が人気ソバ屋に早替り

善玉と悪玉菌がはっけよい

春風も流行りメークに微笑んだ　沖縄県　禱モモト

春つげる老木桜は花三っつ

書き込みをリセットされたリハーサル

人見知り目で物語る初対面

赤ペンで孫の宿題チェック出来　黒石市　北山まみどり

雪しんしん疎遠になった人のこと

待つ人も待たせる人も雪だるま

かたくなに意地を通して霜柱

少しずつ溶かされていく虚栄心　弘前市　髙森一呑

良く笑う長生きの為生きる知恵

太陽に抱かれた野ばらハグされる

生真面目に観賞してます袋綴じ

肩書きがのけぞって歩いてる　仙台市　月波与生

父はもう煙で無呼吸症候群

ペッパー君だらけの心療内科

どちらでもいい人だけの多数決

手のなる方へ歩け誰もいない海

インフルの感染力に負ける僕
インフルの後には花粉攻めてくる
キャッシュレス携帯かざしパンを買う
黒幕を一度経験してみたい

千葉県　廣瀬良磨

苦しんで未来開けると信じてる
久しぶりスーツ姿の我が子見る
五輪後の日本衰退くい止めて
デジタルが主流な今も漫画読む

東京都　髙岡弥生

宿題も乗せて平成走り抜け
苦労話も泡と消えてくスキャンダル
真実か否かを計る目の動き
好きという言葉軽い日重たい日

横浜市　川島良子

戦争中生きぬき物が捨てられず
入院も病気もせずに感謝のみ
老いる身を当り前だと納得し
当り前身体の動きはカタツムリ

静岡市　渡辺芳子

スピードの違いはやる気だと思う
結び目にこだわり持ったアスリート
握る手の強さ感じて知る絆
執念が実り握れたのは答

名古屋市　冨田末男

漁火が忘れた恋を掻きむしる
愛あれば閉じた心もこじ開ける
青春の血が立ち騒ぐ傘寿かな
道楽のひとつもしたい年金日

名古屋市　山本三樹夫

病院のマスクの群れが恐ろしい
こだわりのマイ箸持って行くランチ
想定外妻が無口になった訳
ひと足先春を探しに歩く土手

豊橋市　小松くみ子

隣家から孫の太鼓にすぐ苦情
婚期過ぎ焦る親にも選び過ぎ
あくどさがなけりゃできない大儲け
心配や喜びの種もう二十歳

豊橋市　西郷紀美代

平成も終り長らえ生きてます
新元号わたしもちょっと若くなる
知らぬ間に古参と呼ばれ元気良く
孫寄って年金三か月分が飛ぶ

京都市　櫻﨑篤子

寒修行信者の男女滝を浴び
度が過ぎてスマホ見過ぎて目に支障
大坂なおみよくぞ勝ったね世界一
レストラン子供のマナー叱らない

大阪市　前川善之

大阪市　松田　聰

プレ金が僅か二年で忘れられ
三日月と明けの明星見事な美
冬木立春一番を待ちわびる
恵方巻まるかじりして満ち足りる

大阪市　横山里子

梅の名所まず甘酒で温もって
より添うて夫婦の如き寒牡丹
旅終えていつもどおりの独りの夜
レシピなどないが手秤目分量

池田市　太田省三

ほんのりと燗が独りの胃に灯る
遺言の田舎の山を持て余す
神棚へ淡い期待の宝くじ
渡し船旅情あふれる通学路

河内長野市　中島一彌

受けた分介護で返す親の恩
繰り言に合いの手入れて乗せる妻
熱い茶でアタマとカラダ解かす朝
素顔とのギャップ見飽きている鏡

河内長野市　原熊知津子

悪化する関係へうつ全休符
終電車酒の匂いをさせ走る
明日はあしたしっかり今日の米を研ぐ
春の陽射しへ駆けだしてゆくスニーカー

河内長野市　穂口正子

まごついて小銭あるのに札を出す
道の駅余分な物を毎度買い
見栄捨てて実を取ります残り時間
幸せを掴み損ねたちっちゃな手

河内長野市　渡邊修

お祝いは諭吉で良いと孫が言う
気が合わぬ人の声ほど聞きづらい
キミマロが中高年の的をつく
更新で一番こわいボケテスト

堺市　楠井輝子

俺正論妻屁理屈でなぜ勝てぬ
雨ララ相合い傘で寄り添って
出不精であるが句会はいそいそと
老い一人次はホームか終着駅

堺市　古川光雄

入院をする程でない病持ち
百均で大概そろうおやつまで
枝に刺すみかん目当てにメジロ二羽
あの世へは不断着で行ける家族葬

堺市　大和峯二

思いやり星条旗より辺野古沖
爆買いし9条いじり怖い道
トランプ氏羽毛のごとく軽い口
政権の弱さあらわにウソデータ

妻の口新種目なら金メダル
カジノとは言わずぼかしてＩＲ
夢洲に夢が咲く日が待ち遠し
共稼ぎ夕食作り妻を待つ

吹田市　岩口　のぞみ

欲ばらず健康だけの願いごと
お喋りにもっぱら花を咲かしてる
気晴らしは食事と映画ワンセット
パスポート五年十年迷う歳

豊中市　荒木　郁子

見えないものも見えます色眼鏡
ヘソクリが孫の笑顔で消えていく
苦言一つほめ言葉二つこれがコツ
妙案は会議の席より縄ノレン

寝屋川市　岡本　勲

一日の時計倍速もう二月
値段見て五輪は家で観ることに
正直に生きて背骨も真っ直ぐだ
新しい自分見付けに旅に出る

寝屋川市　川本　信子

寒い夜月もいじけてかけて見え
誕生日花とごちそう泣き笑い
カラオケで上手言われてうそ本当
節分ですし丸かじり歯が笑う

寝屋川市　坂本　ミヨノ

芝桜絵の具に勝る鮮やかさ
花筏川の流れに連れられて
富士山が衣脱いだりまた着たり
食材は海外なれど日本食

羽曳野市　磯本　洋一

川柳で心遊ばせ百までも
テニス界活気出てきた世界一
天災を誤算でしたとぬけぬけと
欲ぬけた心の鍵も抜けてもた

枚方市　谷　英也

初詣で地震台風なき年に
平成に勝る元号期待する
改元に印刷業は落ち着かず
核廃絶願い平成幕閉じる

箕面市　寺井柳童

単身赴任女房気ままで遊び好き
友からの優しさ届くバレンタイン
着古したＴシャツ肌に優しく
シャンソンを歌えば青春蘇る

八尾市　山川　寧

もどらない昔を悟る影法師
こう言えばああ言う息子頼りです
春なのにジグザグ気候身が軋む
お隣は野菜の出荷けたたまし

大阪府　髙木道子

頼りなく見えても月に土地を持つ
ショーウインドー猫背を伸ばす癖になる
青い空もっと素直になれという
無所属は僕の安全地帯です

神戸市　奥田宗光

いい句ですホメられ二年没の海
八十路坂脅しのセリフ妻と医者
人生を語るページに酒のシミ
いい人で通して傘寿疲れ果て

神戸市　興水弘

脱サラで目指すはやはり公務員
夢叶う花嫁修業五十年
テニス終え一汗流し出勤だ
米朝を落語と思う老い二人

神戸市　斎藤隆浩

冬の花寒さを受けて凛と咲く
立つ位置を変えれば違う景色見え
君の夢僕の夢とも重ねよう
若人が夢ぶつけ合う甲子園

神戸市　敏森廣光

幸せのとびら開いた福の神
いい夢に少し酔ってる三が日
悲しみの心開いた子の笑顔
子の開花そばで見守る親心

神戸市　山根弘華

行く先は終点あわてることも無い
コーヒーでもと安心させてカネのこと
あり余るおカネで揉めるよその家
断捨離に破る写真が多過ぎる

神戸市　米田利恵子

空気読む大人になれた息子たち
誘惑の甘さに負けてゆるむ紐
ロスタイムたくさんチャンスあったはず
孫自慢しているお声イキイキと

尼崎市　近兼敦子

金婚と我儘辛抱今日もまた
恋終わるこれから見栄は張りません
介護食お造り内緒ビール1
ドキドキよ女医さん美人看護師も

伊丹市　平井富夫

バレンタインチョコ愛か義理かは見極めて
誕生日母が居るから行く実家
介護者へ礼を言う母生き上手
さよならが名残り惜しくて手を握る

加西市　山端なつみ

見栄誇り捨ててこの身の肩こらず
どっこいしょっい出る言葉今を生き
食べきれずどんどん背伸び花盛り
田舎には帽子とモンペ良く似合う

篠山市　澤良子

豆撒きの豆に群がる子鬼供
節分に鬼と仲よく飲み明かそ
夢で見る昔の俺は腰がのび
亡き妻の誕生日きて仏花替え

篠山市　長谷川　善　輔

くり返す又うっかりの老いへ喝
馬鹿もいいとこ心で鬼が叫んでる
この思い遺影の夫へ愚痴こぼす
川柳に思いぶっつけ前向きに

篠山市　藤　井　美智子

ボーナスをへそくられても妻笑顔
席取りも仕事なのです花見時
上司と部下挟まれ俺の立場なし
今朝もまた起きて反省寝過した

三田市　大　西　重　男

雪の朝新聞拝んで読みました
今朝もまたカイロ二枚を貼る日課
如月に暖冬厳冬入り乱れ
ほろ苦い天ぷら食べて春が来た

三田市　住　吉　美和子

炊飯器拗ねるコードでひと苦労
体感が違う夫婦が同じ部屋
目覚め良いあれもこれもと動けそう
会話中あれこれそれの癖がでて

三田市　辻　開　子

三十年長い平成何をした
五寸釘うっても抜ける内緒事
八十路中目は偽レンズ耳日曜
縄電車もうつながない空いてくる

三田市　東　内　美智子

物忘れ笑い合える友がいる
ほめ上手分かっていても胸弾む
ブラブラと過す休みも腹がへる
べっぴんさん偽ブランドもらしく見え

三田市　中　山　昭　美

孫の前時に無い袖振ってみせ
寒月にみつめられただ立ちつくす
愚痴るだけ損手際良く次を練る
大仕事作って食べて片付けて

奈良市　尾　畑　なを江

葉を落とし木々凜として冬陽浴び
頬杖をつけば少女に戻るよな
立春に予定一つを記す朝
鬼の顔どこか哀しい鬼やらい

奈良市　加　藤　江里子

八十路過ぎ次は何かと前睨む
やりたいこと色々あるが進まない
見渡す車内スマホに負けじと本開く
ボランティアまだ力あれど期限ぎれ

奈良市　仲　西　賛　郎

美人の湯美男の湯とは書いてない
猪が闊歩している汚染地区
朝焼けを一人占めする露天風呂
旅先の避難場所まで下調べ

生駒市　児玉規雄

待ち侘びて便りが届く嬉しい日
想い出を辿る記憶の水仙花
好きだった素直に好きとまだ思う
白い蝶日向ぼっこに寄ってくる

和歌山市　北原昭枝

我慢せず聞き流してるまるい月
あいまいでいいの正せば角が立つ
ブルーシートまだ残ってる置きみやげ
痛ましいニュース子供はみな笑顔

和歌山市　倉橋悦子

集団の募金の声に遠まわり
やり方を変えると答見えてくる
羽根突きの罰は口髪チャップリン
つい癖で何でも値段聞きたがる

和歌山市　定松宏枝

ストローもペットボトルも地に還す
ゆるキャラの黒子の苦労思われる
スーパーが運動不足なる近さ
夜更けての独りゆっくり炭酸泉

和歌山市　佐藤まき

断捨離を決めたその日は日本晴
孫自慢止まらず耳が欠伸する
戦意失せ奈落の底も心地好い
一端のアウトローですうちの猫

和歌山市　西川千鶴

あれこれと配置かえても元の位置
裏表うらの私の太い眉
新月はオオカミ達の休肝日
恋愛に法律禁止ない老後

和歌山市　松本雅子

アカシヤの芽吹きが砂丘春にする
潮騒に朝の風紋薄化粧
砂山を幾つも越えて見える海
冬の砂丘雪庇が見せる鬼の顔

鳥取市　上山一平

ネクタイの歪み気になり上の空
自動ドア大きな口で招き入れ
るんるんと咲く気満々こぼれ種
派手な服落ちてく気持ち拾い上げ

鳥取市　山野すみれ

スマホならガラより簡単娘言う
スマホ持ち途方にくれた頃もある
待ちわびた友からライン「生きとるか」
きれいだろスマホの動画孫二歳

倉吉市　伊藤嘉昭

一輪の春我が家にもやって来た　倉吉市　大羽雄大

立春の暦に弾むヨイショッと
いつか読む積んでる本が邪魔になる
予報士の傘を厚着と指図する　倉吉市　堀かずこ

泣くまいぞ泣けば幸せ逃げていく
よい年にするもしないも我れ次第
今年こそ明るい日々をしあわせを
その笑顔宝石よりも輝いて　倉吉市　宮田風露

かじかむ手息吹きかけて芹を摘む
八十路でもまだ姦しい顔揃い
恵方巻ほおばる前に入れ歯飛ぶ
膝笑いうまく出来ないスクワット　境港市　中井虎尾

劇場型のサギターゲットお年寄り
馬鹿だって馬鹿にされればオコリマス
口喧嘩仲が良いからやる二人
上流と下流があって日本国　米子市　生田和之

居眠りは日ごと冬は春めきて
人の名は出ずとも顔は覚えてる
わが孫は隣りに住んで十日見ず
山陰に雨の降らない摩訶不思議　米子市　伊塚美枝子

日なたぼこ言葉はいらぬ老い二人
少子化で豆まく声も聞こえない
今日だけは無言で食べる恵方巻き
元気もらうテニス女王の世界一　米子市　川本美津子

年賀状前向き言葉書いて出す
正月が過ぎて木枯らし吹く財布
若ければやり直したい事が有る
言う事を効かぬ五体の機嫌取る　米子市　黒田紀美江

消費税増えても飲むようまい酒
蓋欲しい女の口は機関銃
へそくりを使い果して子は嫁ぎ
七十路を筋肉鍛え歩き出す　鳥取県　飯野菖子

もう一度着地をしたい母の膝
老いの道握りこぶしも緩みだす
罪のない没句哀れと慰める
川柳会月に一度の服選ぶ　鳥取県　門村幸子

回転の良い店に良い品揃え
最高の眠り目覚めてああトイレ
「無理は敵」胸に戒め貼っておく
迷惑かもバレンタインのチョコレート

遺言を書くほど財がない我が家
一人身で家で死ぬこと考える
失敗も過ちあって人生だ
麻生さんの顔みただけで腹が立つ

鳥取県　下田　茂登子

九十坂一日一笑をテーマとし
酔えばまた節のはずれた安来節
秋刀魚には熱燗いいねと上機嫌
いさかいを忘れた卒寿の好好爺

鳥取県　橋本　整

春のこと受験・失恋・喫茶店
大食いがよくも揃ったバイキング
たくさんの方に感謝を間に合うか
生きていく嫉妬の逆の祝福で

松江市　相見　柳歩

カーナビがカミさんよりもよく喋る
カミさんの姫さま抱っこ無理である
猪の天敵になりたい案山子
葬式に出て飾りつけ見て帰る

松江市　中筋　弘充

老いたとて花やぐ方を向いて行く
食品ロスもったいないの戦中派
楽しいと思えばきれいな血が巡る
二人目の心愛さん出ないこと願う

松江市　山根　邦代

父母に世直し願い香を焚く
平成が平和で終り安堵する
「大坂時代」到来か楽しみだ
行政の統計不正根が深い

出雲市　黒目　ひでお

下戸ふたり奈良漬け食べて頬染める
死ぬまでに大器晩成やり遂げる
太すぎる恵方巻よりカッパ巻
楽しんだ今日一日をラッピング

島根県　原　徳利

うたた寝のとろりとろけるまだら雪
非日常つづきこめかみ痛みだす
逆立てたり撫で付けたり鏡のまえ
ごみ袋にすっぽり入るようで恐い

岡山市　大石　洋子

裁かれる者なぞ居ない蟻の列
梅の香が誘う兆しへ細雪
喜寿の坂旧正月も寝正月
催促の得意な妻と犬が居る

岡山県　大杉　敏夫

嘘ひとつそして全てが狂い出す
流されて押した判このその行方
頼られてついにわたしは慎重派
素直さを真似てる時はお嬢さま

岡山県　小野　美那子

岡山県　藤澤照代

いつもより饒舌になる美容院
深い皺笑顔の裏の苦労人
柚子風呂に今日の幸せ浮かせてる
鈴生りの春待つ絵馬が風に鳴る

（前月分）鳥取市　山野すみれ

ちゃっかりと初心忘れて反り返る
人混みも過疎の村にも春の風
我慢などしない会いたい時に会う
方法を見つけるメガネ磨いてる

（前月分）京都市　櫻崎篤子

平成を見送る除夜の鐘をきき
美智子妃もこれで自由になれますか
歩行器は便利一ぱい買うて来る
木守柿平成も後わずかです

予告

川柳雑誌社・川柳塔社　創立95周年記念
第25回川柳塔まつりは9月28日(土)開催
場所：ホテル　アウィーナ大阪
詳細は5月号

西宮北口川柳会45周年記念川柳大会

とき　5月26日（日）
午前11時半開場・出句締切　午後1時

ところ　西宮プレラホール（プレラにしのみや・5階）
西宮市高松町4—8（TEL0798—64—9485）
阪急電鉄神戸線　西宮北口駅　南出口より3分

おはなし　「吟行で川柳を楽しむ」　赤松ますみ氏

事前投句　（2句・欠席投句拝辞）締切　4月26日（金）必着

課題と選者
「　恵　」　久保田千代　選
「交差点」　緒方美津子　選
「閃　く」　新家　完司　選
「うっとり」　矢沢　和女　選
「情　報」　村上　氷筆　選
「駆ける」　森中恵美子　選
「繋　ぐ」　小島　蘭幸　選

会費　2000円（お茶・記念品・発表誌呈）
昼食を済ませてご出席ください。

懇親宴　4000円　（先着　40名）
☆事前投句ハガキに懇親宴の参加・不参加を明記の上4月26日（金）までにお送りください。

投句先及び連絡先
〒663—8112　西宮市甲子園口北27—4—602
梅澤　盛夫（TEL0798—66—5612）

主催　西宮北口川柳会

橘高薫風句抄

（『橘高薫風川柳句集』平成十三年発刊）

走馬灯霊は肉より現なり
一輪の菊は気合いで咲くごとし
入学のよい目よい耳よい眉根
ネクタイのままでデカンショの輪に入り
花の宴家康ひとり目をつむり
昼の酒遠く雷鳴っている
マズルカへ拙者お相手仕る
鳩時計の鳩が覗いた悪だくみ
建仁寺垣相国寺垣マドモアゼル
飲む会のハガキは箸で裏返す
初明り秘仏開扉もかくやあらん
悪筆も墨痕淋漓年賀状
葡萄食べ終ると焼跡のような
映画ほど静かではない恋終る

田中博造・峰代夫妻に女子誕生

虹の子を千晶とこそは名付けたれ
紫の色の気合いが分かりかけ
ラブレター死屍るいるいとありにけり

悼　大野源一九段

閻王の前でも飛車の気っ腑なり
つきあいで踏まれています邪気の顔
落椿情炎未だこちら向く
水仙よりスキーのジャンプ端正に

次女早稲田大学入学

遊学の娘の決心と花のペン
タンポポの絮に意志ありわが怯懦
その日以後語らず書かず娘を思い
苦楽園口のさくらを見に来いと
ここは土佐河伯と河童呑みくらべ
夕桜釈路郎が向うから
水子塚時に桜も蒼ざめる
忍耐も少し異なる美女醜女
口説かれているに女は箸止めず
春眠のそのまま覚めぬ死もあらん
昼は花を夜は花火を見たふたり

英語 de Senryu㊽

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

鉄が錆びたと同様に扱われ
I am treated
the same
as rusty iron

銀行のお世辞も気の腐るものの一つ
a wearisome thing
a banker's
flattery

I am treated 扱われる　same as 同じように　rusty 錆びた　iron 鉄
wearisome 疲れさせる　thing 事柄　banker 銀行家　flattery お世辞

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句㉘　熊本地震の川柳作品

川柳句集『熊本地震の記憶』（熊本県川柳協会編　古閑萬風　2017）

21 世紀に入り火山噴火、台風、津波、そして大地震などの自然災害が世界各地で起こっています。2016 年 4 月 14 日と 16 日、熊本は二度にわたり震度 6 以上の地震に襲われました。二百人近い人命が失われ、熊本のシンボルであるお城は未曽有の被害を受けました。熊本に住む川柳人は地震の被害者であり、地震を経験した証言者です。熊本の川柳人によって地震から一年後に生まれたのが川柳句集『熊本地震の記憶』です。編集者らは「川柳は人間を詠む文学である。熊本地震に揺さぶられた人間像を読み取っていただきたい。」と出版の主旨を述べています。小学生からシニアまでが捉えたあの日とその後の人間像です。海外へ紹介するために、作品は吉村の英訳を加えました。

ダダッバリバリこれは地球の裂ける音　　矢　村　なお美
DaDa Bali Bali---/ this is the tearing cry/ of the Earth　　Naomi Yamura
ゆれつづく地面も脳も液状化　　いわさき　楊　子
shaking and shaking/ our lands and my brain/ liquefaction　Yoko Iwasaki
妻の名を叫んで揺れに耐えている　　黒　川　孤　遊
Crying my wife's name/ I endure/ this strong shake　　Koyu Kurokawa
震度７めげず隣のバラが咲く　　田　口　麦　彦
in spite of quake/seismic intensity 7/ roses next door bloom　Mugihiko Taguchi

誹風柳多留一二篇研究 70

山田昭夫・石川道子
小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男
清博美

594 **するか町中こふくものとりちらし**

山田 駿河町には、呉服の越後屋があり、

するか丁一ゑん是を領すなり　二五19
するがやとかへてやり度きこふく店　安六宮2

駿河町呉服より外用ハなし　宮二26

という句の通り、通りを挟んで一町まるまる越後屋だった。だから「駿河町中呉服物取り散らし」ということになる。

清 賛。家でとりちらしたらだらしないことなのだが、こちらは商売でとりちらす。

595 きのふまではなをつまんだ恥しさ

山田 初鉄漿。鉄漿は大変な臭気を発するので、「昨日まで鼻をつまんだ」鉄漿を、今日初めて塗る「恥ずかしさ」。初鉄漿は七箇所から貰い、歯を染め終えると、その七箇所にお礼（鉄漿の礼）に行くのが仕来り。その際、色々とからかわれたりするから、これまた「恥ずかしさ」。

きのうまで白いやうじが黒く也　三〇17
ふさ楊枝初てよごす恥しさ　安六55会

清 賛。

596 **首尾の松あれば不首尾の柳あり**

山田 「首尾の松」は浅草御蔵の川端にあった松で、対岸の松浦屋敷の椎木とともに、大川を猪牙舟で吉原に通う遊客の目印であった。行く時はこれからの首尾を、帰る時は昨夜の首尾を思い廻らすあたりにあったので、そのように俗称されたそうだ。

面白さ首と尾のある松を見る　安六55会

柳は日本堤から衣紋坂を下りた左側にあった「見返り柳」のこと。吉原の客が大門を出て、遊客が後朝の名残を惜しんで見返る所。

もてたやつばかり見返る柳也　六二10

主題句は、吉原での扱われ方を対比したもので、昨夜は持てて、ご満悦で首尾の松を眺めて帰る者も居れば、遊女に振られて不首尾に終わり、恨めしそうに「見返り柳」で見返る者も居る。

清 賛。

597 **ひきがたり中やすみして蚊をいぶし**

山田 弾き語りは「三味線などを弾きながら、浄瑠璃などを語ること」（『日国』）。手も口も同時に二役をこなすわけだから精神的緊張も加わり、蚊に喰われても追い払う余裕などない。

いつそ蚊のくふもこらへるひき語り　七32

これが三味線だけなら、

踊子ハ一トばちぬいて蚊をはらい　三22

という事も出来るが、弾き語りの場合は、主

題句のように「中休みして蚊を燻し」という次第になる。

清　賛。

598　切リもちのやうなで四ッ手あせをふき

山田　分厚く畳んで切り餅のようにした手拭いで駕籠舁が汗をふく。超特急で吉原へ急いで、流れるような汗なのであろう。

清　賛。

599　**もんもうなやつをばうめぬ始皇帝**

山田　焚書坑儒。秦の始皇帝は、医薬・卜筮。種樹などを除いた全ての書物を焼き捨てさせ、彼に批判的な儒者数百人を生き埋めにしたという。しかし「文盲な奴」などは論外だから「埋めぬ始皇帝」。

きついもの四百余州に本がなし　一五4
いさめると穴だと始皇おどす也　一三25

清　賛。

600　**文使そらつとぼけが上手なり**

山田　文使いは「吉原語。女郎の手紙を客に届けるのを職業とする人」（「江」）だから、他の人たちに悟られないように届けなければならない。そこで、「空っとぼけが上手なり」でなければ勤まらない。

文遣ひ道など聞イておびき出し　六2

清　賛。

601　**かべにたてかけて有のをいんきよあげ**

山田　「壁に立て掛けて有る」というのは、吉原の張り見世で居眠っている新造であろう。それを「隠居揚げ」。若い新造は寝濃く、それを老人が買うというのは川柳の常套。

あくびをしたのをと隠居ハ見立　傍二19
天命をしつて新造はかり買ひ　傍五15

石川　賛。壁にもたれて居眠っているのでしょうか。

清　賛。描写の妙。

602　どろぼう〳〵といだてんおつかける

山田　韋駄天は「もとバラモン教の神で、シハ神またはアグニ神の子という。仏教に取り入れられ僧、あるいは寺院の守護神となった。（略）釈迦が涅槃の後、捷疾鬼が仏舎利から歯を盗み去ったとき、この神が追いかけて取り戻したという伝説がある」（「日国」）。主題句は、この「伝説」を詠んだもの。

人参ハ韋駄天附子ハ足疾鬼　一八公19

清　賛。

603　**百とるに上下を着てはいまハり**

山田　百は百人一首。

百人をのけて礼者を居らせる　五九4

というような場合もあるが、どうやらこの年始客は、それに参加したようだ。それで「上下を着て這い回り」。屠蘇機嫌ででもあったか。

屠蘇の生酔百人を相手どり　一〇九19

清　賛。

604　**ぎやうぶかなわぬにいらさる関か原**

石川　関が原で西軍として参戦した石田三成の盟友大谷刑部は癩を病み歩行がかなわなかったという。江戸時代に作られた句である、そんな大谷刑部に冷たい。

小便をせぬが大谷形部なり　六27
安九礼3

小栗　賛。「ぎょうぶ」は「行歩」（歩行）と「刑部」をかける。

清　小栗説が句のヤマ。

愛染帖

新家　完司　選

（投句289名）

夢語るより先ずパンツ干さなくちゃ

米子市　成田　雨奇

（評）確かに「夢よりも現実」ではあるが、現実ばかりでは侘しすぎる。パンツが乾いたらまた楽しい夢を語り合おうではないか。

恵方巻廃棄処分のないように

大阪市　津守　柳伸

（評）世界で廃棄されている食品は年間13億トン（全世界の食品の三分の一）とのこと。来福を願う恵方巻を廃棄したら天罰が下る。

長生きの感想ですか伊呂波歌

唐津市　仁部　四郎

（評）「色は匂へど」から始まって「浅き夢見じゑひ（酔い）もせず」で終わる伊呂波歌。解釈は様々あるが「長寿の虚しさ」かも…。

CMの合間ちょこちょこ家事をする

羽曳野市　宇都宮ちづる

（評）家事を放棄しているのではない。核家族なのでCMの合間の「ちょこちょこ」だけで茶碗洗いも床掃除も終わってしまうのだ。

ネットって便利ドンドロケを知った

土佐清水市　辻内　次根

（評）辞書には載っていない「ドンドロケ」。ネットで検索すると「鳥取弁で雷」とある。雷の感じもユーモアもあって秀逸な方言。

もやもやの気持ち一緒に毛玉取り

豊中市　池田　純子

（評）摩擦によってケバだった繊維が絡まりあった毛玉。丁寧に少しずつ取っているうちに、「こころの毛玉」も消えてしまった。

繁栄を陰で支えている格差

三田市　谷口　修平

（評）一億総中流を経て、今や格差社会になった我が国。冷や飯を食わされている下請け業者や非正規社員の待遇改善が急がれる。

勝負師になれる諦め悪い人

倉吉市　牧野　芳光

（評）短所は長所。諦めが悪いのは粘り強いということ。何度痛い目に遭っても諦めない粘着質を勝負事だけに使うのは勿体ない。

何らかの欠乏　チョコが止まらない

東京都　川本真理子

（評）「やめられない止まらない症候群」に陥ったのだろうが、さて何が欠乏しているのか。こころの壁に穴が空いているのかも…。

肩すくめ雪降る街に一人住む

篠山市　長谷川善輔

（評）一人暮らしにも慣れたが、訪れる人もいない雪の日はいささか寂しい。だが、生きてさえおればまた楽しい春は巡ってくる。

サイコロよ一の目だけがなぜ赤い　紀の川市　山東日出男

威勢いい人からちょっと距離を置く　大阪市　森田　遊子

愛と金　金がうっちゃる土俵際　羽曳野市　中川ひろ介

通販が美人になると言っている　鳥取市　倉益　一瑤

妻はもう美人あきらめ長寿の湯　羽曳野市　吉村久仁雄

転ぶなと夫に呪文かけている　奈良県　渡辺　富子

踏切で走る電車の腹を見る　宝塚市　丸山　孔一

薬とサプリ飲まずに生きる自然体　香芝市　山下　純子

怒鳴るなとガイドラインに書いてある　沖縄県　森山　文切

集まった個性でつくるミルフィーユ　黒石市　北山まみどり

紙魚だってタテヨコ食べる好き勝手　伊丹市　延寿庵野鶴

覚えたい気持ちにさせぬ薬の名　大阪市　小野　雅美

焼き芋を食べて歯磨き一通り　海南市　小谷　小雪

大阪市　若本　安代
わくわくと新元号を迎えたい

高槻市　初代　正彦
改元の節目に仕舞うクラス会

横浜市　菊地　政勝
平成に取り残された拉致・領土

大阪市　江島谷勝弘
ピピピピピおまわりさんに停められる

橋本市　石田　隆彦
速度違反はじめ言い訳あとペコリ

和歌山市　古久保和子
いま脱皮しました服は裏返し

岡山市　丹下　凱夫
本心は二重帳簿につけてある

門真市　坂本　星雨
バンクシーの絵だとは誰も気が付かず
カニカマに蟹味噌のない寂しさよ

三田市　北野　哲男
春節の時は行かないキタミナミ
梅干しは甘いしばあちゃんは若い

岡山県　紫　しめの
米寿ですオーラ出てると言われます
長らくの漬物石も今無役

笠岡市　藤井　智史
インフルになればなったでゴミの山
四日目になるとインフルにも飽きる

大阪市　大川　桃花
いい人といい男とは違うのだ
コーヒーの横でおでんのイートイン

藤井寺市　鈴木いさお
親バカ30年爺バカ5年

朝霞市　前田　洋子
順風もエアポケットも有る此の世

松江市　石橋　芳山
磯臭い男に明日の天気聞く

尼崎市　永田　紀惠
黄泉行きの駅の時計に針がない

倉吉市　伊藤　嘉昭
くつ下は「片脚立ちで」が先に逝く

三田市　福田　好文
節分に花見の場所を下見する
血の絆うすくなったな墓じまい

貝塚市　吉道あかね
母さんと呼ぶ人いない雛あられ
古稀からは平気へいきで生きて行く

神戸市　山口　光久
裃を脱いだ男が盛り上げる
どうしても僕には言えぬおべんちゃら

鳥取県　斉尾くにこ
もの言わぬ臓器を虐待しました
なによりも楽しいたわいない会話

唐津市　山口　高明
古里の亡母甦る胡弓の音

岡山県　小野美那子
長いトンネルついにおしんになっている

仙台市　月波　与生
リバウンド中と会うたび言っている

三田市　上田ひとみ
そういえば去年も同じ頃ダウン

長野県　丸山　健三
温故知新ロダンも僕も熟れた歳

佐賀県　真島久美子
真剣にホットミルクを飲んでいる

弘前市　高瀬　霜石
順調に老いて診察券の山

豊中市　木藤こみつ
霊園へ行くバスが出る最寄り駅

富田林市　山野　寿之
二代目の露店茶髪のたこ焼き屋

鳥取県　門村　幸子
餅三昧お腹周りに力つく

大阪市　平井美智子
寸胴というがバランス取れている

河内長野市　渡邊　修
亥の年に想定外の豚コレラ

青森市　守田　啓子
トゥルースリーパー敷くとなんだかキャリア組

弘前市　福士　慕情
除雪車の後の除雪に汗を掻く

枚方市　山口弘委智

天の声地の声聞いて句に挑む

大阪市　吉内タカ子

夢に出た一句嬉しい病み上がり

島根県　原　徳利

川柳で巨人ファンだと知った敵

大阪市　古今堂蕉子

とぼけた味出せたらいいな一行詩

山口市　青木　隆子

琴線に触れた句そっと胸に抱く

鳥取県　石谷美恵子

しんどいが好きで行きます句会の日

和歌山市　磯部　義雄

元号が変われど柳誌変わらない

堺　市　大和　峯二

川柳に寄り添い生きて楽余生

箕面市　広島　巴子

冬眠で何も浮かばぬ句ができぬ

鳥取市　山下　凱柳

全没の憂さを晴らしにカラオケへ

堺　市　奥　時雄

カラオケでヨイショばかりの情けなさ

河内長野市　森田　旅人

君の瞳は乾いてないかSNS

米子市　竹村紀の治

スマホでは雄弁になる人見知り

松山市　栗田　忠士

ガラケーは使えぬらしいキャッシュレス

和歌山市　松本　雅子

いいのかな進行形の恋してる

神戸市　奥澤洋次郎

恋なくてなにが人生また振られ

高槻市　片山かずお

振り向いてくれない人を好きになる

堺　市　矢倉　五月

免許返納足腰弱る頃なのに

堺　市　村上　玄也

返したら二度と取れない免許証

熊本県　岩切　康子

まだ元気六年日記また作る

境港市　藤原　久直

百歳に向かって上る夢の坂

八尾市　高杉　千歩

星に願いを夢追いかける九十三

宝塚市　太田としお

あげるばかり誰もくれないお年玉

西宮市　福島　弘子

百歳からもらいましたよお年玉

川西市　大坪　一徳

五十年妻に感謝の金メダル

弘前市　高森　一呑

五十年妻の子分になっている

鳥取市　奥田　由美

六十年のリセットボタン押せたなら

枚方市　谷　英也

今が旬五感正常八十路です

弘前市　稲見　則彦

雪女直滑降で隙をつく

米子市　伊塚美枝子

初雪にはしゃぐ子供と嘆く老い

大阪市　樋口　眞

寒い朝言葉忘れている孤老

岡山県　山縣のぶ子

掘り炬燵逆らう人の無い孤独

池田市　太田　省三

ジャムの瓶夫婦で開ける寒い朝

豊橋市　西郷紀美代

プチ家出夫の動き見てみたい

三原市　鴨田　昭紀

六秒間待って怒りを遣り過ごす

香芝市　大内　朝子

そこここに春が産声あげている

熊本市　杉野　羅天

北帰行たった一羽に引っぱられ

河内長野市　原熊知津子

普通って何斜めから考える

鳥取市　夏目　一粋

捨て切れぬものはやっぱりお金だな

枚方市　海老池　洋

おばちゃんの声を補聴器拾いすぎ

明石市　糀谷　和郎

おばちゃんの話に句読点がない

三原市　笹重　耕三

歯車を狂わす焦げついた言葉

香南市　桑名　孝雄
自画像の絵の具は酒で溶いてある

三田市　堀　正和
呑む話だけで終わったミーティング

八尾市　山根　妙子
研ぎ澄まし大吟醸になるお米

神戸市　細川　花門
ちょい飲みで確かめてみる店の味

奈良市　山本　昌代
婿たちのガヤガヤ酒の瓶転ぶ

鳥取市　山野すみれ
徳利の口から漏れる甘い声

高槻市　松岡　篤
薬より酒を飲むなという処方

松江市　栂瀬みちを
ゆったりと時が流れる休肝日

大阪市　藤田　武人
記念日になるアル中の休肝日

日高市　根岸　方子
酒飲みに下戸の気持はわかるまい

大阪市　宇都満知子
湯豆腐がポン酢の海へプルプルン

府中市　岸田　武
湯豆腐をふはふは本音話し合う

橿原市　安土　理恵
年寄りくさい色が似合ってくるようだ

鳥取市　岸本　宏章
消費期限自己責任で決めている

藤井寺市　太田扶美代
わくわくわくちょっぴり株を持っている

富士見市　中島　通則
コスパでは右に出る物無いもやし

鳥取市　前田　楓花
誕生日ハートマークのオムライス

奈良県　安福　和夫
なおみ流勝気と謙虚二重丸

奈良市　大久保眞澄
惜しみなく断捨離できる公文書

岡山市　永見　心咲
インフルが流行る同窓会は明日

広島市　岸本　清
そこかしこ監視カメラがいる時代

横浜市　川島　良子
老人ホームのDMじっくり目を通す

阿南市　小畑　定弘
燃えるもの探しつづけるベレー帽

鳥取市　田賀八千代
絡めてた指の隙間で愛が醒め

豊橋市　小松くみ子
あくびする小猫につられ出るアクビ

唐津市　岩崎　實
山村留学限界部落支えてる

米子市　吉田　陽子
編み棒に絡まる現在過去未来

岡山県　藤澤　照代
縺れるから二枚も舌は持ちません

大阪市　岩崎　玲子
幸せをはかるこころが恥ずかしい

倉吉市　山中　康子
利尿剤腹が立つほど忙しない

鳥取県　竹信　照彦
頻尿止め薬で便秘一週間

大阪市　柴本ばっは
無理むりムリ骨が言ってるスクワット

唐津市　坂本　蜂朗
初詣で一円玉を処分する

岡山県　田中　恵
窓拭いて天道さまを座らせる

米子市　生田　和之
朝が来たああと欠伸で始発する

大阪府　米澤　俶子
折り畳み傘の代わりに畳む杖

塩竈市　木田比呂朗
検診値すこし上がって八十路坂

三田市　大西　重男
目標の歳を越えたぞあと付録

岡山市　大石　洋子
逃げる術知っておきたい平和ボケ

鳥取市　岸本　孝子
天然のグレーヘアーで押し通す

大阪市　奥村　五月
窓際で外の空気はよく見える

大阪市　藤原千恵子
猪突猛進自己のスタイル貫こう

共選欄　檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　367名）

「ぴかぴか」　川端一歩選

新人が一人柳社に来てくれる　土佐清水市　辻内　次根
ぴかぴかに磨いたはずだった我が子　奈良市　大久保眞澄
ぴかぴかの一年生を塾が待ち　松山市　宮尾みのり
ぴかぴかに磨かれリンゴ嫁に行く　橋本市　石田　隆彦
ぴかぴかを着けて病院闊歩する　堺　市　内藤　憲彦
ウグイスの糞で鮫肌光らせる　尼崎市　清水久美子
日本が輝きましていた昭和　神戸市　敏森　廣光
すり足で磨きをかける能舞台　大阪市　升成　好
新入生を迎え教師も若返る　門真市　坂本　星雨
好奇心ぴかぴかまるで少年期　香芝市　大内　朝子
針一本これが私の武器である　橿原市　居谷真理子
陸前の海に漁火甦る　藤井寺市　鈴木いさお
ぴかぴかの子どもは誰のものなのか　さいたま市　星野　育子
お裾分けぴかぴかにして返す皿　鳥取市　前田　楓花
全集の背中が語るよき時代　京都市　都倉　求芽

「ぴかぴか」　山岡冨美子選

陸前の海に漁火甦る　藤井寺市　鈴木いさお
新元号になってもぼくはヘブバーン　弘前市　髙瀬　霜石
靴脱いで孫の新車に試乗する　三田市　福田　好文
ぴかぴかの財布小銭とカードだけ　倉吉市　岡崎美知江
新人が一人柳社に来てくれる　土佐清水市　辻内　次根
ピカピカになると威厳のない小銭　岡山県　紫　しめの
椅子一つぴかぴかにして窓の際　和歌山市　武本　碧
ピカピカは誰もくれない作り出す　大阪市　岩崎　玲子
場所を得て助詞ぴかぴかと唄い出す　南あわじ市　萩原　狸月
春よ来いまたぴっかぴかになれ私　弘前市　浅田　隆樹
ピカピカの頭褒めてもいいのかな　八尾市　田邊　浩三
ぴかぴかのビルが私を値踏みする　神戸市　奥澤洋次郎
こころして使うぴかぴかの小銭　大阪市　津守　柳伸
ぴかぴかに磨いたような初日の出　豊中市　齋藤奈津子
通学路背より広いランドセル　鳥取市　福西　茶子

定員が割れてめでたくご入学　篠山市　酒井　健二
未来見る眼鏡ぴかぴか光らせる　奈良県　渡辺　富子
氷上で大逆転の星光る　八尾市　山根　妙子
いざピーク汗キラキラと山男　大阪市　柴本ばっは
足裏がぴかぴかビリケンはこそばゆげ　羽曳野市　吉村久仁雄
ぴかぴかの若手老人会の古稀　河内長野市　村上　直樹
ぴかぴかと輝く内に生前葬　八幡市　今井万紗子
入幕の化粧まわしに鬢の艶　枚方市　丹後屋　肇
ぴかぴかの鍵盤第九弾み出す　大阪市　津村志華子
輝いた日日を奪った大津波　大阪市　古今堂蕉子
誇らしく勲章つけている遺影　三田市　北野　哲男
空がぴかぴか広島あの日忘れない　西予市　井関はるえ
ぴかぴかは着ず輪に溶ける両陛下　伊丹市　岡村　風琴
ぴかぴかにいつも磨いている五感　鳥取市　山野すみれ
点滅の青が呼んでる向う岸　米子市　竹村紀の治
ランドセル善意が届く被災地に　広島県　田桑　恵子
毎日がぴかぴか光る未知の時　豊中市　水野　黒兎
功績がまぶしく光る感謝状　南あわじ市　荻原　狸月
昨日より笑えるように拭く鏡　大阪市　小野　雅美
ぴかぴかの新米食べて永らえる　岡山市　大石　洋子
炊きたてのご飯で握る塩むすび　豊中市　松尾美智代
被災地にLEDの輪をつなぐ　岩国市　上村　夢香
ぴかぴかが一番先に狙われる　岡山県　田中　恵

ぴかぴかの廊下二の足踏んでいる　高槻市　島田千鶴子
ピカピカにしてゴメンネと抗ガン剤　富田林市　中崎　深雪
毎日がピカピカ光る未知の時　豊中市　水野　黒兎
新一年何度も背負うランドセル　大阪市　藤原千恵子
ぴかぴかに磨いた鏡皺見える　三田市　大西　重男
淋しくて必死で揺らすペンライト　門真市　坂本　星雨
ぴかぴかの包丁調子とりもどす　藤井寺市　鴨谷瑠美子
ぴかぴかの噂が好きな更衣室　堺　市　柿花　和夫
ピカピカのシャベルかついだボランティア　岩出市　村中　悦男
あっぱれよピカピカすぎて寛げず　堺　市　楠井　輝子
ぴかぴかに磨いたはずだった我が子　奈良市　大久保眞澄
ピカピカの廊下は修行僧の汗　弘前市　福士　慕情
ブローチはガラスだけれど元気出る　朝霞市　前田　洋子
借金の国のピカピカした夜だ　橿原市　居谷真理子
すり足で磨きをかける能舞台　大阪市　升成　好
全集の背中が語るよき時代　京都市　都倉　求芽
ぴっかぴか八十歳のイヤリング　雲南市　菅田かつ子
トイレバスぴかぴかにする僕の役　鳥取市　岸本　宏章
ぴかぴかのスーツ甘さは許されぬ　松山市　宮尾みのり
ぴかぴかの人であふれる新年度　鳥取市　副井　裕
ピカピカのキッチン響く電子音　大阪市　原田すみ子
ぴかぴかのSLを呼び町興し　唐津市　仁部　四郎
ぴかぴかのコップビールが泡立たぬ　明石市　糀谷　和郎

みちのくの栄華を今に金色堂　和歌山市　佐藤　まき
哀しみは見せず磨いているメッキ　佐賀県　真島久美子
卓球囲碁将棋界はピッカピカ　大阪市　江島谷勝弘
ぴかぴかになるまで初心呼び戻す　和歌山市　武本　碧
三百年ぶりに輝く興福寺　奈良市　中堀　優
勿体ないような村の信号機　堺　市　奥　時雄
いるだけでいいそれだけでいいんだよ　長岡京市　山田　葉子
身をやつし新元号を迎えます　奈良県　安福　和夫
贈られた財布に五円玉光る　寝屋川市　森　茜
ぴかぴかの元号提げて君の星　和歌山市　堀　冨美子
こころして使うピカピカの小銭　大阪市　津守　柳伸
新元号になってもぼくはヘプバーン　弘前市　高瀬　霜石
核時計ヘピカピカと警告灯　羽曳野市　徳山みつこ
ぴかぴかと光る素材へ絵筆とる　河内長野市　木見谷孝代
返すまで磨き続けている命　大阪市　平井美智子
新米の炊き立てご飯みてごらん　広島市　岸本　清
丹精こめた新米炊いて御仏前　篠山市　長澤　喜弘
分身を今は磨いている途中　熊本市　杉野　羅天
ぴっかぴか夢満載の母子手帳　和歌山市　福井　菜摘

秀　句

全身が若さいいなあ真っ直ぐで　三田市　上田ひとみ
海王星の先をぴかぴかするロマン　出雲市　竹治ちかし
ぴかぴかに磨いてあげる新元号　四條畷市　吉岡　修

ぴかぴかと流れる星は人工だ　鳥取市　中村　金祥
ぴかぴかに磨いてメッキ剥げ始め　西宮市　亀岡　哲子
ぴかぴかの車に乗っている不安　八尾市　内海　幸生
分身を今は磨いている途中　熊本市　杉野　羅天
黄信号ぴかぴか光る迷い道　防府市　坂本　加代
気もそぞろ他人行儀で乗る新車　香南市　桑名　孝雄
ぴかぴかの車椅子押す難しさ　三田市　辻　開子
湯上りの裸はみんなぴっかぴか　高槻市　杉本　義昭
万華鏡今が一番八十路です　枚方市　谷　英也
妻の手にぴたりと合った安かった　大阪市　榎本日の出
ぴかぴかの頭を撫でるお爺さん　鳥取市　土橋　螢
ぴかぴかの知恵より二匹目のドジョウ　鳥取市　加藤　茶人
医者通いぴかぴか靴が遠慮する　鳥取県　西谷　悦子
卓球囲碁将棋界はピッカピカ　大阪市　江島谷勝弘
ぴかぴかの回覧板が来る四月　松江市　中筋　弘充
三百年ぶりに輝く興福寺　奈良県　中堀　優
お裾分けぴかぴかにして返す皿　鳥取市　前田　楓花
何度でも磨く破れたハートでも　松江市　藤井　寿代
ピカピカの一年生は過疎の星　西宮市　秋元　てる

秀　句

ゴミ捨て場黙って掃除しています　岡山市　工藤千代子
お見せするこれが大人の光り方　青森市　守田　啓子
ぴかぴかのままで大きくなりなさい　沖縄県　森山　文切

100 人間たち

重箱の隅の、誰もが見過ごしている小さなことを発見して世の中に紹介することや、独自の見解を述べるのが川柳の面白さであり、大きな役目でもあると思っています。

しかし、「人間とは何ぞや」などという大きな命題も、料理の仕方によっては川柳味たっぷりな作品に仕上がります。

人間てどんなものかと辞書を見る　岩倉　鈴野
人間も奇妙な生き物の一つ　前田　楓花
人間も最初は裸だったのに　山田こいし
人間がちょっと可愛くなる裸　平井美智子
服を着ているから人は傘をさす　上山ヒサヲ
人間はゴミ製造機だと思う　大川　桃花

人間の正体を調べようとしても生物学的な記述しかありません。たった一人の人間でも、その心理まで分析すると膨大な記述が必要であり、簡単には解明できない「奇妙」な生き物です。元は裸だった人間が服を着るようになって傘が作られ、遂に頂戴した尊称は「ゴミ製造機」とはなさけない。

表しか見せてくれない人ばかり　石橋　芳山
大方はプチ善人でプチ悪人　永田ふき子
欠点を見つけて人は寄ってくる　早川　盛夫
人間は暑い寒いと愚痴ばかり　池田　美穂
人はみなひとりで泣きながら生きる　正畑　半覚
虫食いでいいのキャベツもにんげんも　丹下　凱夫

裏側も見応えがあればお見せしたいのですが、あいにく継ぎはぎだらけのオンボロ模様。善行をすることもありますが、稀にはズルいことも致します。愚痴をこぼしても仕方がありませんが、少し心が軽くなるのです。無農薬のキャベツと同じように「虫食い」であるのも純情な証拠でしょう。

直立歩行してから嘘をつき始め　山松みち子
人間は年１０００回の嘘をつく　杉本　克子
人間に人間という敵がいる　川崎ひかり
人間という厄介もののいる地球　奥澤洋次郎
地球にはやさしかったな原始人　中島　哲也
人間が檻に入ればよいのです　三宅　保州

法律を破ると捕まって裁判にかけられ、場合によっては刑務所に入らなければなりません。それが法治国家のルールですが、他者に損害を与えない程度の「嘘」は頻繁に横行しています。また、自然を破壊し生き物を絶滅に追いやっているのも人間です。たまには檻に入って反省しましょう。

ＡＩの軍門に伏す霊長科　丹後屋　肇
ロボットと猿に分化をするヒト科　北野　哲男
やかましい人はたいていよく眠る　鈴木　霞
大方の人は静かに生きている　木村　彦二
人間もいいなと思う寄席帰り　鎌田　京子
人間という肩書きを大切に　矢倉　五月

人間が造り出したものでありながら人間の能力を超えた仕事をするＡＩ（人工知能）。未来の地球はロボットとＡＩが支配するのでしょうか。しかし、どれほどロボットが進化をしても寄席の人情噺にホロリ泣いたり笑ったりできるとは思えません。「人間であること」に誇りを持ちたいものです。

「先　輩」

（投句　239名）

江見見清選

一歩二歩前行く人が先輩だ　鳥取県　竹信　照彦
先輩の影踏まぬよう飛び越える　門真市　坂本　星雨
就活へ先輩の糸たぐり寄せ　横浜市　菊地　政勝
先輩に連行される三次会　松江市　中筋　弘充
年だけは先輩のまま終えた地位　犬山市　関本かつ子
先輩の跡をとぼとぼ二十年　倉吉市　山中　康子
先輩が去った部室のぬるい風　大阪市　古今堂蕉子
先輩の誘い断り育メンに　京都市　三宅　満子
先輩に近づきたいと鞭を打つ　池田市　上山　堅坊
せんぱぁーい甘える声が鼻につく　豊橋市　小松くみ子
背中だけ必死に追って来たのです　三田市　上田ひとみ
先輩と呼べば不思議に従える　奈良県　安福　和夫
先輩と言われワリカン言いづらい　大阪市　高杉　力
先輩風吹かす間もなく追い越され　加西市　山端なつみ
先輩の背中で先が見えません　橿原市　居谷真理子
五十年先輩面のままごめん　神戸市　冨永　恭子
先輩の財布どきどき見栄を張る　香芝市　大内　朝子
都合いい時は先輩面される　堺　市　村上　玄也
近道をしない先輩だった通夜　佐賀県　真島久美子
ここ一番やはり先輩出番です　枚方市　山口弘委智

先輩の姿が照らす一歩先　神戸市　奥澤洋次郎
後輩の上司が僕をさんで呼ぶ　鳥取市　岸本　宏章
年下を先輩と呼ぶ二浪生　堺　市　坂上　淳司
先輩の震える足を見て覚悟　河内長野市　森田　旅人
兄弟子を越える夢みてチャンコ鍋　堺　市　澤井　敏治
先輩に怒鳴られながら盗む技　出雲市　竹治ちかし
先輩のままで終った片想い　藤井寺市　太田扶美代
有能な後輩赴任する噂　横浜市　川島　良子
お嫁さんに先輩顔はしませんよ　大阪市　笠嶋　惠美
人生の先輩やはり父と母　紀の川市　楠原　富香
先輩へ徐徐に少なくなる賀状　奈良市　宇賀　史郎
先輩と呼べば無いよとそっけない　豊中市　水野　黒兎

佳　句

先輩をチコちゃんと呼ぶ除の口　三田市　堀　正和
先輩に教え乞うてる別れ方　大阪市　金川　宣子
妻先輩再就職はキッチンだ　大阪市　柴本ばっは
先輩を喰い散らかした外来魚　三田市　谷口　修平
古稀迎え卒寿白寿に聞く老後　富田林市　中村　惠

人

先輩も同じ膏薬貼ってはる　堺　市　内藤　憲彦

地

アンテナが何本もあるわたしの師　弘前市　髙瀬　霜石

天

先輩も親も未熟をいじめない　八尾市　宮崎シマ子

軸

子や孫の元へ先輩消えたまま

「ごめん」

（投句　２４０名）

西田　美恵子　選

ごめんねが言えた子供を抱き締める　高槻市　島田千鶴子
陳謝より反撃に出る怖い国　鳥取市　福西　茶子
ファックスも留守電もなし悪しからず　西宮市　福島　弘子
ごめんねが引っかかってる喉仏　高槻市　片山かずお
また上がる天下御免の消費税　河内長野市　藤塚　克三
ごめんねの絵文字ひとつでごまかされ　大阪市　小野　雅美
ごめんでは済まぬ改ざん公文書　奈良市　米田　恭昌
ごめん私右へ並えが出来ぬ性　松山市　宮尾みのり
献血もドナーも齢と断わられ　松原市　森松まつお
約束を果せなかった影法師　和歌山市　北原　昭枝
遅刻魔はごめんごめんとやって来る　豊中市　池田　純子
一言のごめんが解いたわだかまり　熊本市　杉野　羅天
ごめんとは言わぬ男の意地がある　大洲市　花岡　順子
いつまでもひよこのままで済みません　島根県　原　徳利
実はずっとあなたが好きでした　ごめん　沖縄県　森山　文切
ハヤブサがごめんとリュウグウを蹴った　海南市　堂上　泰女
美しい雨があやまりながら降る　橿原市　居谷真理子
ごめんなに介護余計につらくなる　南あわじ市　萩原　狸月
気付かずにごめんあの日は若かった　和歌山市　武本　碧
ごめんねと言ったら灰汁が抜けたよう　倉吉市　岡﨑美知江
またの日を子等に約束するごめん　富田林市　関　よしみ
お役ご免過労死の洗濯機　西予市　黒田　茂代
ごめんでは済まない昭和史の汚点　出雲市　竹治ちかし
ごめんねの温い言葉を信じよう　高槻市　富田　保子
詫びる勇気次の一歩の背中押す　富士見市　中島　通則
ごめんねと蜂が集めた蜜を取る　鳥取市　岸本　宏章
ごめんごめん何時も遅れて来るおとこ　大洲市　中居　善信
悪筆を御免と言わず済むメール　池田市　奥園　敏昭
ご好意を無にしてほんまごめんなあ　神戸市　山口　光久
「ごめんなさい」素直に言う日言えない日　横浜市　川島　良子
ごめんなさい言えて明日を取りもどす　奈良市　長谷川崇明
今ならば水に流せるのにごめん　河内長野市　木見谷孝代

佳　句

一言のごめんで薔薇になりました　大阪市　田中ゆみ子
髭づらでごめんふだんはこんなもの　鳥取市　池澤　大鯰
ごめんねへなんもなんもの温い仲　札幌市　三浦　強一
胃の底に溜まった心無いゴメン　佐賀県　真島久美子
ご期待に添えませんのよあしからず　松山市　柳田かおる

人

タイミングずれたごめんを抱いている　藤井寺市　太田扶美代

地

プチ整形さらりと過去を切り捨てる　弘前市　高瀬　霜石

天

謝っていたと伝えてくれますか　大阪市　平井美智子

軸

抱き癖をつけてごめんと母帰る

初心者教室

題―守る

居谷　真理子

佳句に選んだ照代さんの作品をご覧下さい。「義理を守って」とありますが、義理は「立てる」あるいは「張る」が正しい！という声が聞こえてきそうです。同じく千賀子さんの句は「意地を守り抜く」。これも意地は「通す」「張る」だ！と言われそうですね。

正しい日本語を使うことは原則です。しかし言葉は生きもの、十七音の中で柔軟に姿を変えます。作者の気持ちがより鮮明に伝われば、それで良しと私は考えますが、みなさんはいかがでしょうか。

（原は原句　参は参考句）

原 神仏（かみほとけ）そばを離れず見守って　重男

参 神仏そばを離れずいてくれる　恒

原 国民に嘘をついても妻守る　時事吟としては遅きに失した感もあり。

参 国民に嘘つき守る妻と僕

原 騏驎獅子伝統守る若い衆　一平

騏驎獅子―鳥取県の無形民族文化財とか。一平さんは鳥取の方。

参 若きらに受け継がれゆく騏驎獅子

原 わたくしがわたしを守るカイロ貼る　(門)幸子

参 わたくしを守り独りで貼るカイロ

原 あなただけ約束したが漏れてくる　貴美江

参 守れない人と約束した内緒

原 お守りが未然に事故を防いでる　ひでお

参 お守りが防いだ事故はきっとある

原 お守りも年数経てば資源ゴミ　(澤)良子

参 お許しを古いお守りゴミに出す

原 マネージャーベンチを守り陰で咲く　徳利

「陰で咲く」まで言うとくどくなります。

参 マネージャーベンチを守る好プレー

原 母守る守ってくれた母だから　隆子

参 いま守る守り育ててくれた母

原 守りにも攻撃的な隠し玉　和之

参 守りにも要る攻撃の隠し球

原 守ってます天国からの妻の声　整

参 妻の声天から守っておりますよ

原 入学祝お守り付けてランドセル　奈津子

参 お守りも付けて祝いのランドセル

原 お母さんスマホに子守りさせないで　(森)玲子

母親の様子もほしいですね。

参 車内化粧スマホに子守りさせながら

原 哨戒機お国を守る意地がある　光雄

参 哨戒機お国を守る意地で買う

原 ヒナ鳥を守る姿を子に見せる　くみ子

参 ヒナ鳥を守る姿を子と見てる

原 只今は健康維持を守るだけ　こずえ

「維持」と「守る」が重複します。

参 今はただ健康守るのが仕事

原 子供でもいつもあなたは守り神　(高)弥生

参 我が子というあなたがきっと守り神

原 子や夫守り育てた小さな手　美恵

参 子を育て夫守った小さな手

原 ウルトラの母地球とポチ守る　雅子

とぼけた感じが愉快ですが中六ですね。

参 ウルトラの母だ地球とポチ守る

原 賢い人守れぬ約束うまくさけ　開子

六八五になりました。ひと工夫で五七五に。

参 守れない約束避けている笑顔

原 禁煙を守ってからのお菓子好き　紀美代

参 禁煙を守ってお菓子ばかり食べ

原 卵を守るカラザ必ずある卵　こみつ
参 黄味守るカラザ必ずある卵
原 守っていくものが何もない自由　よしお
参 守るもの何にもないという自由
原 生きている証に賀状つづけてる　(大)洋　子
参 生きてます今年もやはり書く賀状
原 子を守る親の心境野菜畑　美枝子
参 子を守る心でまたも行く畑
原 堅いガード　スキを見せないお方です　亜希子
参 私には隙を見せないお方です
原 死ぬまで貴女(あなた)を守るとは言ったけど　善　輔
　リズムを整えましょう。
参 最後まで君を守ると言ったけど
原 ストレスへ猪口の一滴身を守る　剛
参 ストレスから守ってくれる猪口がある
原 指切りげんまん絶体だよと念押され　洋　一
　面白さを加えて
参 指切りげんまん絶対ですよ絶対ね
原 孫帰る余韻ぬくもり声残し　(末)力
　おっしゃりたいことはよく分かります。
参 ぬくもりと声を残して孫帰る
原 街中の防犯カメラ監視の眼　通　則
参 防犯という名で監視するカメラ
原 眼鏡かけマスクし守る花粉から　弘　美
　状態を説明するだけで終わらず、どこかに
　独自性がほしいです。
参 顔おおう眼鏡マスクで花粉ノー
原 ヨーグルト二人分け合いたべている　まさる
参 健康へ二人分け合うヨーグルト
原 小さい事積み重ねての福袋　風　露
参 小さい事つまる私の福袋
原 トランプが守ってくれるはずがない　里　子
参 トランプが他国を守るはずがない
原 眉きりり描いて守りを見せている　雄　大
参 眉きりり描いて守りを固くする
原 シーザーに門の守りを任命す　(貝)正　子
　シーザー?　沖縄の魔除けならシーサーで
　すが
参 お土産のシーサーうちの門守る
原 守秘義務が固くて独り浮いてはる　(高)道　子
参 守秘義務を通して独り浮いてはる
原 象徴を守って去りゆく両陛下　信　子
参 象徴のお立場守り通された
原 留守番もまともに出来ぬ自己嫌悪　勝　正
参 留守番もまともに出来ぬ僕なのか
原 守られて長寿年令伸びるのみ　ゆ　き
参 守られて健康寿命また伸びる
原 非核化の大義を守り平和呼べ　三樹夫
参 非核化の大義を守り抜いてこそ
原 みどりの上着見守り隊の友が居た　(東)美智子
参 友が居た見守り隊のみどり着て
原 守るものあります妻と犬に猫　優
　原句と参考句、声を出して読んでみて下さ
　い。どちらのリズムがいいでしょうか。
参 守るものあります妻と犬と猫
〔佳　句〕
守る家出来て息子がまぶしいよ　和　子
のし袋義理を守って薄く出す　照　代
ちっぽけな私の意地を守り抜く　千賀子
守られて命灯している老後　由紀子
守るものが増えるが結婚も良いぞ　利惠子
故郷の廃家を守る仁王札　みちを
お守りの数だけ運を期待する　廣　光
〔今月の推せん句〕
母介護娘は外野守るのみ　山端なつみ
エア・バッグ試してみたいみたくない　磯野不二夫
閻魔にも黙っているわこの話　池田　美穂

川柳塔鑑賞

同人吟　太田　扶美代

―3月号から

失恋をしたので角砂糖三つ

居谷　真理子

角砂糖三つが何か意味あり気で、なあ、何で三つなンと聞きたくなる。読む人の気を間違いなくそそる。

コーヒーは恋　珈琲はノスタルジー

水野　黒兎

カフェなんて、ちょっと口に出して呟いてみました。異性と飲む時は珈琲としておきます。何となくノスタルジーな気がします。

私にも責任がある温暖化

三浦　強一

そうですね、私も含め国民全員の責任だと思います。こう言うものの考え方には、お人柄も含め強く同感致します。

熱をもつうちに書きたいラブレター

前田　楓花

ラブレターに限らず手紙ってそんなものですね、日が経って書くと、長長と書いても相手に伝わりにくいものですよネ。ある大会に出そうかどうしようかと迷っている封筒があるのですが投句する事にしました。

床暖にして冬が楽しくなりました

江島谷　勝弘

我が家も床暖思案中です。床暖は有るに越した事はないのですが、楽しくなると言う発想に気がつきませんでした。

もう少し役に立ちたいなと思う

川端　一歩

役に立ちたいので、長生きを考えるなんて凄いですね。仕事を持ち、家庭を持ち、それを全うして来られた今、その上にまだ役に立ちたいなんて、謙虚過ぎると思います。

守られてきたこれからは守る番

木見谷　孝代

意味は二つに取りましたが、いずれに取ってもいい句だと思いました。今まで守ってくれた人をこれからは自分が守ってあげなければと固い決心をされたのでしょう。

アルバム整理過去を旅しただけだった

古今堂　蕉子

アルバム整理は楽しい仕事の一つですね。旅しただけだったと、一見、面倒そうな書き方、つまらなさそうな書き方なのに、ほのぼのとした詩情を感じました。早速、私もアルバム整理やってみたくなりました。

リーダーの色がチームの色となり

高杉　力

この句を見てまず思ったのは自分の参加する、二三の句会の事でした。そう言えば入選する、しないに関係なく楽しい会もありますし、なる程と一人で頷いています。

励ましとなるか思案のメッセージ

源田　八千代

こうゆう場面に遭遇する事は誰にもあると思います。此方の思いがどこまで通じるか少し心配で躊躇されたのだと思います。お気持ちはとてもよく分かります。

七草粥ふしぎよく合うレモン一滴

澤井　敏治

川柳の本から、しかも男性からこんないい料理のアドバイスをいただくのは嬉しいです。七草は揃わないかも知れませんが、五草ぐらいは揃いそうなので、早速今日か、明日かにでもやってみます。直感ですが、簡単な上にとても美味しそ

うですから…。

心ならずも体が不義理するのです

矢倉五月

私の体は脳に不義理をするようになりました。もちろん心にも反抗をはじめたようです。頑張ろうと思っています。

AIの時代へ手探りの八十路
自分との戦に処方箋はない

山岡冨美子

八十路でもAI時代に置いてけぼりにされぬよう手探りの形でも、時代に遅れぬ様に付いて行こうとする、とても前向きの句。自分との戦に処方箋はない、そうですね。自分を信じて頑張る以外はないと言う事の意味と思い、力強いものを感じました。

祈るようおもねるように医者に問う

中崎深雪

パソコンに釘づけの医者の背におもねるように問いかける、深雪さんの姿がはっきりと目に浮かびます。おもねるように、に気持がとてもよく出てると思いました。

古箪笥若い私が眠ってる

安芸田泰子

大先輩の泰子さんの句は好きで、いつも注目して見させてもらっています。簡単で明瞭スカッとしているけれどお題からズレたりは絶対にない、参考にさせていただいている。

車椅子の人のオシャレなイアリング

北村賢子

私にも車椅子の友達がいます。一週間前近くの介護ハウスに入所中の彼女を訪ねました。元元オシャレな人なのですが、髪をカットした直後という事もあってか、シャンプーの香り仄かに迎えてくれたのです。いくつになってもオシャレは大切だとしみじみ思いました。

亡き妻の知らぬ姿で生きている

山田耕治

案外知らないと思っているのは耕治さんだけで、奥さんは耕治さんのしそうな事は大体お見通しなんではないでしょうか、そんな気がします。でも反対に意外な面を見つけてほほえんでいらっしゃるのかも。

楽な方へ流れる家事もウエストも

大久保眞澄

太りたくても太れない歳が来ますよ。私の場合、気をつけていてもすぐ太ってしまった頃は懐かしいほど昔です。

品行方正いつも一人で浮いている

米田恭昌

几帳面でやる事成す事が、理に叶っていて立派。近寄り難いけれど尊敬されている筈。羨ましい限りです。

老犬に大丈夫かと見上げられ

谷川憲

見上げる時の犬の目可愛いですね。

雑巾になる日の覚悟出来ている

古久保和子

嬉しくともはしゃぎ切れない、と言って淋しい、悲しいのでもない、すっきりしない感情がいつも胸にあります。とても同感です。

チコちゃんに叱ってほしい永田町

上村夢香

本当ですね、誰それに、ではなく何党何派でもなく永田町全体に喝を入れてもらいたいものです。

信念を曲げぬ男の背も曲がり

石谷美恵子

頑固だった夫も最近になってゆっくり私の話も聞いてくれる様になりました。腰が少し曲って痛い所が一つ二つ出来て、徐々にやさしくなるのだなと気がついた所です。

布団干すのにも全力要り出した

黒田茂代

出来ない事が増えてきた中で、布団干しは一番堪えます。背中が痛みます。

水煙抄鑑賞

—3月号から

宇賀史郎

残り者同士の引いた当りくじ

小畑宜之

嫁ぎ遅れ貰い遅れのカップルが幸せな家庭を築き子が巣立つ、最高の相性。

ありがとうなんと温もりある言葉

宮田風露

他人同士は勿論、夫婦親子間でも一寸した相手の好意に有難うを。

長生きという人生の罰ゲーム

小畑定弘

赤信号片足立ちで春を待つ

若松由紀子

ままならぬ望みであれどポックリ死

門村幸子

高齢者の疾病死別などの苦悩を罰と受けとめずに、明るく積極的に健康に努めて、卒寿を過ぎればポックリといかぬまでも病院での最後が短くなるそうです。

こんなにも日本離れた硫黄島

吉道あかね

太平洋戦争の最激戦地硫黄島は返還後自衛隊が駐留し、一般人は住んでいません。船上より戦没者へ黙祷を捧げ、かくも遠い所で勤務している隊員に感謝。

国会も十六歳に任せたら

田邊浩三

将棋卓球スケートなど十六歳の若者の素晴らしい活躍。選挙年齢を十六歳に下げ若い力に日本を託したら。

情報社会置きざられても生きてやる

小栢こずえ

スマホデビュー爆発寸前脳回路

川島良子

ラインSNS等分らない言葉など情報化についていけない。従来の新聞テレビで生きて行く決意。多くの高齢者の思いだ。他方、スマホの利便性、将来置いてけぼりになる惧れに、スマホに必死に慣れようとしている人。どちらも高齢者。

マドラーでほどよく混ぜる嘘ひとつ

延寿庵野鶴

炬燵には矢張り蜜柑がよく似合う

住吉美和子

廃屋の庭に山茶花だけ赤く

永見安子

チョコ配りもうやめますね義援金

相見柳歩

親友が断りもなくあの世へと

若年幸子

暫く音信がなかった親友の訃を家族葬の後に聞くことが多くなりました。

神様は困った時の人気者

北野クニオ

猫の手も借りる国民性です。神様仏様ご加護を。

好き勝手定規の目盛変えてみる

羽田野洋介

某政権のことですか？一度はやってみたいですが、その結果に責任が持てません。

沖縄は私と同じ日本人

大和峯二

明治初期の琉球処分、昭和20年地上戦27年間の被占領など、沖縄の歴史を学び、沖縄に寄り添って行きたい。

だからって人憎むまい恨むまい

田本古鈴

三が日息子は客の顔で来る

加藤江里子

川柳塔WEB句会　兼題「電　話」

＊平抜きは到着順
＊webサイトと内容に齟齬がある場合、webサイトが正

2月例会入選句　投句数397句（201名）島田駱舟　斉尾くにこ　共選

島田　駱舟　選

着信を拒否にしてからまた昼寝　夏みかん
馬鹿にした公衆電話当てにする　雪上牡丹餅
亡き父につながりそうな黒電話　汐海　岬
桜咲くまでは電話を待ってみる　乙川　初音
嘘つけぬ息遣いする電話口　坪井　新
ギロチンのように貴方の切る電話　坪井　新
電話口ひとときショパン聞かされる　原　洋志
便利さにいじめも付いてくるスマホ　佐藤　彰宏
お互いに背後に異性いる電話　森下　博史
三毛猫と電話番する招き猫　近石ひとし
呼び出しの電話昭和は遠くなり　高杉　力
留守電がけなげに熱す留守居留守　ホッと射て
長電話切るきっかけのキャッチホン　ホッと射て
留守電の声も消せずに一周忌　坂本　星雨
おろおろとスマホ難民してる指　佐々木ええ一
姑が受話器に注ぐ愚痴の山　白瀬　白洞
君からの電話だ春の匂いだ　上田ひとみ
空元気見透かされてる電話口　大島ともこ
座布団を電話が敷いていた昭和　船岡　五郎
受話器から故郷の風が入り込み　花がえる
ポーカーフェイスの電話は詐欺だろう　岸井ふさゑ
丸腰とはかくやスマホのない戦士　アゲハ
淋しくてまた通販に電話する　居谷真理子
充電をしてケータイを飼っている　居谷真理子
携帯を与え父権が及ばない　野平光太郎
メシ時に土足で上がり込む電話　石川　柳寿
初恋の記憶に光る黒電話　多舵　洋
十円が　ドンドン落ちた　遠い恋　蒼い朱鷺
孤独死を電話で知った日の孤独　徳重美恵子
ＦＡＸにかけてピーピー怒られた　椙瀬みちを
もしもしツーツーあれから旅が始まった　まみどり
ポケットに上司が棲んでいるスマホ　伊藤　良一
佳５　赤電話今日もぼんやり立っている　佐々木ええ一
佳４　坂本龍馬の懐にもスマホ　怜
佳３　雨の日の未だ繋がらぬ話し中　両澤行兵衛
佳２　振り込めの電話があって世間並　右田　俊郎
佳１　長電話終えて私をはめ直す　雨　径
人　大臣に漏れて電話が掛らない　中筋　弘充
地　不燃ゴミだんだん溜まる電話口　米山明日歌
天　エリーゼじゃないひとを待つ保留音　若枝あらう

斉尾くにこ　選

パンクして電話探した山の中　麦　乃
また出ないプルルプルルと外は雨　甘酢あんかけ
君からの命の電話待ってます　竹中正幸
電話にも理由があって穴だらけ　森山文切
待合室携帯電話握る人　森山文切
無事ですと電話のベルが三つ鳴る　木嶋盛隆
電話口ひとときショパン聞かされる　原　洋志
箱がなくスーパーマンが焦ってる　冬　子
懐かしい過去へ電話を掛けている　森　廣子
風の音だけが聞こえてくる受話器　平井美智子
着メロが明るく鳴っている柩　平井美智子
たわいない話が欲しくなる今宵　松本雅子
退職後夜の電話にまだビクリ　上　平　祥
座布団を電話が敷いていた昭和　船岡五郎
受話器から故郷の風が入り込み　花がえる
除の声確と拾っている受話器　わこう
青春のマイルーム電話ボックス　雨森茂喜
昼寝から呼び戻される十コール　エノモトユミ
充電をしてケータイを飼っている　居谷真理子
電話帳鬼籍の人も名を連ね　野平光太郎
電話だけしないスマートフォンの群れ　月波与生
アドレスもスマホの機種も替えました　美馬りゅうこ
痛み止めですか着信音ですか　くんじろう
留守電に数秒息を吹きかける　たぶん
神様にしばらく電話していない　郷田みや
稲妻ピカリ父さんの黒電話　柴田比呂志
受話器型魔人召喚用スマホ　ぱぱん
ポケットに上司が棲んでいるスマホ　伊藤良一
真夜中のワンギリからのサスペンス　アズスン安須
３歳がタップフリックピンチする　アズスン安須
多機能のスマホにヒトの声がない　水たまり
夕焼けの赤はただいま話し中　水たまり
佳５　壊された携帯レモン青いまま　やひろ
佳４　愛を聞くときは受話器を持ち替える　くみくみ
佳３　公衆電話絶滅危惧種申請中　石川のコマネチ
佳２　テレフォンカード添えて棺を閉じました　美馬りゅうこ
佳１　０９０ー独り占めする君の声　怜
人　神様のお宅でしょうか　あっ切れた　加藤当白
地　孤独死を電話で知った日の孤独　徳重美恵子
天　ラの音で鳴ったら彼からの電話　伊藤良一

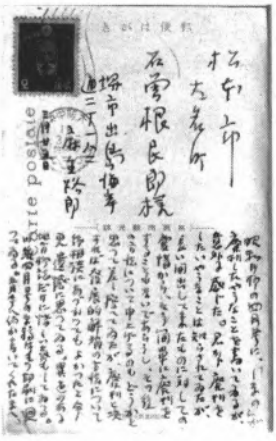
投句方法　【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック
senryutou.net　（サイト管理　森山文切）

『麻生路郎読本』余滴 (51)

「石曽根民郎宛葉書」①

桒原道夫

3年前の春休みに、麻生路郎のことを調べるために、石曽根民郎が寄贈した資料が保管されている松本市の博物館と図書館を訪れたことは、昨年の「川柳塔」10月号に書いた。3年前に訪れた時、博物館に向かう道で、石曽根印刷の看板がかかっているのを見つけた。博物館の調べものが終わってから立ち寄り、「民郎さんのことを書いたら、掲載誌をお送りします」と挨拶だけして去った。昨年の川柳塔7月号に清博美氏が「石曽根民郎さんのこと」をお書きになっていたので、7月号と10月号を石曽根印刷所宛にお送りしたところ、御子息の石曽根博男氏が松本市中央図書館の石曽根文庫の索引と麻生路郎の葉書のコピーを送って下さった。博物館でも見つからなかった路郎の民郎宛葉書を記録しておく。



上半分に、「松本市／大名町／石曽根民郎様／堺市出島海岸／通二丁一八二／麻生路郎／三月廿五日」（「／」は改行を示す。以下同じ）。宛名と路郎の住所・氏名・日付がある。下半分の路郎の文面を改行ごとに記しておく。

〈昭和川柳の四月号に、「しなの」が廃刊したやうなことを書いてゐるが、意外に感じた。君から廃刊をしたいやうなことは知らされてゐたが、長い間出して来たものに対しての愛惜から、そう簡単に廃刊をすることもないであらうし、その後の方法について申上げるのもどうかと思つて差し控へてゐたが、廃刊と決すれば發展的解消の方法について御相談にあづかつてもよかつたと今更遺憾に思つてゐる。異色のある地方柳誌だけに惜しい氣もしてゐる。川雑四月号の原稿はもう印刷に廻つてゐる。五月号へ何か書いてくれたまへ。

消印は、「大阪中央／18／3 26」と読める（「麻」の「广」の点が「18」の「8」に重なっているが）。昭和18年3月26日の日付で大阪中央郵便局から出されたものだと思われた。切手は貳錢。

「川柳しなの」の廃刊を知った路郎が民郎に出した葉書である。「川柳しなの」の正確な廃刊時期を知りたいと思ったのだが、筆者の思い込みと調べ方の基本を疎かにしたため、とんでもない遠回りをすることになってしまった。失敗談も今後のためになると思うので、その顛末を記しておく。

路郎の葉書から「川柳しなの」が昭和18年に廃刊したことはまちがいないと思い、文面の最後に「五月号へ何か書いてくれたまへ」とあるので、まず「川柳雑誌」を調べたが、廃刊の知らせも民郎の記事もなかった。次に、「川柳しなの」を調べようと思い、松本市中央図書館の蔵書検索をし

たところ、合冊になった郷土資料に昭和18年度分はなかった。同館の石曽根文庫に分冊の「川柳しなの」が所蔵されていないか、また、「川柳しなの」廃刊の正確な時期が分かれば教えてほしいと依頼した。国会図書館も調べたが、「川柳しなの」の昭和18年度分は所蔵されていなかった。

「川柳しなの」の昭和18年度分を所蔵している図書館がないとすると、他の柳誌の柳界展望などで分からないかと思って、川柳界の消息記事が充実している「川柳きやり」を調べてみようと思った。「川柳きやり」は東京の柳誌なので、長野県の柳誌「川柳しなの」のことも掲載しているのではないかと期待したのである。「川柳きやり」昭和18年度分は、岩手の日本現代詩歌文学館が所蔵していることが分かり、同館所蔵の「川柳きやり」に、「川柳しなの」廃刊の記事が掲載されていないか依頼した。

「川柳しなの」の廃刊記事が掲載された「昭和川柳」は、堀口塊人が主宰していた大阪の川柳誌で、大阪市立中央図書館や国会図書館に所蔵されていないか調べたが、なかった。以前に、大阪市立中央図書館で、堀口塊人が戦後発行した「川柳文学」を調べたことがあり、他の図書館には所蔵されていないと思い込んでしまった。

まず、日本現代詩歌文学館から報告が届いた。「川柳きやり」昭和18年1月～6月号まで見たが、廃刊の記事はなかった、ということであった。そして、国会図書館のホームページで確認したところ、「川柳しなの」の昭和21年の1月号に、石曽根民郎による「復刊のことば」が掲載されていることを教えて下さった。しばらくして、松本市中央図書館からも報告が届いた。国会図書館所蔵の「川柳しなの」昭和21年1月号（通巻46号）を調べたところ、「復刊のことば」に、「昭和15年10月を以て惜しくも一時休刊の止むなきに至った」とあるので、昭和15年10月に通巻45号が出て、以後休刊になったと思われる、とのことだった。さらに、通巻45号を、飯田市立中央図書館と大阪大学附属図書館総合図書館で所蔵しているようだと教えて下さった。

「川柳しなの」は、昭和18年ではなくて、昭和15年10月を以て休刊していたのだった。消印の「16」を「18」と思い込んでしまったのである。

「昭和川柳」の所蔵館を調べたところ、日本現代詩歌文学館と大阪府立中之島図書館に所蔵されており、昭和16年4月号「昭和川柳」が、中之島図書館に所蔵されていることが分かった。

「昭和川柳」昭和16年4月号（4月1日発行）の「柳界月報」に、〈○信州の「川柳しなの」は新時代に即應すべく、自發的に廢刊されました〉とある。

「川柳しなの」が休刊したのは、昭和15年10月。数箇月経って「昭和川柳」が廃刊の記事を掲載しているのはどうしてか。昭和15年10月を以て「川柳しなの」は休刊したが、それはあくまでも休刊で、できるなら再刊したいと考えていたのではないか。ところが、日中戦争の続く中、ますます物資が枯渇し、廃刊を決意したものだと思われる。昭和15年、日本出版文化協会が発足し、出版統制が厳しくなり、用紙も十分には割り当てられなくなった。「川柳しなの」の廃刊記事を掲載した「昭和川柳」も「番傘」と統合することになり、昭和16年6月号が終刊号となってしまった。

（次回に続く）

（投句222名）

春になりました。「桜が無ければどれほど春はのどかであることか」と、昔むかしの歌人は詠みましたが、ほんと、日本人は桜が大好きなようですね。

実は私、いわゆる「お花見」というのをしたことがありません。

電車の窓から眺めるとか、歩いている時にたまたま桜と出会うとか。

一度くらいは酒瓶抱えて桜の下、やってみたいです。では、ナビを。

富田林市　山野　寿之

光るまでわたしを磨く広辞苑

（評）広辞苑のあの存在感。ギッシリと詰まった知識の泉は、それを必要とする者へ惜しみなく与えてくれました。

奈良市　大久保眞澄

大丈夫ですかもう終点ですよ

（評）乗り物の心地よい揺れについ誘われて眠っても、他者にはどう映ったのか。でも、声掛けは有り難いですね。

海南市　堂上　泰女

誉められて育ったバラに棘が無い

（評）人間、心地よいコトバばかり耳にしていると、緊張感が無くなり、何となーくノッペラボウになりそう。

河内長野市　梶原　弘光

角取れたと言われじいさん怒り出す

（評）ガンコジジイという呼ばれ方って、もしかして一種のステータス？角が取れてしまえば只のジジイだもん。

仙台市　月波　与生

取説を読んでも夫婦にはなれぬ

（評）近頃は何かと「トリセツ」が話題です、歌になったり、本になったり。で、だから何！

三田市　尾崎　一子

顔のない通貨さっぱりわからない

（評）仮想通貨なんてちっともピンと来ない、なんて言えばキャッシュレス時代を生き抜けないかも。

鳥取県　斉尾くにこ

光りだす心の隅のわすれもの

（評）美しい思い出かしら、心の隅っこでキラキラ光りはじめるものは。いい思い出は人生を豊かにしてくれます。

横浜市　菊地　政勝

目薬をさして真贋確かめる

（評）物にも人間にも、本物もあれば贋物もある。それを見極めるのに、目薬をさす、その現実性、好きです。

沖縄県　森山　文切

高級なモノだけ食べるマルチーズ

（評）何という贅沢なマルチーズなのと眉をしかめないで下さい。飼い主にとってはそれがまた可愛くてたまらないの。

塩竈市　木田比呂朗

原石のままでゴールに来てしまい

（評）あれあれ、磨けなかったのか、磨いても光らなかったのか。でも、多いですヨ、こういうのも世の中には。

鳥取市　福西　茶子

ダイヤより札束見せてくださいな　尾崎市　近兼　敦子

楽しそうそっと後から教えてね　米子市　後藤　宏之

検診の結果聞いてのハグでした　鳥取市　山下　凱柳

大法螺を吹いてゴツンと大目玉　橋本市　石田　隆彦

まだ光らぬ大器晩成かも知れぬ　弘前市　福士　慕情

ガリバーの胸で安眠しています　米子市　八木　千代

体幹を鍛えリベンジするつもり　河内長野市　山岡冨美子

頭打つことも覚えて脱皮する　豊中市　木藤こみつ

環状線の8のあたりに住んでいる

唐津市　仁部　四郎
はて今日も何か一つを忘れたぞ

青森市　守田　啓子
もうちょっと揺れてほしいな終電車

長野県　丸山　健三
一点に光り集めてウエディング

防府市　坂本　加代
かたわらで日がな寝ている老いた猫

弘前市　高瀬　霜石
ドクターはロボットぼくはモルモット

熊本市　杉野　羅天
ワイン飲む好きな音楽聴きながら

豊中市　上出　修
ええ加減優勝してやタイガース

松江市　石橋　芳山
庶民とや時給八百五十円

南あわじ市　萩原　狸月
フルムーンマンネリクリアリフレッシュ

奈良市　山本　昌代
どうですか僕と一緒に月旅行

男鹿市　伊藤のぶよし
ためらいは無用切っても伸びる爪

堺　市　加島　由一
チョコレートパフェが食べたい七十五

香芝市　大内　朝子
硬質を競うダイヤにあるゆとり

河内長野市　穂口　正子
こっそりと美容整形やりたいな

大阪市　平井美智子
キラキラの嘘で眩しくしてあげる

岡山市　永見　心咲
観覧車告白はまだ研磨中

佐賀県　真島久美子
胸底にノイズだらけのラブソング

堺　市　内藤　憲彦
ライバルですかんタコでも今夫婦

大阪市　古今堂蕉子
泣いて甘えて僕はどんどんやせている

鳥取市　田中　天翔
アラ嫌だ一人相撲を取りました

大阪市　磯島福貴子
キャッシュレスいやいや私現金派

弘前市　高森　一呑
年老いた僕を追い越す蝸牛

黒石市　北山まみどり
振り払う勇気が欲しい星月夜

三田市　北野　哲男
嬉しいわ五つ星でのディナーショー

千葉市　海老池　洋
魂の芯を磨きに禅の寺

大阪市　笠嶋　惠美
懐かしい娘時代の整理から

橿原市　居谷真理子
ドーナツもあなたも飾りたてないで

可児市　板山まみ子
良い事を言うのはいつも選挙前

神戸市　奥澤洋次郎
錆びる斧どこへ行ったか鍛冶屋さん

岡山県　小野美那子
聞かれてもそんなに無いよいい話

大阪市　江島谷勝弘
かかとを光らせています軽石で

藤井寺市　鈴木いさお
金婚譜まだ輝きを保つ妻

大阪市　小野　雅美
いいことがありそう春の曲がり角

横浜市　川島　良子
愛嬌も買われて五輪ボランティア

藤井寺市　鴨谷瑠美子
くすぐると笑い弾けるボタン穴

弘前市　稲見　則彦
ほら欠けたガラス細工のわたしです

鳥取市　夏目　一粋
草食系のにんげんは情がある

西宮市　緒方美津子
たられば を上手に使い同居する

尼崎市　清水久美子
ぶりっ子は苦手熟女が好きやねん

西宮市　西口いわゑ
昭和メロディ淡い恋など思い出す

大阪市　大治　重信
拾う神捨てる神皆お留守です

6月号発表
(4月15日締切)

(平本　勝彦　画)
柳箋に2句

本社 三月句会

◇三月七日（木）午後一時
アウィーナ大阪

春の空気が漂う七日、三月句会は百四十二名（内投句者八名）の参加で開催された。初出席は池田みのさん（芦屋市）、奥田宗光さん（神戸市）のお二人。

今月のお話は伊達郁夫さん。題は「新元号を予想する」。「平成」の終わりが近づくにつれ、人々の関心は高まっている。この日本最大のパズルに郁夫さんと共に挑戦してみよう。元号制定のルールによれば、過去に元号やおくり名に使用されたことがなく、平易な漢字二字で表記されねばならない。また、イニシャルがM、T、S、Hの名は避けること、典拠のある字であることも求められる、過去に候補に上がった未採用元号の復活も含めて国民の理想としてふさわしい元号とはどんなものだろうか。皆さんが四月号を繰られる頃郁夫さんや皆さんの予想はいかに？（眞澄）

月間賞は山野寿之さん（富田林市）

（司会―真理子・隆彦）（脇取―扶美代・すみ子）
（受付―満作・志津子）（懸垂幕墨書―耕治）
（清記―憲彦・勝弘）

席題「家　具」　矢倉　五月　選

座右の銘常に机の片隅に　斎藤　隆浩
タンスから亡母の秘密が転げ出す　浜　知子
家具が浮くから宇宙には住めません　三宅　保州
遺産分け諭吉タンスに付いて来い　長谷川崇明
歳月が家具の透き間に吹き溜まる　木本　朱夏
黒猫に踏まれてばかりいるピアノ　両川　無限
和ダンスから時々母の声がする　古今堂蕉子
ラブチェア風と座っている私　古今堂蕉子
タンスから諭吉を外へ避難させ　安福　和夫
どっさりと断捨離候補和箪笥に　松浦　英夫
嫁入りの家具一式も備え付け　飛永ふりこ
遺産分けだあれも家具を欲しがらぬ　柿花　和夫
夫婦仲いちばん知っているタンス　川端　一歩
10億円入るタンスは有りますが　内藤　憲彦
バーゲンで箪笥の肥やしまた増やす　油谷　克己
家具すべて整いましたあとは嫁　大内　朝子
安らぎの椅子は我が家に置いてある　久保田千代
家具の位置変える力がなくなった　鴨谷瑠美子
家具一つ無い青春の四畳半　阿部　俊八
食卓がいつしか本と紙の山　山根　妙子
三面鏡背なの丸さを叱ってる　山田　葉子
茶ダンスの名が泣くモカとダージリン　水野　黒兎
下駄箱の隅に亡父の登山靴　初代　正彦
この頃は鏡みがかぬようぼかす　大内　朝子
ワンルーム家具の隙間で寝ています　山本希久子
抽き出しが息するような桐箪笥　坂上　淳司
スタートはちやぶ台一つ四畳半　西出　楓楽
キッチンの椅子が帰りを待っている　立蔵　信子
鏡台のひき出し一篇のドラマ　山本希久子
落書きも傷も思い出ある机　藤原　大子
初月給ローンで買った文机　桝本　宏子
嵩高い棚に格下げしたピアノ　川端　六点
最近の妻は鏡台など見ない　新家　完司
食卓が巣立った子らを持っている　指宿千枝子
長持ちを棺桶にして逝くつもり　清水久美子
断捨離で捨てた家具にはヘソクリが　吉村久仁雄
針箱にある実印もへそくりも　清水久美子

佳

父の座った形で残る籐の椅子　米澤　俶子
家具のキズあの子この子のメモリアル　松岡　篤
帰宅順コート置いてるソファーの背　横山　里子
卓袱台が消えて心の角が立つ　中島　一彌
久し振りオレとお前の乱れ寵　長浜　美龍

人

テーブルに家族が寄ってくるのです　龍島　恵子

地

頂点にたどりついたら軋む椅子　浜　知子

天

ダム底に僕の机が眠る村　柴本ばっは

軸

家具移動する時いてほしい亡夫

兼題「ほどほど」　両川　無限　選

百薬の長も飲み過ぎたらアカン　村上　玄也
雷が落ちる手前でやめておく　寵島　恵子
ほどほどに折り合いつけて一つ屋根　松浦　英夫
ほどほどを知らぬ女のティータイム　米澤　俶子
ハイタッチだけで我慢の片想い　新家　完司
ほどほどにも違う物差し妻と僕　田中ゆみ子
ほどほどの悔しさバネに生きている　川端　六点
まあまあが何時もベストと思ってる　安福　和夫
人混みは嫌い寂しいのは好かぬ　北野　哲男
ほどほどを生きてお遍路さんになる　小島　蘭幸
人肌の爛を覚えてくれた嫁　三宅　保州
ほどほどの幸せだからよく眠れ　吉村久仁雄
叱っても逃げ道だけは空けておく　伊達　郁夫
ほどほどが上戸とボクで違う酒　水野　黒兎
身の丈に合った暮らしにあるリズム　米澤　俶子
ほどほどのお布施和尚に怒鳴られる　内藤　憲彦
ほどほどにしいやと妻の眼が刺さる　石田ひろ子
真夜中は眠りなさいよコンビニも　岸田　万彩
ほどほどにってもうやめとけということね　大久保眞澄
ほどほどの笑顔でこの世泳いでる　石田ひろ子
付き合いは二次会までと決めている　木嶋　盛隆
ほどほどに羽根を伸ばせるのも句会　初代　正彦
ほどほどのふくらみ欲しいお札入れ　能勢　良子
ほどほどの恋のつもりが大火傷　小野　雅美
追伸に酒ほどほどと親心　松岡　篤

優と可のはざまで楽に生きている　清水久美子
ほどほどの爛が出来ない人といる　川端　一歩
清濁もほどほど呑んで世を渡る　中川ひろ介
ほどほどに暮せば風はやわらかい　大内　朝子
ほどほどに幸せ安い旅だけど　木本　朱夏
ほどほどに叱りいっぱい褒めてやる　藤井　宏造
惜しまれるうちに散りたい花の首　山本希久子
ほどほどに素顔残してする化粧　太田扶美代
無口でもしゃべり過ぎでも疎まれる　敏森　廣光
ほどほどというのが落とし穴だった　山岡冨美子
むずかしいことは私に向いてない　上田ひとみ
生中を五杯以上は飲みません　江島谷勝弘

佳

気ぃ付けや仏の顔も三度まで　太田としお
東大でなくてもいいや阪大で　木藤こみつ
ほどほどは無い棟梁の鉋屑　前　たもつ
このへんでネジを緩めてみませんか　鈴木　かこ
ほどほどでいいと一億寄付しとく　坂　裕之

人

父の拳骨手加減を知っている　前　たもつ

地

ほどほどの番続けていく非凡　山野　寿之

天

アホやなぁそんなにむきにならんでも　森松まつお

軸

ほどほどに頑張ったけどビリはビリ

兼題「　息　」　鴨谷瑠美子　選

インタビュー息の荒さもうれしそう　萩原　狸月
だいじょうぶ僕がしっかり抱いている　上田ひとみ
ぼくと選者息が合うたか秀句賞　斎藤　隆浩
息長いまだやっているサザエさん　太田としお
二番手でトップの息を聞くゆとり　前　たもつ
疲れても息を止めてはいけません　新家　完司
月夜の浜息もぴったり影二つ　柴本ばっは
口臭が気になりだした倦怠期　澤井　敏治
平成がそっと溜息吐いている　山岡冨美子
ライバルの本気度肩で息してる　松本あや子
ちょっと一息入れたら楽になる仕事　片山かずお
逢いに行く息さわやかにミントガム　木本　朱夏
息止めて自慢話に耐えている　三宅　保州
聞こえない鼾に息を確かめる　齋藤さくら
息抜きに行った喫茶で鉢合わせ　上野多恵子
ため息はつくなしあわせ逃げていく　木藤こみつ
息を止め過ぎて揺らいだレントゲン　藤井　則彦
同じ空気吸い吐いていて追いつけぬ　岩佐ダン吉
ちちんぷい息吹きかけてほしい傷　森田　旅人
健やかな寝息に安堵三世代　山野　寿之
息止めてないとボタンがとまらない　大久保眞澄
ため息が我慢できぬと言うている　村上　玄也
ため息を誘う少女の虐待死　森松まつお

青春は息をつく間の風だった　太田扶美代
凸と凹なんだか息が合っている　藤井　宏造
いい話息も自然とやわらかい　前　たもつ
言い切った言葉思わず深呼吸　山口弘委智
溜息を吐かぬ日はない世のニュース　久保田千代
切られ役しばらく息をしない芸　川端　六点
寝返りへ息をひそめるセミダブル　中岡千代美
まだ息をしてるぞ坊さんより医者だ　鈴木いさお
百年へ息長く旅楽しまん　原田すみ子
素食でも一杯食べて深呼吸　榎本日の出
桃色の息であなたの胸を突く　松本あや子

佳

山々が春の呼吸になってきた　居谷真理子
溜め息と一緒に妻は出て行った　古今堂蕉子
ご臨終息が止まった合図です　永田　紀恵
君恋えばパステル調の息になる　渡辺　富子
妻のため息有馬温泉でも行くか　上野多恵子

人

阿吽の呼吸鍵はかかっておりません　島田　握夢

地

溜息で妻は上手に返事する　太田扶美代

天

母さんは溜急胸にたたみ込む　石田　隆彦

軸

息を弾ませ香水振って腕を組む

兼題「不覚にも」（詠み込み不可）藤井　宏造　選

見逃した赤丸妻の誕生日　田中ゆみ子
踊らせるつもりの笛に踊らされ　中村　恵
入院が引き金だった紙パンツ　中島　一彌
くしゃみするたんびに膀胱が緩む　木藤こみつ
大失敗ワタシを妻にしたあなた　米澤　俶子
知らないわ頬が勝手に赤くなる　森田　旅人
どこで間違ったのかオメデタですと言われ　島田　握夢
カレーうどん白着てたこと忘れてる　原田すみ子
チーママがくれたネクタイして帰る　清水久美子
見合いではエクボに見えたのはアバタ　松岡　篤
頬齢線修正ペンで消し忘れ　細川　花門
落ちている穴は私が掘った穴　石橋　芳山
満点の答案名前書き忘れ　上田　和宏
金かけて磨けば光るはずだった　古今堂蕉子
ハグまでも交した彼の名が出ない　長浜　美籠
映画館妻とまちがえ手を握る　酒井　紀華
飲まされてうなずく金の要る話　片山かずお
一言が過ぎそれからの無言劇　升成　好
心ならずも女性の歳を言い当てる　前　たもつ
悔いてます善人づらで受けた酌　柿花　和夫
インフルエンザ下火になってから貰う　宇都満知子
気がつけば酒が勝手に喋り出す　伊達　郁夫
通夜の席涙の中で鳴るスマホ　池田　みの
坊さんのお経睡魔も連れてくる　初代　正彦
不用意に褒めて連日カレー攻め　川端　六点
パスポート忘れ見送るエアポート　永田　紀恵
ひとことで積木崩れる音がする　荻野　浩子
くしゃみした弾みに吹っ飛んだ入れ歯　鈴木いさお
点滴のベッドで悔いる酒タバコ　森松まつお
魔が差して触れてしまったサクランボ　澤井　敏治
嫁はんは僕の味方と信じてた　太田としお
油断して酔うて見られた裏の貌　伊達　郁夫
残り時間神に返したのが惜しい　太田扶美代
円卓に上座があった知らなんだ　川端　六点
花嫁の名前うっかり間違えた　齋藤さくら
トイレのスリッパはいたままでお父ちゃん　木藤こみつ
上げたはずの足が敷居に引っかかる　片山かずお

佳

春一番に不意を衝かれたアデランス　鈴木いさお
沢あんをガブリ噛んだら歯がぽろり　村上　直樹
フランダースの犬のラストでつい涙　水野　黒兎
幸せなひとときだった詐偽だった　鈴木　かこ
子の居ない人に聞かせる子の自慢　島田　誠一

人

肩書きを取れば風さえそっぽ向く　松本あや子

地

やさしさにあぐらをかいていたんだね　山田　葉子

天

信長の油断　本能寺にあった　両川　無限

軸

謝罪会見ついつい欠伸出てしまう

兼題「育つ」　水野　黒兎　選

ありがとうバイトで言える子に育つ　伊達　郁夫
寒肥をたっぷり急がない答　荻野　浩子
子育ての辛いあの頃華だった　伊達　郁夫
ランドセル背負う地元の宝物　上村　夢香
逆境で痛みの判る子に育つ　川端　六点
障害も個性と思う子が育つ　出口セツ子
挨拶だけはきちんとできる子に育て　太田扶美代
ひもじさも知らずに育つこの不幸　村上　直樹
汚染土でゴジラすくすく育て上げ　岸田　万彩
片親に育ち見事な自立心　上野多恵子
育てずに異国の人の使い捨て　長谷川崇明
七人の敵が育てた今日の僕　山野　寿之
こころの内足音で知る子の育ち　長浜　美籠
まだ育つ余地あるつもり喜寿の春　桝本　宏子
聞く耳をもつ子は育つ知識の芽　石田　隆彦
羽搏きに巣立ち間近かな音がする　柴本ばっは
無限大の夢を育てた青い空　渡辺　富子
未熟児の奇跡の鼓動母の腕　宇都満知子
かさぶたの下で育っていた野心　渡辺　富子
鍬を持ち種を育てた泥の父　木嶋　盛隆
よく食べてしっかり育つ腹まわり　降幡　弘美
よく喋りよく食べ妻はよく育ち　森松まつお
死も老いも家族の中に見て育つ　原田すみ子
子育ての応え天から褒め言葉　関　よしみ
挨拶だけはきちんと教え子が育つ　吉村久仁雄
のびのびと育つ未来の青い地図　松原　寿子
小さめのポッケで育つ夢無限　関　よしみ
ネギ坊主空の高さを見て育つ　安土　理恵
気掛りが大きく育つ闇の底　西出　楓楽
AIで育ちロボット化した子ら　清水久美子
スマホ熱ネット依存の子が育つ　米澤　俶子
恐しい童話を読んで育つ子ら　上山　堅坊
慈愛虐待育ったように子は育つ　安土　理恵
鯖と鰯が育ててくれた骨密度　木本　朱夏
津波跡まず雑草が芽をふいた　居谷真理子
黴臭い部屋でナマケモノが育つ　新家　完司
苦労して育てた息子嫁の手に　細川　花門

佳

わたくしを育ててくれたのは孤独　木本　朱夏
家計簿を脅かしつつ子は育つ　能勢　良子
愛された記憶を胸に子は育つ　内藤　憲彦
子を育て親も育っているのです　山本　進
ご近所が育ててくれた昭和の子　能勢　利子

人

育つ巣立つ育つ巣立つを見て八十路　上田　和宏

地

育児書を閉じ大らかな子に育て　升成　好

天

子育て終え夫育てが始まった　山下　純子

軸

生き生きと鮎を育てる森の木々

兼題「野性」　小島　蘭幸　選

野性の血騒ぐ報道カメラマン　荻野　浩子
蟹せせる背中ちょっぴり野性的　太田扶美代
魅力半減野性味の失せたきみ　油谷　克己
野性的に見えてお茶目ななおみ節　藤井　則彦
私を野性にもどすつめ放題　永田　紀恵
老いてなお未知の世界をゆくわたし　川端　一歩
明日のジョー絶対しないギブアップ　内藤　憲彦
大喧嘩野性にかえる妻と僕　金川　宣子
妻のもと離れ野性に戻る夢　安福　和夫
野の花は凄い無肥料無農薬　升成　好
信長の野武士の如きキャラが好き　佐々木満作
野性度は僕より妻の方が上　鈴木いさお
ターザンもスーツ姿で手にスマホ　村田　博
野性味を帯びて冬山から帰る　米田利惠子
Uターン野性が呼びにきたのです　籠島　恵子
おばちゃんの野性弾ける特売日　中島　一彌
わたくしの野性は訛だと思う　籠島　恵子
肉食系と遊び草食系と挙式　島田　握夢
独裁者の必要条件は野性　柿花　和夫
野性美を和服でつつむ日の二十　久保田千代
野性にはなれず飼い猫舞い戻る　渡辺　富子
上品に食べると旨くないジビエ　西出　楓楽
だんじりが踊るぶつかる飛び跳ねる　中島　一彌
野性味は無いが憎めぬタイガース　山崎　武彦
古里に帰ると野性取り戻す　平賀　国和

人間の影が野獣に見えてくる　両川　無限
ゴキブリに遭うとケモノの血が騒ぐ　大久保眞澄
野性から知性へ僕の進化論　両川　無限
野性味が薄れたライオンの昼寝　宇都満知子
野生児のごとし裸足の保育園　木藤こみつ
野性には戻れぬ言葉得たヒト科　阿部　俊八
弱肉強食この美しき大自然　柴本ばっは
折れそうで折れぬコスモスの野性　太田扶美代
あふれる野性味菫ちゃんの瞳　江島谷勝弘
飼い猫もわたしも野性隠し持つ　小山　紀乃
たてがみは無色に野性消えていく　中村　惠
いま君を空に放てば猛禽に　居谷真理子

佳

転んでも起きる野性をバネにして　山岡冨美子
貧乏神のおかげどの子も野性的　安土　理恵
老化とは野性に戻ることである　新家　完司
野性的なヤングは絶滅の危惧種　坂上　淳司
奔放だった狼少女だった頃　鈴木　かこ

人

遠吠えは私の愛のセレナーデ　鈴木　かこ

地

酒二合ほどで類人猿になる　新家　完司

天

窓際の椅子で熟睡する野性　**山野　寿之**

軸

真夜中のわたし野性は消えていた

句会燦燦

二月句会を読む　板垣孝志

皮肉屋に持ち上げられてむず痒い　清水久美子
ほめ殺しという巧妙な手口は怖い
味が出るのは賞味期限を過ぎた頃　大久保眞澄
一番美味しいとこは何時でもお父ちゃん
裸木になってますます美しい　平井美智子
着飾って表面を飾るより飾らぬ美には威厳がある
被災地の現実仮設の灯が暗い　油谷　克己
あの災害が忘れ去られることの心細さに
スタイルを変えたら僕が僕じゃない　細川　花門
一旦吸うと決めた煙草や死ぬまで止めん＝上岡龍太郎
虹を追うあなたの明日のパンがない　小川賀世子
水で走る車を作る言うて　もう何年経ちましたやら
妻の手が上手に外す痒いとこ　山野　寿之
分からないふりをして冷えた手を温めている
百から七引くたび脳が痒くなる　吉村久仁雄
五やったら簡単やのに・・・警察のイジワル
夏まっ盛り静かに旗が降ろされた　能勢　良子
玉音放送の昭和は遥か彼方に、平成も終わる
現実の手ざわり墓の雪はらう　居谷真理子
あの世の雪も冷たいのだろうか
人間を見過ぎたようだ目が痒い　新家　完司
ときどき海を眺めて人間アレルギーを回避
延命の母がぼんやり僕を見る　山﨑　武彦
これでよかったのか？　心の中で葛藤がつづく

柳壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳塔打吹（鳥取）　斉尾くにこ報

大地震余震津波でふるえてる　久芽代
俎で蟹がびくつく足合わせ　芙美子
初国会びくびくしてる厚労相　紀の治
余震つづくあの日あの頃びくびくと　龍枝
臆病者びくびく隠し核を持つ　岳人
宝くじ最初の矢だけ大当り　野蒜
ビクビクもどきどきもまた音がする　美知江
必ずや明日があるとは限らない　玲坊
逆立ち歩き回る友がいた　瑞子
逆立ちし眺めた景色色違い　清
今朝もまた逆立ちをしてみたけれど　三津子
逆立ちは出来ぬが寝たふりは得意　石花菜
逆さまになって働く砂時計　滋
真実が逆立ちすると嘘になる　義人
逆立ちし地球の外を覗きたい　紀美恵
老いだけど元気印の赤を着る　悦子
会わぬ人元気ですかと来る賀状　照彦
大正の寅温泉めぐりして元気　重忠
御存知か山動かした事がある　節子
冬眠もせずに師走の庭に蛇　公恵
杖つかず三千歩程歩けたよ　貴恵
平成の元気は昭和ほどもない　重利
悪口を喋る元気もなくなった　芳光
元気だと言われて次の医者に行き　泰山
風船に元気を詰めているのです　久江
8Kで観るオリンピックの男子リレー　くにこ

川柳塔すみよし（大阪）　森松まつお報

ぶつ切りの鮟鱇鍋で睨んでる　久美子
手鍋などさげず来たけど添いとげた　(矢)五月
圧力鍋へっぴりごしで見ています　千代美
長いこと食べていませんふぐの鍋　一歩
鍋は嫌つい食べ過ぎて太るもと　廣子
寄せ鍋のような味わいある家族　久仁雄
仲直りしたくて今夜鍋にする　宏造
湯豆腐の薬味に添えるマヨネーズ　昌紀
古里によく似た料理鄙の宿　シマ子
弁当にきらいな物を入れておく　舞夢
料理好き嘘も交える見合い席　大輔
無駄省き料理人が腕磨く　舞蹴
細胞が呑兵衛みごと料理する　ひろ介
料理以外に使っちゃ駄目よ出刃包丁　としお
ヘルシーな料理に慣れてきた胃腸　満作
老いを着て女房の料理うまく食い　重信
琺瑯引きやさしく煮込む林檎ジャム　ばっは
魯山人に叱られながら食べている　ダン吉
ニッコリと黙って見せる薬指　ゆみ子
喜んでもらえば良いがボランティア　直子
一足先サクラがサイタ受験生　福貴子
花の芽が出たと喜ぶ程の幸　崩
異常なしの検診帰途の軽い足　隆昭
喜べば運が連れもてやって来た　俊雄
日本に生まれた事を喜ぼう　日の出
邪心無い喜ぶ母と居て楽し　民子
誕生日喜ぶほどのことはなし　いさお
寒さ耐え金のなる木が花を付け　妙子
粒ほどの喜び母は忘れない　志津子
お日様のサービス夕暮れの茜　満知子
似顔絵を美人に書いてくれました　芳香
笑顔すらサービス料の請求書　雅美
リップサービス買う気にさせる小商い　大子
リップサービス有頂天には気付かない　美籠
一度でいい喜ばせてよ宝くじ　勝弘

ふうもん吟社（鳥取）　両川　無限報

いっぱいあった善意の傘が返らない　芳光
人の良さちゃっかり風と夢を追う　とも湖
通販で買えないものは嫁と婿　回春子
お買い得残り僅かに乗せられる　凱柳
通販で試したサプリ裏切られ　孝二
通販は嫌い実物見て決める　美恵子
あとわずかあおる通販コマーシャル　みゆき

どっさりと届くカタログごみの山　房江
通販の誘い樹海へ迷い込む　一瑤
足腰が通販サプリ飲めと言う　幸子
水筆で描いた浮世の四コマ目　くにこ
四コマの続きは星になってから　楓花
呑助にあと五分だよ言っちゃだめ　一平
あと五分で重い鎧を家で脱ぐ　一粋
あと五分待てば見えそう流れ星　金祥
メロス様あと五分では遅かった　勲章
神様の死角で食べる上にぎり　美智子
狙われているとは知らぬ後頭部　行男
西日射す廊下で母を見失う　明美
群れにいて死角といえばみな死角　真理子
乗り捨てる覚悟最後の新車買う　義徳
使い捨てされないように根っこ張る　八千代
被災地の軍手名誉の使い捨て　天翔
使い捨てカイロでいいわ抱きしめて　心咲
竹槍が凶器となって敗戦に　蟹郎
棒切れもホモサピエンスには凶器　盛桜
人間が凶器になってきた地球　ひかり
愛妻が正座で待っている深夜　寿之
極楽は近いいねむりして待とう　善平
大学生メモを取らずに写メを撮る　隆浩
縄のれんくぐれば私バラになる　振作
うじゃうじゃと人はいるけど知らぬ人　三津子
敬老の日だけ年寄り組にいる　完司
金ないが知的財産なら少し　無限

岸和田川柳会（大阪）　石田ひろ子報

暇つぶししている鳩もこのボクも　信子
年新たピカソの鳩よ高く飛べ　英夫
戦争を続ける国のハトの群れ　大輔
駅の鳩次の旅路を話してる　ダン吉
待ちぼうけ鳩が首振りからかいに　玲子
病室の窓辺の鳩に癒される　隆昭
公園で鳩の悩みを聞いてやる　珠子
鳩小屋があった昔の新聞社　喜代志
介護士と介護患者が結ばれる　笑司
正月は介護の部屋も松飾り　義泰
生きているこんなめでたいことはない　保州
めでたいな餅を搗きたくなってくる　愿
めでたさは我が身の事が出来る今　規予子
今が旬右肩上がり猫の恋　白水
ぷっくりと梅の枝の芽春始動　多喜子
初ゲンカ夫が今年も意地を張る　たか子
このドアを開けて始まる物語　ふさゑ
始まりは酒という名の渡し舟　洋二
いい日の出右肩少し上げながら　信二
テクノロジー栄えて人のなさけ減る　雲水
スマートに勝っても陰にある涙　三成
然り気無く気遣い出来るスマートさ　カズ子
栄えてるように見えても鉢の上　律雄
招き猫並べ栄えた頃思う　みつ江
あんたなあ痩せんと介護したれへん　和美
繁栄にエールを送る胡蝶蘭　ひろ子

岸本宏章選

幸せにきっとするから…以下余白　(稲)則彦
子に見せる背中だ真っ直ぐに伸ばす　いさお
杖になる覚悟を抱いて強くなる　游子
ひと通りぼやいて自分とり戻す　ダン吉
ありがたい時間ロスです日向ぼこ　(初)正彦
幸運が続き小石にけつまづく　(矢)五月
自分探しするには年をとりすぎた　眞澄
玉砂利の響き軍靴に変えないで　ゆみ子
予定日を入れると光り出す暦　冨美子
そっとしておこうさびしい嘘だから　(久)千代

佳句地十選　（3月号から）

松原寿子選

響く言葉君の心に手紙書く　千代美
カレンダー希望に満ちた一枚目　郁子
悔しさを力に変えて前を向く　(大)初音
なまくらな釘だ曲ってばかりいる　あかり
悪法も数で押し切る民主主義　日出男
崖っ縁に立って絆の太さ知る　ひろ子
限界に挑む男の背が燃える　武彦
締め付けて緩めて鍛えられていく　萩江
身の丈の望みが人を丸くする　(藤)則彦
そっとしておこうさびしい嘘だから　(久)千代

川柳塔みちのく（青森）　稲見　則彦報

平成のロマンス今も暖かい　ひとし
一椀の雪一粒の米になる　劦
かた雪の冬 南の友は春ですと　久美子
大間産豊洲をがぶりひと呑みに　則彦
ニセ札は触れば分かる銀行員　京子
生き抜いた白寿の笑顔子に返る　一呑
さすがの僕も妻という字にゃ勝てませぬ　重虎
残り品で豪華な料理作る母　小とみ
お手本に大器玉成子らを鼓舞　風来坊
いつだって岩木山はハグをしてくれる　美鈴
甘かった老いのシナリオ大誤算　洋子
アコンカグア雄一郎が登山する　隆樹
モノクロの津軽を包む雪景色　慕情
小心者だから大きな顔をする　冬道
くよくよするな見上げる空は無限大　吹喜
そんなこと許してあげなさいと雪　孝子
大寒は春を夢みて四股を踏む　柳子
今朝の愚痴に雪の白さを差し上げる　初枝
雪まろげ母の吐息がころころと　真由美
別れの日大泣きだったやんちゃっ子　黙人
一日も笑わない日がある恐怖　龍馬
七人の敵が互いに手を結び　ふさゑ
ティータイム ジャズ聴きながら老夫婦　花峯
陽炎の朝を彷徨う二日酔い　きよし
お互いに我慢したからまだ夫婦　霜石
タレントがはしゃいで日本語が痩せる　呑舟
一軒ポツンと原野に浮かぶ無人駅　和香子
眠れない起き上がり又墨と心中　規子
復興の句読点またびしょ濡れる　一文

はびきの市民川柳会（大阪）中川ひろ介報

群生の双葉しぼれば春匂う　瑠美子
一面の水仙ボランティアの汗　みつこ
図で説明受けて安堵の手術前　ちづる
川登る鮭銀鱗の水飛沫　壽峰
群生の八万アムロナミエショー　欣之
隙間だらけ僕の頭の断面図　いさお
行先は私流に歩む地図　大子
カーナビを信じ冥土に迷い込む　久仁雄
大臣にのぼりましたが降ろされた　清
風なくてまっすぐ登る白けむり　正義
自我捨てて青息吐息登る坂　高鶯
スイスでは登山列車で頂上へ　かつ美
あんなにも群れてどうする渡月橋　まつお
群生のきらいな鷹の冬の旅　専平
群がって派閥集める選挙戦　久仁子
二度の職孫のよな子に指図され　シルク
てっぺんに美女がいるから登ったる　雄太
群生の中で学んだ人の道　紀雄
御来光今年ことほぎ山ガール　洋一
夢に見たマイホーム建つ設計図　フジ
水鳥の棲むらし葦の群生地　泰子
まだ編める世界にひとつベビー服　千鶴子
群生に押されて自分見失う　さくら
平成の終りを惜しむ人の群　冬のト
シャクナゲを見たさに登って妻偲ぶ　ひろ介
丹頂は群れても固い夫婦愛　実

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

ジョーカーを捨てる筈ない北のドン　高明
要介護の目が光りだす美男美女　蜂朗
修身で習いましたか世間体　四郎
己亥うり坊二匹飾られて　実

和歌山三幸川柳会　西川　千鶴報

擦り切れた畳恋しい白い部屋　当代
独り立ち贈る言葉は達者でな　一雄
磨きあげたガラスの見えぬウインドラ　まき
それぞれの役を果たしている十指　起世子
紆余曲折生きて日溜り贈られる　純子
ほどほどに磨けメッキが剥げてくる　義雄
切り抜けて行くほかはない向い風　俶子
お正月青いシートも泣いている　ひろ子
ライバルの全快心から祈る　保州
山育ち巧く喋れぬラリルレロ　准一
無駄でいい役に立つ日もやって来る　宏枝
キーパーに無理やりされた雪だるま　日出男
人徳を磨き大きくなる器　幹子
一畳もあれば私の大宇宙　和子
念入りに大掃除する袖の下　知香
にじり口畳にそわす和の心　菜摘
詫びてすむことなら安い贈り物　智三

迷い吹っ切る一言に感謝状　敏照
先行きはどうあろうとも過疎に住む　昇
一日の役を全うする夕日　八重子
ポケットの夢に触れればまだ温い　次根
辛抱を磨けば光る朝が来る　昭枝
すんなりと生き畳目に逆らわず　碧
役立つと決めてかかった御節介　富香
躓いた足元で見つけたヒント　美枝子
新しい畳が醸す希望の灯　彦弘
白酒に頬を染めてるおひな様　康則
手遅れでもせっせと磨く美人の湯　あき子
夢でよいバラの花束文添えて　よしこ
畳のヘリ気むずかしやの哲学者　弘子
青畳の匂いは遥かなる大地　明子
ばら一本孫がさし出す誕生日　かず子
いつまでも磨き粉不要夢の女　明宏
こうなればタワシで磨き光りたい　俊介
役に立つ日を待ち侘びる鍋の蓋　千鶴

川柳塔なら　大久保眞澄報

しぼるのは諦めているビール腹　勝弘
新酒待つ奈良は清酒の発祥地　萌子
絞るなら富裕層から消費税　紀雄
人間の灰汁を絞って白い骨　辰雄
絞るのは涙搾られるのは税　文聡
焦点を絞れば本質が見える　のぶよし
時間かけしぼりしぼってこれかいな　光堂
ライバルが気付かぬ様に絞る汗　貫一
前頭葉しぼれば詩嚢唄い出す　國治
杉玉の喜び知らす新走り　薫
秋祭り小さな頭に豆絞り　展代
おからほどの値打ちがありますか　私眞澄
泣いて泣いて泣いて疲れて逝った子よ　理恵
青春のファイトを絞り出すボール　美智子
焦点をあなたに絞り隠し撮り　盛隆
何がさせるあおり運転いう惨事　優
トラブルのトラウマ消えて前向きに　敬子
飾らない言葉が微妙に太い意志　弥生
モノクロの写真が秘めている涙　恵美子
嫁がせて少しほろりと一人酒　万紗子
ほろり来るがらじゃないのヨドライなの　すみれ
ほろ酔いでやめりゃいいのに虎帰宅　圭
小包にいつもほろりと母の愛　崇明
観客をほろりとさせる間のうまさ　ふりこ
難波から梅田へ春のランデブー　成子
霜踏んで歩いた遠い通学路　ひろ介
横歩きしても蟹には前進だ　恭昌
ぼろぼろの結願祝う遍路靴　和之
失意の日おろおろ歩く冬の街　富子
子の不幸背負って歩く母の影　史郎
老いてなお先を見据えて一歩行く　賛郎
遠い距離歩き馴れたら近くなる　倫
近道を避けて歩けと土踏まず　和夫

城北川柳会（大阪）　近藤正報

いそいそと行くことはない黄泉の国　一歩
銃声にひるんでしまう包囲網　肇
惚けテスト夫婦差がなく妻不満　堅坊
断捨離に甲乙2つの箱が出来　義昭
足取りが重い道ほど迷わない　実
十歳児気後れ知らず碁石打つ　榮子
いそいそが尋常でない孫娘　修
日日新やる気に活の朝のティ　直樹
早春賦口ずさみつつ朝仕度　捷二
葱きざむ今日が始まる朝の歌　ばっは
甲乙は付けず謙虚に家族生き　野鶴
プレゼント子らの笑顔が待つ家路　俊雄
今日よりは明日を信じて生きのびる　朝子
玉の輿わたしなんかでいいですか　賢子
十二番大吉ひいて当り年　千恵子
ありがとう繰り返しつつ朝が来る　弘委智
エプロンが似合う娘になりました　郁夫
春暁の水へいのちが満ち満ちる　星雨
振袖がいそいそなびく二十の日　麗
力まない余生ゆっくり賞味する　満作
容貌は互角決め手はインスタ映え　洋志
社会へのスタート孫の肩たたく　寛昭
いそいそと長い旅路の準備する　縣祚
真夜中のペンは勝手にジャンプする　和夫
水仙を手向け励まし一・一七　杁香
SOS大人裏切る子のいのち　たもつ
多国籍仲良く入る冷凍庫　宣子
新元号期待と不安五分と五分　克己
甲乙は神に委ねて生きている　和

百歳まで歩くと彼岸見えるかな　志華子
私の人生甲乙つけがたし　勝弘
無反省原発輸出再稼働　正

竹原川柳会（広島）　古田　太虚報

諦めず遥かな距離を引きよせる　慶子
この恋が叶うか流星はるか　寛
廃校へ遥か遥かな片想い　幸子
半世紀生きた昭和の日々遥か　宣之
彼方からチャレンジせよと母の声　夢香
遥かなる國の切符はまだ買えぬ　規代
うっかりと大臣口に座を追われ　淑子
うっかりを叱ってくれる母の風　鬼焼
うっかりと噂話の風の乗る　栄香
うっかりな私をカラスが見てました　比呂子
うっかりへ小さくなっている頑固　蘭幸
うっかりは何度もできぬ齢になり　千代美
野仏と里の過疎化を考える　昭紀
石仏の涙懐手を解こう　笑子
心洗いに五百羅漢の仏通寺　弘子
ご先祖に詫びを言いつつ墓じまい　敬子
仏になった閻魔さんにも許された　輝恵
ポチの瞳の中にもいるね仏さま　白狐
お仏壇家の主役になりました　汎美
リセットボタンときどき押してくれる母　歩美
年賀状一筆添えて元気です　初音
大輪の花でなくても良いのです　厚子
おいしいとみんな笑顔になっている　史子
ほっぺたがつめたくなるよソフトクリーム　4歳　拓
雪がふるふわっとじゅうたんあらわれた　小二　陽

わかあゆ川柳会（島根）　松本はるみ報

ハデな服買い結局はタンス底　ハル子
結局は迷うた末の走り書き　はるみ
理想像追いかけてみる生きてみる　安子
大声で話す部屋からため息も　昌
すんなりとのびた手足の現代っ子　恵美子
すんなりとゆかぬ日もあり三世代　かつ子

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

結ぶ縁ふさわしくない真子様に　よしあき
二度とダメ千人針の玉結び　茶子
ヘラヘラとして誰とでも手を結ぶ　盛桜
ちげの医者通院カードなんて無し　照彦
るんるんすフォークダンスでマドンナに　好幸
宿敵と利害一致で手を結ぶ　裕
鬼は外福と私と結ぶ声　綾子
守れるかカードで漏れるプライバシー　草文
結ぶ糸求めスマホで罠に落ち　ゆり子
平成のカード大事に桐の箱　すみれ
折々の野菜が届く男結び　実満
ふられても平気僕なら慣れている　小鹿
るんるんと浮かれた後に落とし穴　文道
結び目を解く老後のエンディング　弘子
るんるんがない暮しでも平和です　鈴
雪なんて平気2センチ位なら　完司
スキップがアラあら出来たまだできた　孔美子
世の中のカード地獄を垣間見る　重忠
女房がレッドカードを散らつかせ　恒
蟹獲りに大時化なんて言っとれん　蟹郎
るんるんとお出かけするが又も没　拓庵
命綱しっかり結び吊り上げる　京
病院の支払いまでもカードです　かおる
るんるんと遊び上手の生き上手　満
輝いたあなたと腕組む初デート　みさ子
若者がカードカードと崇めてる　英子
好きな人のお隣の席確保する　美ッ千

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

感謝する道は明るく広くなる　君代
あまのじゃく喜ぶ顔は余所で見せ　健二郎
惜しまずに身体に掛ける修繕費　章子
積む汗もときに裏切ることがある　和郎
甘んじて炬燵に身柄囚われる　美恵子
月とスッポンゴーン氏と私と　和代
今日会った人ヤマトさんだけだった　あゆみ
甘い甘い二か月でした孫帰る　れい子
傘になり杖にたよった姉が逝く　澄子
偶たまが膝混じえると長くなる　紫音
矢面に立たない人がする戦　洋子
赤提灯煩悩の火を唆す　耕一
低温で発酵させてきた拳　武志
三度のご飯ありつく平和噛みしめる　菜美
ありがとうごめんなさいが増えていく　千恵子

お元気そうだ作品が載っている　三郎
脇役をこなすにも技いるのです　華蓮
母の味計ってできるものじゃない　安子
アナログでいるとポイントもらえない　陽子
何度波超えたか恐いものは無い　游子
好きだったころの私に貼る付箋　心咲
加害者が謝れなどとよく言うね　ダン吉
捨てがたき平成忘れえぬ昭和　公弘

京都塔の会　山田　葉子報

幸運を掴むチャンスは瞬く間　光久
アンラッキーここぞへこまずトライする　ふりこ
ラッキーは杖がなくても歩けます　ルイ子
大吉に有頂天です受験生　美津子
幸運の女神のような妻でした　朝子
愚図なのに裏から見られ沈着と　文代
ラッキーな話聞いてる補聴器で　福子
ラッキーと思い込むのも生きる術　弥生
いたずらから始まる科学育む芽　哲子
省エネの冬満喫の掘炬燵　欣之
生きんかな新時代にも闘志湧く　泰夫
やさしさに触れ自然と涙湧いてくる　万紗子
どん底の絆の風に希望湧く　義昭
御来光今年の希望湧いてくる　満子
沸き上がる孫のゴールに涙する　忠子
無意識に声が湧きでるドッコイショ　弘委智
深呼吸見上げる空に湧く希望　葉子
検査では良性だった帰り道　弘子
ラッキーも余り続くとアンラッキー　円笑
あれもこれも省いてめでたい喜寿となり　益子
猛省をしてます私震源地　照子
保険屋は約款省き梅をほめ　洋志
無駄全部省くと私乾ききる　千代
ゼロ三つ省けばわたしにも買える　扶美代
いたずらが好きなばあちゃん人気者　宏子
落書きの誤字と脱字に頬緩む　則彦
黒板消し引戸に挟み教師待つ　元一
ちょっとイタズラする気で川柳に嵌る　かずお
春愁へいたずら好きのランドセル　知栄
春風が粋ないたずら恋芽生え　英旺
姑が料理下手なのは幸運　公子
五十年やっと自信が湧いて主婦　美智代
いたずらをむげに叱るな子の宇宙　正彦
うっかりと省いた中にいる大器　美籠

川柳ささやま（兵庫）　北澤　稠民報

呆けたかな思う内なら大丈夫　かほる
田や畑猪じゃ鹿じゃの足の跡　哲男
洗濯で家族みんなを掻きまわす　稠民
ぼかぼかだ小さくて良い幸せは　さゆ子
朝の一歩テレビの占い心して　幸子
近づけば蛙の声やむ田舎道　善輔
妻の膝借りて甘えた耳掃除　剛
鬼嫁が鬼は外へと豆もまく　重男
下着洗顔下宿時代は洗面器　喜弘
断捨離の今捨てないと後のゴミ　良子
快晴だ洗濯日和腕が鳴る　照代
人は皆生れた時はああ天使　美智子

川柳茶ばしら（愛知）　関本かつ子報

先輩に可愛がられる機嫌とり　三樹夫
ぴかぴかのトイレ日本はすばらしい　遡一行
あやまれば許してやるが横を向き　まみ子
豆の蔓もうすぐ天にまいります　美千代
肥りすぎ錠剤一つ夕食後　雅美
命日の母も喜ぶ豆ごはん　かつ子

川柳大阪　山崎　珠生報

百均の手帳に夢のてんこ盛り　朝子
母子手帳へその緒嫁ぐ娘に持たせ　福貴子
スマホより手帳に記載ボケ防止　珠生
認知症テストはオール二重丸　芳香
風邪引くな諦めるなよ受験生　ゆみ子
試験管の中で花咲く未来の芽　美籠
合格の隅で泣いてる不合格　一歩
認知症のテストでレッドカード出る　まつお
仲間から仲間へ引き継ぐ旗があり　比呂志
我が命継ぎ足している趣味一つ　堅坊
乗り継いでやっと出逢えた人と居る　万紗子
孫の手が届かないからもだえてる　司
わるいなあ三十坪の土地だけで　勝弘
継はぎの記憶を辿る二日酔い　俊雄
駅伝のタスキと信頼手から手へ　(矢)五月
次世代に不戦の誓い伝えたい　紀雄

跡を継ぐこれは気合と辛抱や　かよこ
はじまりは義理で渡したチョコひとつ　雅美
改元へ再スタート切る日本　賢子
スタートの一歩神経研ぎ澄ます　克己
人生のスタートはみな丸裸　(鈴)いさお
スタート切るゴール見えない川柳へ　美世子
厄落とす人の群れに逆らわず　照月

川柳塔わかやま　小谷小雪報

悪い予感打ち消すコーヒー熱くする　紀久子
メールふたたび恋の予感が顔もたげ　あきこ
テレパシィ感じて予感的中だ　ほのか
全身に予感の波が押し寄せる　寿子
空白の日を覚えてる日記帳　よしこ
空白が続く鉛筆折れたまま　あかね
贈与額の欄が空白だった遺書　保州
散歩道空き家むなしく冬の空　秀子
繋ぐ手の温さ冷たさ知るギャップ　冨美子
静電気みたいな血縁に悩む　知香
又来てね思いを込めて手を繋ぐ　ちづこ
繋がっている気にさせるハート型　小雪
SOS出した子の手を離さない　日出男
老い二人つなぐ絆は解けない　准一
相槌で繋ぐみごとな聞き上手　徑子
思い出を繋ぎあわせば平成史　紀子
縦と横繋ぎ合わせていく絆　京子
子や孫に囲まれ繋ぐ笑顔の輪　まさみ
手を繋ぐ相手選ばぬ万国旗　航太郎
繋がれた鎖はきっと腐れ縁　大輪

南大阪川柳会　松岡篤報

クラス対抗選ばれ親子眠れない　弘子
トレードに出した選手に苛められ　和雄
居酒屋で選手きどりで吠えている　実
FA宣言妻もぼちぼちする気配　楓楽
なおみちゃん大阪弁も覚えてや　昌紀
なにかあると祝日増やしたい政府　修
祝日に親戚集う三回忌　柳右子
祝日の十連休を子等は待ち　恭昌
祝日は日当なしで金はいる　シマ子
祝日も休日も無しケアハウス　志華子
満ち足りた猫ひざにのせ日向ぼこ　真佐子
好意に満ちた言葉うれしく受け止める　ルイ子
この世界色に満ちてるあふれてる　峰子
満腹なら幸せだった幼き日　国和
生き下手な女にも満ちる春の色　ひさ乃
今しなければ常に時は満ちている　亜成
朝ご飯食べてしまった採血日　いさお
うっかりとレジで診察券を出し　直子
いつもいつも捜しておりますメガネ　勝弘
うっかりのダルマも転ぶ風の向き　あやこ
ライバルにうっかり見せた泣き所　俊雄
消印有効本局へ駆けつける　克己
頼もしい息子わたしを諭すとは　益子
殊更に寂しくさせる十三夜　柳伸
毎日日曜止まったままの時計です　ばっは
住みなれて活断層の上もよし　たもつ
焚火の輪噂の火元火を煽る　弘委智
生き生きとヨレヨレ余生格差あり　東風
招かざる客です雪と杉花粉　栄子
らしくない父のため息漏れて冬　郁夫
七草粥の世話になる程飲んでない　博
積ん読に今年挑戦する決意　一歩
激論の後は握手と乾杯と　篤

富柳会(大阪)　関よしみ報

透かしても諭吉が見えぬのし袋　文重
まぐれから駒が飛び出し今夫婦　伸雄
一生に一度のまぐれ君と僕　田鶴子
賀寿のたび夢を紡いで生かされる　正治
まぐれという運が味方をした勝利　よりこ
人情のパズルの中で咲く命　澄子
平成の始末只今模索中　由夏
生きる物拒みて凍てる冬の山　壽峰
初雪ふわり明日は積もるか手酌酒　隆充
大車輪母中心の大家族　高鶩
甲子園新元号で盛り上がる　清
吹く風も都会の中で尖ってる　常男
常温に戻して愛を確かめる　かこ
現実にふと踏み込んできた仮説　武人
賞賛はまぐれと汗を語らない　恵
古日記紅葉の栞知る秘密　寿之
寒中のしぶきに目鼻そぐ行者　よしみ
老老の楽園島へUターン　欣之

平凡を非凡にまぐれから刹那　森子

プラザ川柳（大阪）　穂口　正子報

理不尽な虐待怒り凍り付く　正子
初詣でお礼で三つ願い事　和代
受験前家族ピリピリ緊張感　悦夫
ありまっせ小銭やったら持ってるで　おかめ
自販機の前で小銭捜す子ら　園子
履歴書の欄に東大受けました　淳司
寂しさをぐっと堪える留守家族　修
西郷はぐっと一声「るす頼む」　萌
ひょっとこ顔で受け皿の酒嬉し呑み　克三
小銭ならオレに任せろ一歩前　弘光
騒がしい小銭集めてお賽銭　五月
自然破壊受け継ぐヒト科許せない　一彌
小銭なし論吉も持たぬカード族　政夫
小銭入れ大きな顔の五百円　清乃

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

「例のこと」二人だけには通じ合う　正子
印籠が例のごとくに出て拍手　美佐子
例題は解けて本番あたま白　一弥
過ぎし日を辿れば根っこ里の春　純子
モノレール過ぎる窓際作句する　信男
私には過ぎた夫とまだ言わぬ　則彦
過ぎた日は言わずに歩む地平線　一
傘寿過ぎやっと卒業二日酔い　堅坊
しっかり者言われて弱音吐けない子　順子
しっかりと握った手と手離さない　柳童
師のことばしっかり噛んで消化する　黒兎
松の木の傾き太く風情出る　守啓
柱の傷いたずらっ子も父になる　桂子
長老は日々の暮らしにそつがない　久子
まだ友は胸に生きてる三回忌　春代
好きな皿欠けてもアロンアルファーで　奈津子

きゃらぼく川柳会（鳥取）後藤　宏之報

片づけたせいで一日探しもの　令位子
やっつけの役目を終えてホッとする　汪
黒豆も第九聴いてる大晦日　瑞枝
春が来て今年も元気ハツラツと　美草
上手ければ全人類に賀状書く　美穂
アポ電話ますます老いを困らせる　廣子
西暦でピンとくるのは賞味期限　美佐子
脳トレを兼ねて毎日ペンを執る　久直
励まして労いも込め酒を酌む　紀の治
フェイントをかけて年賀をやっと言う　宏之
禁酒してはずれたタガを締め直す　美智子
雪景色大山みごと壮大だ　菜々
注連飾り埃だらけの桟に掛け　雨奇
亥の年に負けてはおれぬねずみ年　日枝子
散策で小春見つけた蕗のとう　ゆたか
顔パスが通った頃の映画館　美枝子
七草の口一杯に春薫る　ちえ
腰伸ばしモリモリ食べるバイキング　千代
通り道表札だけが待つ空き家　治代
初夢も砕かれ医者の門叩く　章
人柄の余韻の中にある言葉　恵子

倉吉川柳会（鳥取）　竹信　照彦報

我が家には結婚という日春がくる　紀美恵
春は好き邪魔する花粉症はいや　康子
この春は受験の孫なく気が楽だ　智恵子
クラス会で唄うつもり「春よこい」　けいこ
あの頃は昔これからあすが来る　玲子
あの頃の辛抱今をありがたき　恭子
デモの列兄は向うの機動隊　野蒜
ふる里とあの頃はもう忘れよう　瑞子
あの頃の倉吉線は桜路　祐子
あの頃に戻るちゃん呼び同期会　茂夫
青春の楽しい日々の喫茶店　風露
安月給夜学通いで遊びなし　明友
見詰めるとゴメンナサイという鏡　完司
統計の何見て跳ねたウサギさん　次男
梅の花懐炉を抱いて見に行こう　石花菜
ピカドンの生き地獄見た復員時　重忠
一点を見つめて力むおまるの子　萩江
目眩まし時にコスプレ凝ってみる　大鯰
写真見る話しかけたい亡き夫へ　日出子
映画見る万引き家族の絆知る　酔芙蓉
平穏な暮らしに刺さる税のトゲ　麦青
何気ない言葉がグサリ三日病む　雄大
思春期に刺さった骨がまだ痛む　鬼一
いさかいて小さなトゲが刺さる宵　由紀子

一言が胸に刺さったままでいる　龍枝
沖縄に突き刺さる安倍自民の矢　照彦

ふうもん吟社（鳥取）　両川　無限報

ありがとうだけを書きたい僕の遺書　宏章
こだわりがあってこのペン離せない　八千代
散髪をしたらきれいと妻が誉め　鐘馗
大穴を逃し舞い散る紙吹雪　回春子
嘆かわし老いては孫に叱られる　茶人
見る人の色で咲いてるさくら花　節子
首すじに綿雪ふわりまたふわり　楓花
人生路拾った夢は宝物　菖子
余命見えこの世に未練湧いてきた　善平
ストレッチ錆びた五体が悲鳴あげ　美恵子
あと五分見つめられたら蝶になる　りんこ
柊に鰯のあたま春がくる　一平
人生の四コマいまだ夢がある　天翔
雑草の粘り欲しがる老いの腰　昌鼓
川柳が今ではたのし五七五　薫章
有刺鉄線切って私に逢いに来い　一瑤
ボランティア儲かりません人が好き　紀美江
労力をおしまぬところ儲けあり　厚子
挨拶は儲かりまっかあきまへん　振作
儲かりますと悪魔囁く電話口　凱柳
高齢者に儲け話が寄ってくる　房江
儲かるとますます欲が深くなる　金祥
儲け話貧乏人は蚊帳の外　薫
追い風を上手く活かして儲けてる　一粋
好きな服穴があくまで着こなした　初恵
消費増税疑似餌ばらまき策を練る　毅
ロボットが話し相手の独居老　由美子
ロボットに案内されて社長室　蟹郎
ロボットが私の仕事奪い取る　真理子
ロボットを俺が操る夢だった　大
ロボットの冷たい指が背なをかく　義徳
わたくしは貴方のロボットではない　幸子
我が家にも一台欲しいドラえもん　みゆき
メビウスの輪が抜けられぬ愛と憎　無限

川柳あまがさき（兵庫）　大浦　初音報

蕗のとう春の足音連れてくる　(高)千賀子
老猫が死期を悟って姿消す　厚江
カラオケで音痴に拍手多すぎる　柳明
残り物煮詰めて明日はカレー味　たみえ
消えいるような声のわりにはでかい顔　初音
昼にして今夜も続く猫の恋　(入)修平
発音が悪いがポチに通じてる　新録
コテコテの大阪弁も減ってきた　菊江
眼の裏をきれいに洗い過去を消す　紀華
サバ缶がメインディッシュの一人者　英坊
音立てずB面で待つ次の波　紀恵
絶食中傍でうどんをすする音　(竹)千賀子
コマーシャル多すぎドラマ切れ切れに　りこ
冬眠の土に聞こえる春の音　純
別嬪のナースが二度も針を刺す　健二
音のない樹海に一人いる恐怖　盛夫
勘定の前にアイツはいなくなる　花門
核心に触れてきたので姿消す　芳香
私を包む空気は私色　こみつ
会議では黙り飲み屋で愚痴るヤツ　ひろ介
何度でも要求されるパスワード　修平
クラス会男年々消えてゆく　祐康
追い越されても鳴らさないクラクション　まつお
淋しさが少し消えたよ熱いお茶　ヨシエ
私を消すなら消して化けるから　千津子
友の愚痴コーヒー二杯飲み終わる　宏造
ひと仕事終え関節伸ばす消防車　公子
諦めの悪い女の厚化粧　万彩
バラ一輪ひょんな事から運が向く　美籠
少女消す雪悲しみの胸に降る　哲夫
生きている証しに鼾かいている　正和
しつこさを武器に幸せ掴みとる　かずお

川柳堺さかい（大阪）　内藤　憲彦報

お見舞いの嘘を知ってる千羽鶴　ひろ子
嘘の無い絵を描けるのは幼児だけ　ばっは
嘘つきに教えてあげたウソがある　扶美代
不器用でも嘘が言えない彼が好き　唯教
軽い嘘通じる仲間何人か　世紀子
ドキドキは止そう何とかなる明日　和夫
裸婦像の前で動悸が治まらぬ　愚
このタクシー前を見ないでよく喋る　憲彦
予習せぬ時に限って当てられる　雅明
バージンロード父の鼓動と踏む未来　誠一

ママひとり客はぼくだけ外は雨　敏治
ドキドキの味を忘れて半世紀　富夫
ドキドキが忘れられないハネムーン　としお
人の字を書いて飲んでる出番前　玄也
ドキドキと診察室のドア開ける　さくら
空の旅どきどきさせる乱気流　好
責任を取って只今ホームレス　舞夢
うやむやな謝罪で済ます無責任　妙子
時機来れば責任取って柿落ちる　光雄
責任を取らない口に泣かされる　佳子
子殺しの親に厳しく責任を　廣子
責任感重んじ潔い辞任　玲峰
匿名のあなた責任とれますか　雅美
責任を問えば崩れる砂の家　志津子
逃げるなと私の影が追ってくる　みつこ
責任をぶらぶら下げて鍵の束　美津子
仮免で親になってはいけません　俶子
目覚ましに責任はない遅刻癖　ゆみ子
ちょっとだけ翔んでみたらと背を押され　五月
チコちゃんに突然叱咤責められる　八千代
千曲川に藤村の見た世界知る　(綾)清
血筋だなぁ年取り父の背に似て　輝子
近い国遠い国より世話が焼け　憲
痴話げんか父ちゃん遂に正座する　時雄
知覧から飛んだ覚悟の戦闘機　進

あかつき川柳会(大阪)　**山本　昌代報**

心電図水平になりジ・エンド　いさお
札つきの統計マジックここにもか　鮎子
トランプのはったりプーチンの詐欺師　一歩
みそ作り我家の味をほめられる　優子
霊長類名高い学者ゴリラ褒め　紀子
評判の店聞いてはいたが長い列　敏子
ことことと豆煮る側に亡母の声　惠美子
山眠るきれいな寝息たてながら　喜八郎
寝てる間に日本が右へ曲がり出す　克己
わだかまり呑み水平の波静か　常男
妥協点見つけてからの横並び　高鶩
青春期寝る間惜しんだヨイトマケ　壽峰
一面の黄色の海は菜の花だ　万作
保育園建てたら子供産んだげる　一志
子どもでも知ってる麻生さんの声　信子
沖縄のサンゴ埋められ泣いている　清
感動が水平になり老いを知る　栄子
梅の香に合格の絵馬揺れている　浩子
柿ピーのピーナツ多い方が好き　直子
豆ご飯旨い不満は何も無い　堅坊
大した街でないが駅弁が名高い　扶美代
ぐっすりと寝たことがない拉致家族　たもつ
豚コレラ豚には罪はないのです　明子
評判が行く気にさせるフェルメール　ひろ子
味噌醤油じっくり時が旨くする　満知子
東風吹いてどこかで春の呱呱の声　朝子
いくら撒いても心の鬼は居続ける　穏夫
毎夜毎夜名湯巡り居ながらに　福貴子
名の知れた猫の駅長人気者　善之
故郷の海に名高い潮が巻く　シマ子
名水の井戸枯れ豆腐屋を終い　みつ江
有名になって肩凝り幕おろす　一文
ワル同志妥協するのか再会談　ひろ介
トランプやアベを見立てて鬼は外　鈍甲
水平線まだまだ歩く走らねば　ダン吉

川柳ねやがわ(大阪)　**籠島　恵子報**

まだ少し残る命へ赤い靴　玲子
裏切らず今年も芽吹くこぼれ種　信子
「徒然ねくねか」婆様ひとり北の国　鈍甲
見通しはたたぬが寄ってくるあの世　薫
見通しがようやくついて缶ビール　博泉
とろりっとチョコに包んだ淡い恋　寿子
告発の網をくぐって来た悪事　壽峰
先客の万来期待する五輪　高鶩
百歳を見通し家計簿が軋む　祥昭
沢山のミスをしたから今がある　武彦
コップ酒写真の前の薄明かり　秀雄
少子化の森で淋しくなる童話　堅坊
寒風の中でほほえみくれる花　賢子
おおらかに子育てをする子沢山　朝子
チョコレート上げる相手は仏様　かすみ
見通しが悪くて転んでばかりいる　ルイ子
流木が流木を呼び立ちつくす　弘委智
ミートゥの告発状が舞う地球　和織
赤い鳥飛んで来そうな青い空　弘
作り笑い君も寂しい人なんだ　郁夫

錆びついた頭にはこれ酒をつぐ　修
半世紀の恋告発でひと波乱　麗
大移動のヌーにはるかな最後尾　茜
少子化に見通し立たぬ未来像　仁
沢山の友達増えた趣味の会　さち子
過去の亡霊見たくないから前を向く　亜成
取り合えず干し大根にしましたの　恵子

長柳会（大阪）　辻村　ヒロ報

夫婦仲本音もチラリ五七五　ヒロ
相席に旅は道連れ和らいで　千代
けなさずに誉めて光るわその内に　福子
赤い糸今も探している私　正博
ふる里で絆を紡ぐ掘炬燵　和子
めくるめく眩しい恋を経て熟女　光弘
足元を見すえ理想は天高く　清博
まやかしがモラルを欠いてのさばる世　登美子
趣味仲間切磋琢磨し老い知らず　洋二
年をとり二階のくらし苦になって　弘美
一番じゃなくて二番で良いと母　由夏
二十歳代だけどわたしはバツ2です　たけし
一番にはなれぬ二番手死守してる　ともこ
応えました無二の親友鬼籍入り　敬二
無二の友見舞う明るい顔つくり　和代
受けともて恋人たちは月へ行く　旅人
親馬鹿はうられた喧嘩受けてたつ　ゆき
子が選ぶ道を受け入れ背中押す　幸子
暴投を受けては返し妻達者　ふみ
真に受けたあのひと言で蟻地獄　直樹
良くも悪くも懐深く受ける母　孝代
海外の小銭残さずチョコレート　三和子
一円の賽銭みくじ凶でした　隆彦
小銭かて命を懸けて生きている　孝
駄菓子屋へ小銭が夢を買いに行く　正美
水に浮く一円玉のような僕　淳司
ビン一杯ためた小銭はユニセフへ　英美

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

新元号閃きましたマル秘です　弘充
閃いて人生観が変化した　輝山
初鳴きが届いて町も活気づき　あきら
春近い妻がマスクをかけだした　みちを
桃色の吐息に触れる春の土手　徳利
つっかい棒はずし出かける春だから　孝子
ジェラシーのワッと爆弾低気圧　芳山
嫉妬する女が文字に隠れてる　草庵
ジェラシーは時効になった白い布　雪代
嫉妬とは色で言うなら赤か黒　ゆき
行列のパフェに嫉妬をするおはぎ　瑞人
一日の嫉妬シャワーで流します　久絵
あの人も嫉妬するんだちょい嬉し　米估
あの人は嫉妬するほど美しい　朋子
ジェラシーの数が天国遠ざける　柳歩
複雑な轍残して平成が逝く　桂子
複雑な火の粉を浴びて仁王立ち　美智子
複雑な絡みから出て昼ランチ　知恵子
複雑なラセンで迷う頭の血　哲子
役受けて人間模様知りました　モナカ
複雑な笑いが本音隠している　豊仙
そよ風を浴びるハンガーとステテコ　青帆
浴びる檄我を叩いて奮起する　左余
脚光を浴びたピエロも歳を取る　寿代

八尾市民川柳会（大阪）　中薗　清報

百歳時代人生模様さまざま　紀雄
気高さは寒さ堪え咲く梅の花　千里
日溜まりでうらら小春の日向ぼこ　壽峰
ひと筋の涙に男すぐコロリ　高鶯
沸点の愛にもやがて氷点下　寿之
逢うて来て雨のしずくになる未練　常男
湖が秀峰富士をカラー刷り　卓郎
乱反射ハウツー老後助走中　涼子
聞こえるときも聞こえぬときもある勝手　耀一
愛の文字ぎっしり詰めて熱い文　仁
冬に夏夏に冬恋う得手勝手　欣之
バッカスに油灌がれ口さわぐ　みどり
人の輪の真ん真ん中は寂しがり　恵

川柳花の輪（大阪）　岡本　薫報

定年のこの日を狙い離縁状　正太郎
覚えたと思たら古い流行語　みちる
走りすぎすなおに聞いて追いぬかれ　笑子
高齢者走ってすべり救急車　やすの
一生を走り生く人歩く人　泰子

伝統の汗がタスキに箱根越え　信子
秒針が走る瀬戸際の生命　亜成
初めから二位をねらって夫でいる　薫

六甲川柳会（兵庫）　奥澤洋次郎報

オイと呼ぶ妻が頼りの昨日今日　光久
我がままが可愛いなんてホの字だね　千賀子
各首脳おもむくままに自己主張　正彦
我がままな末っ子同志よくもめる　芳江
この返事すれば消えそうなしゃぼん玉　洋次郎
愛嬌とごまかす返事もの忘れ　邦子
頻尿で海外旅は未だ夢　弘
イエスノーはっきりしてる妻が好き　利子
いいムード着信音に邪魔される　博
我がままも無理も聞いてる病み上がり　美恵子
傷口の攻めを気遣う好敵手　憲三
ゆるい脳電子手帳が命綱　道子
我がままを互いに抑え五十年　浩司
目一杯我がまま許す別れの日　盛夫
ペンで世を斬った男のなま返事　日呂志
仏も鬼も話せば人の顔になる　和宏
地球儀を回してでかい夢を見る　武彦
夢に見たあの絵葉書の中にいる　和郎

西宮北口川柳会（兵庫）　藤井　宏造報

手がふれてはっと赤面してしまう　瑠美子
春はそこ芽吹くチャンスを待つ二人　千賀子
すくすくと伸びる孫にも背を抜かれ　新録
足らざるを補い合って共に咲く　恭子
順調に吉日を待つペアリング　美籠
二人暮し増えて社会がおかしなり　洋次郎
デュエットで僕は貴女を包み込む　盛夫
補聴器をつけても二人笑わんよ　(清)弘子
欠けるのが嫌で買わない夫婦碗　りこ
二人でいる理由はひとつ赤い月　紀華
どう見ても夫婦ではないペアルック　武彦
隠しごと有るのか嫌にはしゃいでる　いわゑ
恋をして初めて母に嘘をつく　千代
隠し事巧みに探る妻の勘　堅坊
貧しさを隠し笑いが母の知恵　弘委智
夫逝きて隠すことなきむなしさよ　佐紀子
腹割って隠さず話す身の不覚　野鶴
堅い土押し伸びてきた土筆の芽　みよし
言い訳の返事を伸ばし様子見る　(福)弘子
もう少し誉めてくれたら伸びたのに　敦子
囀りに首を伸ばして春を聞く　邦子
伸び切ったゴムか記憶が戻らない　健彦
世の変化に喜寿の頭が追いつかず　浩司
娘の仕草はっと我が身を整える　哲子
雷鳴にはっと目覚めた白昼夢　宏造
母の背を越して終った反抗期　利子
定年の後がこんなに長いとは　一徳
気がつけばボクのフトンで寝てました　勝弘
スパルタの爺ちゃん俺は好きだった　正彦
梅ふふむ真子さまのことふとよぎる　美津子
後姿で分かる男の頼り甲斐　和宏
深い皺エステの効きめまだこない　宣子
チョコ売場彼と出合ってしまったの　順子
好きなことに時間の伸びる午前二時　迪
ばれなけりゃ隠してよいのかお役人　伯備

川柳さんだ（兵庫）　村田　博報

白熱の死闘が生んだ世界新　修平
正論も熱意がすぎて疎ましい　ちあき
激論の火照り二次会でも冷めず　宏造
政治家の白熱議論つかみ合い　千賀子
ここからは未来予想図どおり生き　真桜子
実行キー押せないでいる謝罪文　恭子
抱きしめるママの両手を待つ園児　一子
子を守る母の捨て身が胸を打つ　ひろ介
手を添えて紳士静かに譲る席　哲夫
バランスをちょっと変えればべっぴんさん　晃
バランスを崩せば危険無礼講　利子
いちにちのバランス映えて陽が沈む　ヨシエ
せっかちな夫支える京訛り　美籠
夫の稼ぎ余らぬように使こてます　千代美
松竹梅程よく混ぜてクラス分け　雅尚
ゆるキャラはバランス悪いけど人気　哲男
凸凹を補い合って共白髪　周三
子沢山母は上手に愛を分け　優子
バランスを取るため尻尾あるんだね　武彦
商いは牛の涎とあきらめず　つな子
盤上の気迫に負けぬ粘り勝ち　宣子
外は雪布団で粘るあと五分　祐康

綺麗やなあ粘り通した娘の門出　えい子
振り向けば恋は不思議なものでした　隆太
人妻に恋して罪を深くする　野薫
愛妻の裸婦画描いて行く戦地　喜弘
金借りた頃が人生真っ盛り　万彩
長生きも五輪万博見るまでか　健彦
七回忌訛とび交う母の事　順子
心愛ちゃんを助ける術はなかったか　好文
私にエールをくれる朝のモカ　久美子
八十路ですポーっと生きていいですか　正和
アルバムに昭和モダンの母がいる　義徳
春炬燵猫のひげなどひいてみる　ゆかり
婆ちゃんをヨイショしているお爺ちゃん　花門

岩美川柳会（鳥取）　山下　節子報

一番のモデルは母の知恵袋　一瑤
みえみえの義理チョコだけど有頂天　一粋
種子を蒔くモデルは桜花見どき　一平
水虫が冬眠してる足の裏　重忠
若嫁が笑顔でくれる甘いチョコ　弘六
裏方へ徹し見えない汗を拭く　美恵子
ノー言えず結局自分困らせる　たぬ
自信と言う裏があるから頑張れる　菖子
墓場まで持って行くこと言っちゃった　幸安
ニコリともしないモデルの怖い顔　敏子
後期高齢目指すモデルは樹木希林　茶子
困ってる腹たっている嘘つかれ　公子
ふところが知り尽くしてる裏事情　振作
裏の顔日記帳だけ知っている　真理子
モデルなどいらぬ己の道を行く　彰夫
人生の裏通りにも花は咲く　雅女
酒タバコ止めただけでもモデルとは　千代
言い訳も裏が見え見え二枚舌　凱柳
拉致の子にドローでチョコを差し上げる　蟹郎
うっかりと小銭を持たずバスに乗る　節子

川柳藤井寺（大阪）　太田扶美代報

五年振りの松茸まずは匂いから　まつお
疲れます切るに切れない長電話　喜代子
味わい深い人だいつでも丁寧語　久仁雄
八十路きて知る早春のほろ苦さ　みつこ
満腹になって怒りの矛収め　俊雄
利用価値あるうちが華使われる　千代
心から味わう母のおみそ汁　雄太
横綱の辛さ知ってる徳俵　美代子
アベノミクス庶民の暮しへとへとに　紀雄
不完全そこが受けてる草木染め　ばっは
リハビリのへとへときっと明日がある　一歩
パンの耳昭和の味を食べている　しげ子
人間の節度が見える腹八分　信二
ユーターンへとへとになる野良仕事　シルク
満幅の信頼置いた秘書を斬る　フジ子
八十路坂へとへと下る老女あり　絹子
手触りは絹にも負けぬ古木綿　六点
年重ね私はわたし色になる　あかり
登りには見えぬ味わいある下り　キーキー
満腹感狂い始めてきた加齢　光男
くせ字だが味わいのある年賀状　いさお
へとへとになって毛虫の網わたり　清
マジシャンの鳩へとへとで飛びません　瑠美子
飢えた日がわたしを強くしてくれた　扶美代

翠洋会（大阪）　大久保眞澄報

たまたまに山が当たってから悲劇　大子
大泣きの動かぬ山の三才児　すみ子
山程の駄句を作って昼寝する　蕉子
ゴールまでくぐる山やま生きる甲斐　ふりこ
山盛りの話題を提げて友見舞う　昭
野暮用を頼む電話へお辞儀する　弘子
いつも駈け足主婦が抱える家事雑事　希久子
出たついでの用事に家が遠くなる　桃花
「オーイ」「ハイ」「用事忘れたもうええわ」　舞夢
にっこりと握り返したのが答え　富子
美女の手を握り返して冷めた夢　げんえい
赤子の手いのちを確と握ってる　満作
振り上げた拳万歳しておこう　眞澄
施策より握手の数が票に出る　行久
詩心どんどん消失するようだ　理恵
梅の香で生暖かい春を呼ぶ　善之
百歳に向けて八十路のギアチェンジ　和夫
暮じまい考えているロダンです　千枝子
テーブルに今日一日が置いてある　義
主婦業をクビになりたい昨日今日　楓楽
実直に歩き続けた長い道　志華子

クラス会次回危ぶむ歳となり　敬子
異国語に慣れ親しんだ奈良の鹿　恭昌

大山滝句座（鳥取）　新家　完司報

改元で私は別に変わらない　みちを
旅の空わが家の空と同じ空　照彦
ささくれは治ることなくロクデナシ　芳山
ほろ酔いの胸の谷間に貼るセコム　くにこ
花園が見えて来ましたひとり旅　紀の治
履歴書にルーツなど書く欄はない　楓花
乱暴と躾の狭間ある命　八千代
乱暴な拳　菩薩のような顔　麦青
トランプをカービン銃が狙っとる　石花菜
梅咲けば桜咲けばと旅プラン　美ッ千
一滴の水だ大河の源流は　正人
マンネリを打破する旅で再起動　裕
あわてると乱暴になる筆づかい　幸子
助手席のナビが少々老いてきた　雄大
眠れない夜はワインで甘い夢　由紀子
許可なしに物干竿が高くなる　けいこ
冥途への旅にやっぱり金も要る　風露
梅干しで止めるあばれる腹の虫　小鹿
よし決めたパイロットにはならないぞ　正男
ご先祖はみんな同じのアマテラス　野蒜
乱暴に決めた法でも世を支配　道唱
空元気出してお酒をラッパ飲み　重忠
ああ乱暴　子供の命軽すぎる　久子
旅行好き病と歳に邪魔をされ　鈴野
ウフフフルーツ辿ればおの小町　清明
乱暴なタッチが魅力ゴッホの絵　規雄
平穏に飽きると暴れだす地球　完司

豊中もくせい川柳会（大阪）初代　正彦報

人形じゃないと飛び出すノラの乱　歌留多
わくわくを拾ってからの上り道　求芽
人形劇きらきらのめり込む園児　肇
女子会は赤い気炎で盛り上がる　英旺
お日さまの微笑み拾う春の庭　公子
現世はすべて借りもの置いて逝く　健二
話せない人形だけど癒される　英三
天空に繋がる亡夫の赤い糸　時子
年とると話し相手はぬいぐるみ　健三
人形に罪を被せて嫁にゆく　美佐子
AIの人形星と話してる　シズエ
開けたパンドラ納うほかなし一つづつ　武彦
ふる里は働きものの箒星　きらり
多感から多情少女一気に駆け上がる　(永)玲子
名言を抱いて平成渡り切る　ヨシエ
情報秘守連絡網も作れぬ世　堅坊
自分史の一部赤線で消しておく　宏子
頂いた助言は愛をしのばせる　久子
凍てついた庭にほっこり福寿草　美智代
平成のゆるキャラ熱も曲がり角　正彦
裏道にゴミ捨てる人拾う人　見清
デートかなビシッと決めた剃りの青　美籠
反骨はまだ脈々と血の系譜　誠一
呆けもせず歳もとらないお雛さま　則彦
踏み出してみようか赤い靴履いて　雅美
警報が出るまでお茶を飲んでいた　千鶴子
戦死報障子の奥にある余寒　真理子
残り香へ未練が残る赤い糸　野鶴
永遠を神に誓ってからは捕虜　黒兎
親切の種を拾って次に蒔く　(岩)玲子

川柳ねやがわ（大阪）（前月分）籠島　恵子報

コロッと逝って極楽浄土願ってる　弘一
愛と言う罪な言葉に酔っている　郁夫
アイラブユーどう歌っても届かない　修
冬枯れの庭に期待の寒椿　麗
火傷して知る愛が炎となることを　信子
まだまだと飲み出しました養命酒　鈍甲
ママが好きメモをもらった日の想い　弘委智
愛に触れ堅いつぼみが緩み出す　寿子
記録保持ゆったり出来ず爪磨く　啓二
愛燦燦そそぎ夫婦の共白髪　壽峰
この平和記録更新させる今　銀杏
七色の薬で長寿新記録　祥昭
嫁ぐ娘へ無口な父の深い愛　賢子
人間愛みんなが持てば無い戦　朝子
子や孫に期待されてるお年玉　ルイ子
私が一行載った百年誌　かすみ
愛された記憶も持たず虐待児　和織
西暦にすればよかったわが記録　堅坊
そつがなく孫十人を愛してる　高鶯
限りなく愛されてる身と知る勇気　亜成
体調へご飯小さく盛っている　恵子

遠野さんのこと

西村哲夫

競い合う一句抜けるか全没か　　哲夫

いつの頃から本社句会で知り合い意気投合、酒を酌み交わし、そして川柳塔の未来を語り合う仲となったのが鶴田遠野さんだった。

「川柳塔みちのく」の波多野五楽庵主幹に「遠野」と雅号を戴いたご縁で、みちのくの方々とも親しくおつき合いされていたようだ。

哲郎から遠野に雅号が変わると川柳への情熱は病を抱える人には見えないほどに燃え上がる。

住吉が麻生路郎終焉の地ということで、「川柳塔すみよし」句会を立ち上げ、未来の夢のひとつを実現させたのである。本当に大した男だ。私にとっては遠野さんは、祖父路郎、母リリよりも川柳の楽しさを教えてくれた柳友だった。

昨年の七月、みちのくの三十周年記念大会にも参加者を募り、切符の手配など精力的に動かれたが病魔には勝てず、遂に参加は叶わなかった。

そして今、浄土にて路郎、リリと共に川柳に燃える仏となられたのである。私が葬儀導師を務めさせて戴いたことも、川柳のご縁であろう。

合掌

釈　遠野　　俗名　鶴田哲郎

平成三十年十月二十一日　　行年七十二往生

また一人路郎愛した人が逝く　　哲夫

啓生さんを偲んで

源田八千代

源田啓生さんは年上ですが私の義弟です。赤ん坊の時に脊椎カリエスに罹り、以来身体障害者としての生涯でした。けれども持ち前の器用さと負けん気で洋服の仕立てを身につけ、「テーラーぎんれい」の名で洋服屋として頑張りました。

ＮＨＫ朝の連続ドラマ「まんぷく」の主人公、萬平さん（安藤百福氏）が勲章を受けられた日のモーニングの仕立てや、福子さん（仁子夫人）にも懇意にして頂きました。啓生さんの息子にも「お父さんを大事にしなさいよ、私が見てるから」と仰られたそうです。

啓生さんは何につけても器用で、新しく創立した学校の校章のデザインも採用されました。また漢詩・短歌・俳句・川柳を嗜み、それらの作品が新聞、雑誌に掲載され、「なにわ柳壇」にもかなりの入選句があります。

ハンディを心のバネに今日を生き　　啓生

身体障害者福祉委員会の理事や、肢体部会の会長も長く務めました。その当時、文化部の活動として「川柳の会」が発足し、薫風先生をお招きして以来、お互い豊中同士ということもあり親交を深め、先生のお宅にもたびたびお伺いしたとのことです。

晩年の啓生さんはほとんど寝たきり状態でしたが、頭は冴えていて、インターネットやＯＡ機器に精通していましたが、昨年の師走に遂に旅立ちました。八十六歳でした。今頃は懐かしい人々と一献傾けていることと思います。

合掌

句会名	日時と題	会場と投句先
南大阪 川柳会	15日(月) 18時30分締切 風・ちびる・浅い・するする	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
豊中 もくせい 川柳会	15日(月) 13時50分締切 文房具・積む・はっと 自由吟	豊中市立中央公民館　3F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
川柳 さんだ	16日(火) 13時締切 注意・回復・ムード・忍ぶ 自由吟	キッピーモール（JR三田駅前） 〒669-1545 三田市狭間が丘5－10－19　谷　祐康
川柳 たちばな	17日(水) 13時45分締切 席題・たまに・咲く・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) 阪急塚口駅北へ10分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
岸和田 川柳会	20日(土)　吟行句会 岸和田市包近町「庄八」 緑・音楽・嘱目吟	集合場所：南海電鉄「岸和田」駅前第一ゼミ前 9時30分 JR岸和田駅前9時45分 問合せ：石田ひろ子　℡072-431-2672
川柳塔 わかやま 吟社	20日(土) 14時10分締切 兼題＝エラー・苔・ついで 課題吟＝球種	和歌山商工会議所　4階　和歌山市西汀丁36 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
川柳塔 みちのく	20日(土) 17時締切 風・ほどほど・瞳	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」℡0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　℡0172-36-8605
川柳 ねやがわ	21日(日) 13時締切 運ぶ・契約・皮肉・自由吟	寝屋川市　産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
川柳 藤井寺	21日(日) 14時締切 泡・ショック・席題 共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303　鈴木いさお
川柳塔 すみよし	27日(土) 14時15分締切 旬・揉む・フレッシュ	住吉区民センター2階　集会室4 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
和歌山 三幸 川柳会	27日(土) 13時15分締切 元号・男・女	和歌山商工会議所　4階　第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市民 川柳会	28日(日) 14時締切 単・仕草・ソフト	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	28日(日) 13時締切 自由吟・ライバル・灯す・箱 席題	開発ビル　2F　砂場事務所 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
京都 塔の会	29日(月) 14時締切 データ・快・ひとり	ハートピア京都　京都市中京区烏丸丸太町 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勧修寺堂田70－16　桝本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

4月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	4日(水) 14時締切 面目・すばやい・どうする	奈良市立中部公民館　4F 奈良市上三条23-4　近鉄「奈良」駅④番出口　徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787　安土理恵
城　北 川柳会	6日(土) 14時締切 それなら・和解・論ずる 自由吟	旭区老人福祉センター　3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川　柳 とんだばやし 富柳会	6日(土) 14時締切 涙・ざっくり・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200 m 〒584-0043　富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
倉　吉 川柳会	6日(土) 14時締切 楽しい・川・ふんわり・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔 まつえ 吟　社	6日(土) 13時30分締切 呟く・伝統・飛ぶ・狂う	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222－1　相見柳歩
西宮北口 川柳会	8日(月) 14時締切 芽・つかむ・ぴちぴち 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602　梅澤盛夫
ほたる 川　柳 同好会	9日(火) 13時30分締切 旅・決める・たっぷり	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル　5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔 さかい	9日(火) 14時締切 育てる・ストレス・折句：みやこ	東洋ビルディング　4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5－171　矢倉五月
川　柳 あまがさき	9日(火) 14時締切 弾く・駅・そろそろ・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ　2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
あかつき 川柳会	12日(金) 14時締切 門出・若い・皮・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2F） メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2－312　前田紀雄
川柳大阪	13日(土) 14時締切 冗談・乾杯・テレビ	メトロ・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6　山崎珠生
六　甲 川柳会	13日(土) 14時締切 ぺらぺら・スタート・プライド 自由吟	六甲道勤労市民センター　5F　E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏
川柳塔 打　吹	13日(土) 13時30分締切 口紅・飛ぶ・ちょくちょく 席題	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
八尾市民 川柳会	14日(日) 14時締切 花衣・あざやか・頼る・雑詠	八尾市安中町3－5－1　渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之

柳界展望

★「津山川柳大会」は、1月20日津山福祉会館にて135名の参加で開催。同人成績。

特　選　両川　無限

御堂筋戦車はしらせてはならぬ

★平成30年度

鳥取文芸大賞　倉益　一瑤

虹色を作る絵の具を溶いている　（他4句）

★「第1回橿原市民川柳大会」は2月24日橿原市役所コンベンションルームで開催。同人成績。

秀　句　安土　理恵

挑戦そこから何か動き出す

★「第68回西大寺会陽川柳大会」が開催。同人成績。

天　位　平井美智子

車椅子母の軽さを押している

天　位　丹下　凱夫

荒波をうけてもドドドンと演歌

▽**ご芳志御礼**△

○「川柳さっぽろ」主幹岡崎守様より金一封拝受致しました。

○栃尾奏子さん（大阪市・同人）より金一封拝受致しました。

▽**訂正とお詫び**△

○1月号、P94上段11行目、吟作りに追れています→**追われて**います。P95中段14行目、**原**　姫だけ原点とする入試策→姫だけ**減点**とする入試策。同16行目、**参**　姫だけを原点とする入試策→姫だけを**減点**とする。

○3月号、P108「ひとこと欄」下段7行目、技歩→**技法**。

▽**新誌友紹介**△

河内長野市　**玉城　いつ**
紹介者　石田　隆彦

河内長野市　**落葉　年**
紹介者　石田　隆彦

大阪府　**奥野健一郎**
紹介者　片山かずお

泉佐野市　**樫葉　良子**

尼崎市　**山田　厚江**
紹介者　藤井　宏造

篠山市　**河南　利尚**
紹介者　堀　正和

北野　哲男

尼崎市　**清水　正子**
紹介者　藤井　宏造

常任理事会＝3月7日　①第7回誌上大会の中間報告②第25回まつり業務の進捗状況③持ち越し審議事項④定例確認事項。

次回常任理事会＝4月8日㈭AM10時～

同人特集　原稿募集

「平成を振り返る」と題して特集を組みます。内容は平成時代に関すること。

一行　18字　50行くらいまで。

タイトルは別に決めてください。

締切　4月20日

発表　6月号

★原稿の採否は編集部に一任願います。また内容を損なわない程度の修正をする場合もあります。ご了承ください。

第18回 宿場町やかげ川柳大会

とき 5月11日（土）開場9時
投句締切 11時30分 開会 13時

ところ 矢掛町農村環境改善センター（大ホール）
岡山県小田郡矢掛町矢掛3016−1
TEL 0866−82−0848
矢掛町役場南側・井原線矢掛駅より南西へ徒歩5分

会費 2000円（記念誌・参加賞・お弁当）
※ご祝儀拝辞

兼題と選者
「煙　突」　しばたかずみ　選
「叱　る」　光延　憲司　選
「さよなら」　牧野ねえね　選
「都　」　鴨田　昭紀　選
「ドボン」　斉尾くにこ　選
「答　」　小島　蘭幸　選
「当日発表」　丹下　凱夫　選

席題 各題2句

出句 欠席投句締切 4月30日（水）
欠席投句の方は、投句用紙またはA4程度の用紙に各題2句と、郵便番号・住所・氏名・電話番号を明記の上、投句料（1000円／定額小為替）を添え左記宛にお送りください

投句先 〒714−1212 岡山県小田郡矢掛町横谷1628−1 紫 しめの 宛
TEL 090−7136−8807

問合せ先 紫 しめの
田中 恵
TEL 0866−82−1256

主催 矢掛川柳会

第30回 時の川柳交歓川柳会

〈事前投句の部〉
2題 各1句 投句料 1000円
「時」 平山 繁夫 選
「記念」 矢沢 和女 選

投句先 〒675−0019 加古川市野口町水足1160 岡田 篤 宛

締切 4月5日（金）消印有効

〈当日の部〉
日時 5月19日（日）開場10時30分

会場 兵庫県中央労働センター2階大ホール
神戸市中央区下山手通6−3−28
TEL 078−341−2271

会費 2000円（記念品・発表誌呈）
※昼食は各自でお済ませください
（地下に食堂あり）

講演 「水たまりをとんだ」森中惠美子 氏

兼題 各題2句 欠席投句拝辞 投句締切 12時
「今　日」　片岡　加代　選
「違　う」　光延　憲司　選
「潜　伏」　井上　一筒　選
「映　画」　高瀬　霜石　選
「喜　ぶ」　赤井　花城　選
「雑　詠」　岡田　篤　謝選

特別課題 1句
「進　む」　志原喜美子　選

懇親宴 6000円 当日受付

問合せ先 矢沢 和女
TEL 078−981−5510

主催 時の川柳社

井笠川柳会 第20回笠岡大会

とき 5月25日（土） 開場9時30分
開会 午後1時 締切 午前11時30分

ところ 笠岡市保健センター（ギャラクシーホール）
笠岡市十一番町1−3
TEL 0865−62−5701
笠岡駅から④バスで伏越下車徒歩4分

課題と選者
◎第一部 事前投句「足」（2句）
西村みなみ・北川 拓治・大家 風太
3選者による共選
天位の中から1名に市長賞として句碑を贈呈。所定の用紙または便箋に2句併記のうえ、住所・氏名・電話・所属柳社明記投句料1000円と共に4月27日必着で送付のこと。

投句先 〒714−0081 笠岡市笠岡2289 井笠川柳会 宛

◎第二部 当日投句 （各題2句）
「パン」　長島　敏子　選
「吹く」　鈴木　公弘　選
「夢中」　濱邊稲佐嶽　選
「軽い」　小島　蘭幸　選
当日席題（1句）　高木　勇三　選

当日参加料 2000円（弁当・発表誌呈）
欠席投句拝辞

主催 井笠川柳会

編集後記

★新学期　少しがたつく
椅子もあり　　薫風

★一月は往く、二月は逃げる、三月は去る。平成も残すところ三〇日。この号が皆さまのお手元に届くころには新元号が発表されていることでしょう。改元詐欺が横行しているそうです。ご注意ください。さて、あなたにとって平成とはどのような時代でしたか。「平成を振り返る」と題して同人特集を組みます。112頁を参照の上ぜひご応募ください。

★「杭打って　一存在の谺呼ぶ」「花明り　私も鹿も薄眼して」伊丹三樹彦氏の俳句です。この2月に出された『身体髪膚』からの引用。氏は百歳。川柳塔を読まれた感想として「作品群はアイウエオ順に組んで」とのアドヴァイスも。また私の作品に対する感想も添えられており、身の引き締まる思いです。

★今月号の目次下「あぶその頃」お読み頂きましたか。残念ながら私は句会に参加したことはないが、会報誌「あぶその」全19冊は楓楽さんと久保田寿界さんから頂いていた。しかし私が死蔵するよりも活かして下さる人に、との思いから楽原道夫さんにお贈りした。断捨離等で川柳関係の資料が無残に処分されないよう願っている。

★週刊文春の新旧編集長二人の対談を読む機会があった。「文春砲」などと表される数々のスクープの舞台裏など興味深かったが、心に響いた言葉は「編集者ってすべては人間関係ですよ」。穴吹尚士さんの急逝により編集長を拝命して9年目。「過去を踏襲しない編集を」木津川先生から戴いた言葉と人間関係は私の財産。

★「さまざまの事おもひ出す桜かな」芭蕉の俳句だが、春愁という美しくも悩ましいことばもある。俳人ならずともしみじみと季節と向き合いたいと思うこのごろ。

（朱夏）

□今年は、「川柳雑誌社・川柳塔社創立95周年」を迎え、5年後の2024年には創立百周年を迎える。「番傘」は2008年に創立百周年記念として、『番傘川柳　百年史』を刊行している。川柳塔社は、創立95周年記念に『路郎読本』を刊行しているが、百周年となれば、やはり『川柳雑誌社・川柳塔社　百年史』を出版するべきだと思うのですが。

□本社句会で全没を食らった。それだけ選者さんの心を動かす句でなかったと、反省しきりですが、一ヶ月の重症を負った気分でありました。でも、たくさんの良い句が聞けて学ぶことができるのが、幸せであり、素晴らしいことだと思うのは私だけでしょうか。まだ、本社句会にご出席でないお方は、是非ご出席ください。多くの皆さんで大いに楽しみましょう。

（勝弘）

ひとこと

「ちょっと一言」

三月号から高瀬霜石さんの「初歩教室」が始まった。初回から二名の卒業生を送り出されている。流石である。霜石さんは、お上の（怖い先輩）お達しで担当を引き受けたそうである。私も、お上からのお達しで「句会燦燦」を引き受けた体験がある。私の場合は、岩崎眞里子さんの突然のご病気での交代であった。詳しいお話は聞かぬままスタートをする。後日「新思潮」誌で眞里子さんの句を拝見して仰天する。

あと何度くぐるのだろう針の波
暗闇にぽっと点っている絶望
立ち上がるまでの重さに母が居る

引き受けた「句会燦燦」を、やり通さねばならぬと心を引き締めたことであった。

アッと一年半が過ぎ、板垣孝志さんにバトンタッチをして、ほっとしている。改めて、道中、声援を送ってくださった川柳塔なら「篝火」の皆様に感謝いたします。怖い先輩のご健康を祈ります。

（弘津秋の子）

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお願いいたします。

作品募集

6月号発表（4月15日締切）

川柳塔（8句）小島蘭幸選
水煙抄（8句）西出楓楽選
愛染帖（2句）新家完司選
檸檬抄（2句）「柱」（川端一歩・山岡冨美子共選）
インスピレーション・ナビ（2句）大西泰世選
「大きい」小沢淳選
「トンネル」島田千鶴子選
「のろのろ」（3句）髙瀬霜石担当
一路集（2句）
初歩教室
初歩教室「のろのろ」は7月号発表

本社4月句会

とき 4月8日(月) 13時開場・13時40分締切
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ケ辻町19―12 電06・6772・1441
おはなし「　」松岡恭子氏
席題「　」岩佐ダン吉選
兼題「恩」中村惠選
「ぐにゃ」内藤憲彦選
「余る」長浜美籠選
「ひたすら」太田としお選
「芝居」小島蘭幸選
（各題2句以内）
会費 1000円
投句料 500円（切手可）

本社5月句会

7日(火) 午後1時から
兼題「絵」「疑う」「どうぞ」
「派手」「時代」

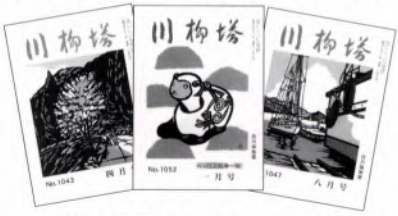
7月号
檸檬抄「添える」
一路集「虫」「知る」
初歩教室「内緒」

川柳塔WEB句会のご案内

課題「ラジオ」［なかはられいこ・川上大輪］共選
締切 4月20日 **発表** 4月25日頃
投句料 無料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

定価 八百円（送料97円）
半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）
二〇一九年（平成三十一年）四月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七 花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替 〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL（06）4800―3018
FAX（06）4800―3028
Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp
ホームページ https://www.bikenart.com
※事務所移転につき住所・電話番号が変わりました。

川柳塔のホームページアドレス https://senryutou.net

平成三十一年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一〇三号　川柳塔　四月号　定価　八百円（送料　九十七円）

ご応募ありがとうございました。入選の皆様には賞品をお送りいたします。

第12回 オニザキ「ごま川柳」入選句発表

川柳塔社　主幹　小島蘭幸 選

ごま粒といえどもそれぞれに命　三宅　保州
一ふりのごまから元気でる家族　飛田　陽子
和食文化ゴマパワーからワールドに　松山紀衣子
ゴマ跳ねるフライパンから春香る　水野　黒兎
検査値を褒められましたゴマ育ち　徳山みつこ
ごま和えが香る夕餉の大家族　毛利きりこ
玄関を開けるとゴマのいい匂い　木本　朱夏
ごま料理上手な嫁がきた至福　亀岡　哲子
母さんの胡麻和え越えた妻の味　澤井　敏治
命が伸びる味噌汁にごま朝の膳　松尾美智代
健康長寿信じていますごまパワー　平賀　国和
ごま好きの母の立派な骨密度　岩口のぞみ
何にでもごま入れアンチエイジング　西郷紀美代
日課ですごまを味方に一万歩　石橋　直子
ごま和えのひと品を添え仲直り　加藤江里子
インバウンドごまに魅せられお土産に　柳原　敏子
開けずとも解る娘からはゴマセット　川﨑ひかり
脳髄にタンゴ響かせごまを噛む　岸田　万彩
家族そろって健康賛歌ゴマ料理　岡本　勲
胡麻和えでさらに花咲く熟女たち　飛永ふりこ
ゴマを振るこれが私のルーティーン　糀谷　和郎

【準　特　選】
リュックから胡麻おむすびの虹が出る　古木　ひろ
ごまレシピ一つ加えた主夫の腕　三浦　強一

【特　選】
ごまだれを絡めて閉じ込める老化　平井美智子

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの
つきごま

長い間親しまれてきたオニザキの「すりごま」は、名称を変更し、パッケージを一新いたしました。
オニザキのすりごまは、元々すり鉢ですったゴマではなく、杵と臼を使った杵つき製法で出来た「すりごま」です。
今までと変わらぬ、風味豊かな味わいをご堪能ください。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050